樣であるし、二つ一處に在るのは、謂はゆる並頭で、瑞祥として珍重される。仔細に見ると、馬の蹄鐵に小さな穴を幾つも剜つた樣で、中なる粒は、魚の目が皎皎として微光を放つて居るが如くである。その粒を取り出すと、多きことは、珠の耳飾りを盤上に落せしが如く、その小なることは奇麗な琴のこまを嚢中に貯へた樣である。その粒は、しひなか、實があるか、外からは辨別することが出來ないので、甘いも、苦いも、食つた上の事である。殼を剝いで棄てると、恰も星が池上に散布して居る樣であるし、これを采り盡すと、餘香が池に殘つて居るだけである。やがて、立派な筵席に持ち出して澤山に用意してあると、玉蟲が擾擾として攢集して居る樣である。さきには、これを采りに出る小舟を看送つたが、今は、肴核の一として卓上に列べられて、清醥に對して居る。これを食へば、その味は、水ぶきの實に勝つて居るし、遠くから探がしに出る時は、蓼の花咲く汀岸の間に迷ふことがある。蓮の花を採つたのは、夏の初であつたが、實を食ふのは、秋の末で、物に感じては、自然、傷心を禁じられない。ここに、吳地の歌の節を以て、聊か蓮の實を詠じたが、一望すれば、煙水渺渺として、ゆくりなくも、わが愁を催すことである。

【餘論】通篇、唯だ形容刻劃を旨とし、內容よりは、修辭の技工を重んずることは、題の性質上、然らしむるところである。區區たる蓮の實を、これ程までに言ひこなしたのは、兎に角、作者の才力を觀るべきものであらう。

六言律詩

瓊姬墓

瓊姬の墓

夢別芙蓉殿頭。
夢に別る芙蓉の殿頭、

墮釵零落誰收。
墮釵零落、誰か收めむ。

土昏清鏡忘曉。
土は昏くして、清鏡、曉を忘れ。

月冷珠襦恨秋。
月冷かにして、珠襦、秋を恨む。

麋鹿昔來廢苑。
麋鹿、むかし、廢苑に來り、

牛羊今上荒邱。
牛羊、今、荒邱に上る。

香魂若怨亡國。
香魂、もし亡國を怨まば、

莫與西施共游。
西施と共に游ぶ莫れ。

【字解】【一】芙蓉殿　固有名詞ではなく、蓮の花の匂ふ水殿の義。【二】珠襦　處處に玉の飾を施したる下著、殉葬に用ひて棺中に入れる。

【通義】先秦時代の詩は、主として四言、次いで、兩漢の間に、五言・七言が發生し、後には詩の聲律を吟味した結果、唐になつて、律絕等、謂はゆる近體が出來たが、矢張、五言七言に限られて居た。元來、六言といふものは、漢語の特質かも知れぬが、妙に間が拔けて居て、作り惡く、又讀んでも面

白くない。理論上からいへば、五言七言と同じく、六言の律絶、卽ち近體も、古體も、ともに有り得べき筈であつて、現に唐人には、六言絶句の作を試みたものもあるが、萬首絶句を檢しても、三唐を通じて、三四十首しか無く、六言律は、未だ其作を見ず、これは、もつと後に成つて出來たものであらう。六言ばかりの古詩は、六朝の頃に見えるが、もとより少い。青邱には、六言の律絶が若干首づつあるが、おもふに、少壯の頃、專ら試作を事とした時に係るだらうと思ふ。瓊姬は、題下の原注に「夫差の女なり」とあつて、その詳は、前に卷十三、吳女墳の題下に注して置いたから、それを參照して貰ひたい。

【詩意】瓊姬は、夢に蓮の花匂ふ水殿に別れし儘、料らずも、死んで仕舞つたので、遺棄された金釵は、誰が拾ひ收めたか。一たび葬を送られし後は、土昏くして、棺中に入れた鏡も曇つた儘、曉を忘れたるが如く、月冷かなる處、殉葬せし珠襦は、秋の寂しさを恨んで居るであらう。間もなく、吳國は滅びて仕舞ひ、むかしは、麋鹿が廢苑を徘徊したが、今でも、牛羊は荒邱に上つて居る。瓊姬にして、若し靈あつて、亡國の遺恨に堪へぬならば、地下に於て、西施と一處に游ばぬが善いので、その西施こそ、汝の父の夫差を惑はし、遂に吳を亡ぼさしめた張本である。

甫里卽事四首

甫里卽事　四首

長橋短橋楊柳。　長橋短橋の楊柳、
前浦後浦荷花。　前浦後浦の荷花。
人看旗出酒市。　人は旗を看て酒市を出で、
鷗送船歸釣家。　鷗は船を送つて釣家に歸らしむ。
風波欲起不起。　風波、起らむと欲して起らず、
煙日將斜未斜。　煙日、將に斜らむとして未だ斜ならず。
絶勝苕中剡曲。　絶えて勝る苕中剡曲、
金虀玉膾堪誇。　金虀玉膾、誇るに堪へたり。

【字解】【一】苕中　卽ち苕谿、一名苕水。二源あつて、一を東苕といひ、天目山の陽に出で、東流して臨安・餘杭を經、又東北し、德淸を經て、餘不谿となり、北、吳興に至つて、霅谿となる。一を西苕といひ、天目山の陰に出で、東北流して孝豐を經、又北して安吉を經、又東して長興を經、吳興に至つて兩谿合流し、小梅・大淺、兩湖口より太湖に入る。岸を夾んで、苕花多く、秋時、水上に飛散して雪の如きが故に名づけたといふことである。【二】剡曲　前に卷五、剡源九曲に詳述して置いた。【三】金虀玉膾　南部煙花錄に「南人魚膾、金橙を細縷にして之を拌し、號して、金虀玉膾といふ」とある。

【題義】題下の原注に「甫里は松江の上に在り、陸魯望の居るところなり。余、その北渚に寓し、頗る煙波の勝を擅にす、爲に六言四首を賦す」とあり、甫里志に「今の崑山縣六直鎭」とある。

【詩意】長橋短橋、いづれの橋でも、その近くには、柳が枝垂れて居るし、前浦後浦、どこの入江でも、その中には蓮の花が今を盛りと咲き出でて居る。人は酒旗を眺めつつ、酒市より出で去り、鷗は

釣船を送りつつ、釣家に歸らしめる。風波は起りさうで起らず、煙は斜に成りかけて、まだ斜にならぬ。この地は、苕中剡曲に比して、勝れりと爲すべく、中にも、金虀玉膾は、殊に自慢の珍味である。

（一）唼唼綠頭鴨鬭。　唼唼として、綠頭の鴨鬭ひ、
（二）翻翻紅尾魚跳。　翻翻として、紅尾の魚跳る。
沙寬水狹江穩。　沙寬く、水狹くして、江は穩に、
柳短（三）莎長路遙。　柳短く、莎長くして、路遙かなり。
人爭渡處斜日。　人、渡を爭ふ處、斜日、
月欲圓時（四）大潮。　月圓ならむと欲する時、大潮。
我比（五）天隨似否。　われ、天隨に比して似たるや否や、
扁舟醉臥吹簫。　扁舟、醉臥して、簫を吹く。

【字解】【一】唼唼　口を動かす貌。【二】翻翻　身を翻す貌。【三】莎長　莎は溼地に生える草。【四】大潮　宋の姚寬の論に「日は衆陽の母、陰は陽に生ず、故に、潮は日に附く、月は太陰の精、水は陰類、故に潮は月に依り、日に隨つて應ず。月は陰に依つて陽に附き、朔望に盈ち、朏魄に消え、上下弦に虛、輝朒に息む、故に潮に大小あり」と見ゆ。【五】天隨　甫里志に「陸龜蒙の宅は、卽ち白蓮寺西邊一帶、龜蒙、一に天隨子と號す。高輪林啓の宅は、靑邱里に在り」と見ゆ。

【詩意】綠頭の鴨は、唼唼と口を動かして相鬭ひ、紅尾の魚は、翻翻と身を飄して獨り跳つて居る。沙は廣く、水は狹くして、江流は極めて緩かであるし、柳は長く、溼草は短くして、村路は遙に通じて居る。われは、天隨子に比べて、似たるや否やを知らざれども、醉うて、扁舟に臥して、簫を吹きすさんで居る。

（一）江廟漁郎晩祭。　江廟、漁郎晩に祭り、
（二）津亭（三）估客朝過。　津亭、估客朝に過ぐ。
鐘邊山遠水遠。　鐘邊、山遠く水遠く、
篷底風多雨多。　篷底、風多く雨多し。
饑蟹銜沙（四）落籪。　饑蟹沙を銜んで籪に落ち、
（五）黠禽映竹窺羅。　黠禽竹に映じて羅を窺ふ。
（六）丫頭（七）兩槳休去。　丫頭兩槳、去るを休めよ。
爲唱（八）吳儂櫂歌。　爲に唱へよ吳儂の櫂歌。

【字解】【一】江廟　江邊の祠廟。【二】津亭　舟つきの處に在る亭子。【三】估客　行商人。【四】落籪　籪は竹で造つて蟹を捕ふる器。【五】黠禽　わるずるい小鳥。【六】丫頭　髮を結んで居る少婦。【七】兩槳　二つの櫂、丁度ボートを漕ぐ樣に兩手に櫂を扱つて居るのであらう、劉禹錫の詩に「丫頭小兒蕩二畫槳一」とある【八】吳儂　儂は吳地の方言にて吾といふ意。吳儂は吳人に同じ。東坡の詩に「語音騎是帶二吳儂一」とある。

【詩意】漁郎は、晩に歸つて來て、江邊の廟宇に祭を爲し、商估は朝に出かけて、津頭の亭子に立ち寄りなどして居る。鐘の鳴り出づるあたりは、山も遠く、水も遠く、篷を掩うて居る其下には、風も

多く、雨も多い。飢ゑた蟹は、沙を銜んで罭の中に落ち、わるずるい小鳥は、竹に映じて網を窺ひ、容易にかからない。髮を結べる少婦よ、兩手に櫂を操つて漕ぎ去らず、わが爲に、吳地の舟歌でも歌つて聞かせて與れろ。

横網不遮過客。　網を横ふるも、過客を遮らず、
渡船時載歸僧。　船を渡して、時に歸僧を載す。
（一）炊菰飯勝炊稻。　菰を炊ぐの飯は、稻を炊ぐに勝り、
采蓮歌似采菱。　蓮を采るの歌は、菱を采るに似たり。
煙外晚村弄笛。　煙外晚村、笛を弄し、
沙邊夜店停（二）燈。　沙邊夜店、燈を停む。
短蓑醉拍（三）銅斗。　短蓑醉うて銅斗を拍つ、
我亦年來稍能。　われ亦た年來稍や能くす。

【字解】（一）炊菰飯　眞菰の實は米粒の如く、矢張、炊いで飯とすることが出來る、杜甫の秋興に波漂菰米沈雲黑とある。（二）停燈　燈火を消す。（三）拍銅斗　酒を汲む銅製の長柄杓な敵く、前に卷八、劉松年畫の詩中に注して置いた。

【詩意】網を張つた處で、通行の人の邪魔には成らず、渡し船は、時たま、托鉢して歸る坊さんを載せて行く。菰の實を炊いた飯は、米の飯よりも珍味であるし、蓮の花を采る歌は、菱を采る歌に似て居る。夕煙の彼方なる村里では、笛を吹いて居るし、江邊夜深き時、茅店では燈火を消して寢しづまつて居る。漁父は、短い蓑を著た儘、醉ふと銅斗を拍つて濁聲高く歌ふが、われも亦た年ごろ遣つて居る爲に、どうやら、出來る樣になつた。

【餘論】この四首は、六言絕句としては、可なりに出來て居るので、第一首の後聯、第二首の兩聯、第三首の前聯、第四首の後聯など、いづれも、新聲諧婉を以て推稱すべきものである。但し、第一第四兩首の前聯の如きは、その各句が、三言二句とも看られ得るので、六言として正格なる語法ではない。わが邦人の擬作などは、大抵、かういふ句ばかりで、その六言は、全然成つて居ないといつても善い。

七言律詩

大駕親祀方邱、選射齋宮、奉次御製韻

大駕、親ら方邱を祀り、齋宮に選射す、御製の韻に次し奉る

（一）奠璧方（二）壇曉祝（三）釐。　璧を方壇に奠して、曉に釐を祝し、
（四）豹竿風動從（五）靈祇。　豹竿、風は動いて靈祇よりす。

【字解】（一）奠璧　玉を供へる、前に卷十三、車駕南郊の詩中、璧陳孤月滿の句下の注に見ゆ。（二）方

(六)獻符多士歌昌運。 符を獻じて、多士、昌運を歌ひ、
(七)匽蹕諸蕃觀盛儀。 蹕に匽して、諸蕃、盛儀を觀る。
(八)郊射(九)貫侯初復古。 郊射、侯を貫き、はじめて古しへに復り、
(一〇)汾祠獲鼎未云奇。 汾祠、鼎を獲るも、未だ奇と云はず。
山川(一一)效順年(一二)多穀。 山川、順を效して、年に穀多し、
神答皇心定有期。 神の皇心に答ふる定めて期あり。

壇 地祇を祀る壇。天を祀るには壇を圓くするに對して、これは四角にする。【三】觀釐 釐は將來の福祉を祈ること。わが邦人が慶賀と同じ意味に漫然用ひて居るのは、恕すべからざる誤である。釐は幸福。【四】豹竿 豹を畫いた旗、前に卷一、上之回の詩中に見ゆ。【五】靈祇 祇は地祇。【六】獻符 漢書天文志に「漢の元年十月、五星、東井に聚まる、これ高皇帝受命の符なり」とあり。後漢書光武紀に「光武、先に長安に在りし時、同舍生彊華、關中より赤伏符を奉じて曰く、劉秀、兵を起して不道を捕へ、四夷雲集、龍、野に鬪ひ、四七の際、火、主とならむ」とある。天位に上る符命を獻ずる。【七】匽蹕 上林賦の注に「後從を匽といふ」とあり、夏官隸僕の注に「蹕とは、行者を止めて道を清うするを謂ふなり」とあつて、行幸に陪從すること。【八】郊射 郊外に於て射禮を行ふ。【九】貫侯 侯は的、的に射中てる。儀禮の鄉射禮に「凡そ侯、天子は熊侯白質、諸侯は麋侯赤質、大夫は布侯、畫くに虎豹を以てし、士は布侯、畫くに鹿豕を以てす」とあり、詩經に射則貫兮とある。【一〇】汾祠獲鼎 漢書に「武帝、汾陰に寶鼎を得て、甘泉に薦す。羣臣、壽を上り、陛下の周鼎を得るを賀す。吾邱壽王曰く、周鼎に非ず、と。上怒る。對へて曰く、天、有德に祚し、寶、自ら出づ。これ、天、以て漢に與ふ、これ漢鼎、周鼎に非ざるなり、と。上曰く、善し」とある。【一一】效順 順氣を致し、地變など絕無なること。【一二】多穀 穀物が善く出來る、卽ち豐年。

【題義】 明法傳錄に「洪武三年六月、親ら地祇を方邱に祀る」とある。選射は、禮記の射義に「天子、射を以て諸侯卿大夫士を選ぶ」とあつて、專ら射藝を較べること。齋宮は、親祀の際に於ける控所。この詩は、天子が親ら方邱に於て地祇を祀り、その儀畢りし後、齋宮に於て選射を爲し、そして御製の詩があつたから、謹んで、その韻に次し奉つたといふのである。

【詩意】 玉を方壇に供へて、曉に將來の福祉を禱ると、豹を畫いた旗の竿を風が吹き動かして、さながら、地祇が感應された樣である。今しも、多くの卿大夫士は、祥瑞の符命を獻じて、帝室の昌運を謳歌し、疆外の諸蠻族は、大駕に陪從して、この盛儀を拜見した。次いで、郊射を行はれ、見事に的に射中てるものもあつて、儀禮の復古、初めて此に全く、漢の武帝が汾陰で鼎を獲たことなどは、決して、奇とするに足らぬ。今後は、山川、順氣を致して、豐年が打續くに相違なく、神樣が天子敬虔の誠心に報答されることは、もとより期あつて、何等の疑を挾むにも及ばない。

奉迎車駕享太廟還宮　車駕、太廟に享して宮に還るを迎へ奉る

(一)鳴蹕聲中(二)曉仗廻。 鳴蹕聲中、曉仗廻る、
(三)錦裝(四)馴象踏紅埃。 錦裝馴象、紅埃を踏む。
半空雲影看旗動。 半空の雲影、旗の動くを看、

【字解】【一】鳴蹕 警蹕に同じ、行幸を豫告して道を清めしめる。【二】曉仗 曉に成つて還幸せられる儀仗。【三】錦裝 にしきの衣を

滿道天香識駕來。 滿道の天香、駕の來るを識る。
漢酎祭餘淸廟閉。 漢酎、祭餘、淸廟閉ぢ、
舜衣垂處紫宮開。 舜衣、垂るる處、紫宮開く。
禮成海內人皆慶。 禮成つて、海內人皆慶す、
獻頌應慚自乏才。 頌を獻ず應に自ら才の乏しきを慚づなるべし。

替せてある。【四】馴象 漢書武帝紀に「南越馴象を獻ず」とある。【五】天香 御氣に同じ、一種の尊い匂ひ。【六】漢酎 史記平準書に「漢儀注、王子、侯となる。侯は、歲ごとに戶口を以て、黃金を漢廟に酎す、皇帝、臨んで獻金を受け、以て祭を助く」とある。【七】舜衣 易に「黃帝堯舜、衣裳を垂れて天下治まる」とある。【八】紫宮 七略に「王者は、天を體して行ふ。明堂の制、內に太室あり、紫微宮に象る」とあり、春秋合誠圖に「紫宮は大帝室なり」とある。

【題義】 この詩は、天子が、夜、太廟に於て祖宗を祀り、儀畢つて、還幸に成るのを迎へて作つたのである。

【詩意】 太廟の祭祀すでに畢り、曉早く、警蹕の聲の中に、天子は、儀仗を整へて、還幸になり、錦の衣を著せた馴象までが、御供をして、しづしづと、紅塵を踏みつつ行く。半空の雲影は、旗の動くのであるし、滿道の尊ひ匂は、龍駕の近づくことを識別することが出來る。漢代の制に倣ひ、諸侯の酎金を得て祭儀を行ひし後は、淸廟の戶を閉し、やがて、紫宸に還幸になると、堯舜の如く、衣裳を垂れて、御座に就かれる。すでに、大禮が畢れば、海內の人が、競うて御喜びを申し上げるのに、頌を獻せむとして、その才に乏しきは、まことに、慙愧に堪へぬ次第である。

晚登南岡望都邑宮闕二首　晚に南岡に登りて都邑の宮闕を望む　二首

落日登高望帝畿。 落日、高きに登つて、帝畿を望む、
龍蟠山下見龍飛。 龍蟠山下、龍の飛ぶを見る。
雲霄雙闕開黃道。 雲霄雙闕、黃道を開き、
煙樹三宮接翠微。 煙樹三宮、翠微に接す。
沙苑馬閒秋獵罷。 沙苑、馬は閒にして、秋獵罷み、
天街車鬪晚朝歸。 天街、車鬪うて、晚朝歸る。
明朝欲獻昇平頌。 明朝獻せむと欲す昇平の頌、
還逐仙班入瑣闈。 還た仙班を逐うて瑣闈に入る。

【字解】【一】帝畿 王畿、卽ち御膝元の地、詩經に王畿千里、維民攸宅とある。【二】龍蟠山下 前に卷七、寓天界寺の詩中に引いて置いたが、鍾山龍蟠、石城虎踞とあつて、龍蟠山は卽ち鍾山。【三】黃道 漢書天文志に「日に中道あり、中道とは黃道なり」とあり、沈佺期の詩に、池開天漢分黃道とある。太陽の通過する道、轉じて天子御幸の道、卽ち御成り道。【四】三宮 東京賦に乃營三宮、布政頒常とあるに本づく、ここでは、南京宮城の正殿を指して云ふ。明紀事に「吳の元年九月癸卯、新內三殿成り、後に宮を爲り、乾淸・坤寧といふ」とあつて、三宮は、正殿と天子・皇后の宮とを併稱す。【五】沙苑 唐書高祖紀に「武德六年、華陰に如いて、沙苑に獵す」とある。【六】車鬪 元稹の連昌宮詞に揚家諸姨車鬪風とあつて、車が競爭する樣に疾走すること。【七】晚朝 遲く參內すること。【八】

仙班　大官の班列。【九】瑣闈　宮中の控所、ここでは翰林を云ふ。

【題義】南岡は地名か、それとも、南京の南なる岡陵か、よく分からぬ。この詩は、日暮に南岡に上り、京中の皇城を望んで作つたものである。

【詩意】夕日の西に斜なる時、高岡に登つて、帝畿の地を望んだ。鍾山は龍の蟠るが如く、その麓には、新に卽位された天子の皇城がある。雙闕は、高く雲霄に聳えて、その間に御成り路を開き、三宮は煙樹を帶びて、遠く山邱の翠微に連接して居る。秋獵、方に罷んで、沙苑の馬も閒暇であるし、遲く參朝を濟まして歸る人人は、都大路に車を急がせて、さながら競爭でもして居る樣である。予は、明朝、昇平の頌を獻ずる積りで、その時は、大官の班列を追うて、宮中の控所に參內するであらう。

(一)秦金不厭氣佳哉。　秦金厭せず、氣佳なるかな、
(二)紫蓋黃旗此日開。　紫蓋黃旗、この日開く。
殘雪已銷(三)鵁鶄觀。　殘雪すでに銷ゆ鵁鶄觀、
浮雲不隱(四)鳳凰臺。　浮雲隱さず鳳凰臺。
山如(五)洛下層層出。　山は洛下の如く層層として出で、
江自(六)巴中渺渺來。　江は巴中より渺渺として來る。
(七)六代衣冠總塵土。　六代の衣冠、總て塵土、
幸逢(八)昌運莫興哀。　幸に昌運に逢うて哀を興す莫れ。

【字解】【一】秦金不厭　厭は壓、秦の始皇の時、この地に天子の氣があるといつたので、金玉雜寶を埋めて之を鎭壓した、その詳は、前に卷十一、金陵雨花臺の詩中に注して置いた。【二】紫蓋黃旗　紫の車蓋、黃色の旗。ともに天子の御用になるものである。【三】鵁鶄觀　輔黃圖に「武帝の建元中、鵁鶄觀を甘泉宮の苑垣內に作る」とあり、杜甫の詩にも雪殘鵁鶄立多時とある。もとより、南京の宮城には無いが、宮內の高樓を指し、假りに比擬して云つたのであらう。【四】鳳凰臺　前に卷六、送袁憲史の詩中にも詳述したが、この臺は、南京の南に在つて、宋の元嘉中、王顗が異鳥の山に集まるを見て鳳凰となし、遂に臺を山に起して、かく名づけたのである。駱賓王の帝京篇に複道斜通鳷鵲觀、交衢直指鳳凰臺とあつて、青邱の鵁鶄鳳凰の對は、無論、これから轉化したのである。この中、鵁鶄觀は前に云ふ通り假設であるが、鳳凰臺は、實際、南京に在るのである。【五】洛下　洛陽。【六】巴中　一統志に「大江の源は、巴蜀の岷山より出で、湘漢豫章の諸水を合せて來り、都城の西南より西北を經、鎭江を過ぎ、東流して海に入る」とある。【七】六代　卽ち六朝、吳晉宋齊梁陳。この句は、李白の晉代衣冠成古丘より轉化したものであらう。【八】昌運　盛なる氣運。

【詩意】秦の始皇が黃金を埋めても鎭壓し切れず、この地に於ては、王氣長しへに盛に、現に天子が都を奠められて、紫蓋黃旗の開くを見た次第。鵁鶄觀に比すべき宮中の高樓の屋根には、殘雪消えて痕だに留めず、眼前には、名だたる鳳凰臺が聳えて居て、浮雲も之を隱さない。山は洛陽と同じく、近く層層として出で、江は巴蜀の方から渺渺として流れ來り、さすがに、形勝の固を成して居る。顧みれば、六代の衣冠は、すべて塵土に歸して仕舞つたが、今日幸にも興國の昌運に逢つたのであるから、決して悲哀の感を起してはならぬ。

【餘論】このあたりの七律數首は、いづれも、青邱が南京に居る時、作つたので、專ら昭代新興の氣運を謳歌して、務めて博大昌明の致を得やうとして居るが、これを唐人の早朝諸作等に比すると、夐然たる徑庭があつて、時勢遞降の影響は、斷じて否定することが出來ない。但し、この首の兩聯の如きは、氣象壯濶、且つ對仗精當で、勝を王賈岑杜に爭はむとし、まことに必傳の名作である。

奉天殿進元史

奉天殿、元史を進む

詔預(一)編摩(二)辱主知。　詔して編摩に預つて、主の知を辱うす、

(三)布衣亦得拜(四)龍墀。　布衣、亦た龍墀を拜するを得たり。

(五)書成一代存(六)殷鑒。　書は一代を成して、殷鑒を存し、

朝列千官備(七)漢儀。　朝に千官を列して、漢儀に備ふ。

(八)漏盡秋城(九)催仗早。　漏は盡きて、秋城、仗を催すこと早く、

燭光曉殿(一〇)卷簾遲。　燭は光つて、曉殿、簾を卷くこと遲し。

時淸(一一)機務應多暇。　時は淸くして、機務應に暇多かるべし、

(一二)閣下從容幸一披。　閣下從容、幸に一たび披け。

【字解】【一】編摩　編輯して整理する、眞德秀の大學衍義表に「菲薄を量らず。編摩に效はむと欲す」とある。【二】主知　聖主の知遇。【三】布衣　無官の身。【四】龍墀　宮中の丹墀。殿階の下で、しき瓦を鋪き詰めた處。【五】書成一代　元の一代の事實を書き上げる。從信錄に、「洪武二年二月、詔して元史を修し、宋濂王禕を召して總裁となし、汪克寛等十六人を徵して、同じく纂修せしめ、局を天界寺に開く。克寛等至る。上、これに諭して曰く、今、爾等に命じて纂修せしめ、以て一代の史に備ふ。務めて、その事を直述し、溢美する毋れ、惡を隱す毋れ、庶はくは、公論に合し、以て鑒戒を垂れよ」とある。【六】殷鑒　他人の失敗の跡を見て、自ら戒と爲すこと、殷人の鑑戒とすべきは、近く其前なる夏の滅亡が善き手本なりとの意。詩經に殷鑒不レ遠、在二夏后之世一と見ゆ。因に、胡濟菴の上二高宗一封事には、商鑒不レ遠に作つてあるが、商は卽ち殷の別名だからである。【七】漢儀　後漢書光武紀に「光武、司隸校尉を行ひ、僚屬を置く。時に三輔の吏士、皆これを見て歡喜して自ら勝へず、老吏、或は涕を垂れて曰く、圖らざりき、今日、復た漢官の威儀を見むとは」とある。元は、宋の後を承けたが、もと塞外の蠻族であるから、古制を破壞する傾向があつたのを、明の太祖に至つて、再び之を古しへに復したのである。【八】漏盡　水時計の音が盡きて、追追夜明けになる。【九】催仗　唐制に「殿下の兵衞を仗といふ」とあり、儀衞志に「朝會の仗、三衞番上、分つて五仗となし、皆刀を帶び、仗を捉へ、東西廊下に列し、毎日、四十六人を以て內廊閤外に立たしめ、號して內仗といふ。朝罷めば、仗を放つ。天子出づれば、細仗黃麾仗あり」と見ゆ。【一〇】卷簾　天子が殿上に出御に成つた時に、簾を卷き上げる。宋史呂端傳に「眞宗、すでに立ち、簾を垂れて舊臣を引見す。端、殿下に平立して拜せず、簾を卷かむことを請ひ、殿に升つて審視し、然る後、階を降り、羣臣を率ゐて拜し、萬歲と呼ぶ」とある。【一一】機務　萬機の御務め。【一二】閣下　高閣の下、閣は文書等を入れて置く小座敷。

【通義】明紀事に「吳の元年九月甲戌朔、太廟成る。癸卯、新內の三殿成り、奉天・華蓋・謹身といひ、左右の樓を文樓・武樓といひ、後に宮を爲り、前を乾淸といひ、後を坤寧といふ」とあり、從信錄に「洪武二年八月、元史成る。李善長等、表を奉じて進む」とある。この詩は、青邱等の編修した元史が愈よ脫稿したから、奉天殿に於て天子に呈進したことを賦したのである。

【詩意】予は、天子の知遇を辱うし、詔を受けて、元史の編修竝に整理に參與することとなり、布衣無官の身を以て、宮中の丹墀を拜することの出來たのは、おもひ設けぬ幸であつた。元の一代を書きしるした歷史は、ここに脫稿し、聖旨に從つて、本朝の殷鑒となし、やがて、朝廷に千官班列し、古しへの典儀を備へて、愈よ呈進することと成つた。そこで、水時計の音も絕え、秋城、天明け易くして、殿下の兵衞を促し、曉早く、殿上には燭光なほ輝く時しも、天子は出御になり、初めて御簾を卷き上げて、拜謁を賜はり、史稿呈上の事も、すつかり畢つた。今しも、太平の御世で、萬機の政務も、隨分御暇があらうから、小閣の下に於て、心しづかに、是非一閱を賜はりたいので、さうすれば、史臣等の苦心も、御分かりに成ることと思はれる。

九日陪諸閣老食賜糕次謝授經韻

九日、諸閣老に陪して賜糕を食し、謝授經の韻に次す

叨陪講席（一）接詞曹（二）。　叨りに講席に陪して、詞曹に接す、
（三）曉禁霜花點素袍。　曉禁、霜花、素袍に點す。
院貯圖書西（四）掖靜。　院には圖書を貯へて、西掖靜に、
雲連宮殿北山高。　雲は宮殿に連つて、北山高し。
故園莫憶黃花酒。　故園、憶ふ莫れ黃花の酒、
內府初嘗赤（五）棗糕。　內府、初めて嘗む赤棗糕。
最愛鳳（六）毛今復見。　最も愛す、鳳毛今復た見るを、
便令池（七）上一揮（八）毫。　便ち地上に一たび毫を揮はしめむ。

【字解】【一】講席　青邱が太子諸王に教授せしことを云ふ。【二】詞曹　文詞を以て仕ふる臣僚。【三】曉禁　禁は宮中。【四】西掖　中書を云ふ、前に卷七、送二禮部傅侍郎一の詩中に見ゆ。【五】赤棗糕　歲時雜記に「二社重陽、尙ほ糕を食ふ、而して、重陽を盛なりとし、大率、棗を以て之を爲る」とある。【六】鳳毛　南史に「謝靈運の子鳳、鳳の子超宗、文詞あり、帝、大に嗟賞し、謝莊に謂つて曰く、超宗、殊に鳳毛あり、靈運、復た出づ」とある。【七】池上　池は鳳凰池の略、卽ち中書省。魏晉以來、中書監令が詔書を草し、その地、樞近に在るを以て、多く寵任を受け、仍つて、これを鳳凰池といつた。晉の荀勗が中書監より尙書令に轉任した時、わが鳳凰池を奪ふといつたことがある。【八】揮毫　杜甫の詩に詩成珠玉在二揮毫一と見ゆ。

【題義】九日は九月九日、卽ち重陽。閣老は、內閣の諸老臣。糕は粉餠。謝授經、名は徽、前に數ば見えて居て、青邱と同じ經歷の人である。この詩は、重陽の日に、內閣諸老臣に陪し、宮中の御內儀より粉餠を賜はりしに因つて、これを頂戴し、翰林謝徽が第一に詩を作つたから、それに次韻したのである。

【詩意】叨りに太子諸王などの御講書に陪席して、詞臣輩に接することの出來たのは、まことに名譽の事で、曉早く參內すると、霜が白い官服に點じた。翰林は院中に圖書を貯へ、その處は、中書省中

に在つて極めて靜かであるし、雲は、宮殿に連り、秋の空は晴れて、北山が高く聳えて居る。今日は、重陽の佳節であるが、恩榮を荷ふ身は、格別、故園に於て菊を摘んで飮む酒など思ふ筈もなく、その上、御內儀から、赤囊を搗き込んだ粉餠を頂戴した。謝君は、丁度、同姓の古人謝超宗が再來した樣なもので、殊に鳳毛ありと稱すべく、もし、中書省に出仕して、一たび筆を揮つて詔敕を起草したならば、まことに、適任だらうと思はれる。

送沈左司從汪參政分省陝西汪由御史中丞出

沈左司が汪參政に從ひ、陝西に分省するを送る、汪は御史中丞より出づ

(一)重臣(二)分陝去臺端。　重臣、陝を分つて臺端を去る、
(三)賓從威儀盡漢官。　賓從威儀、盡く漢官。
(四)四塞河山歸(五)版籍。　四塞の河山、版籍に歸し、
百年父老見衣冠。　百年の父老、衣冠を見る。
函關月落聽(六)雞度。　函關月落ちて、雞を聽いて度り、
(七)華嶽雲開立馬看。　華嶽雲開いて、馬を立てて看る。
(八)知爾西行定回首。　知る爾が西行、定めて首を回らすを、
如今江左是長安。　今の如き、江左、是れ長安。

【字解】【一】重臣　汪參政を云ふ、名は廣洋。【二】分陝　公羊傳に「陝よりして東は、周公、これを主り、陝よりして西は、召公、これを主る」とある。【三】賓從　幕僚及び從者。【四】四塞河山　漢書項籍傳に「關中は山河を阻てて四塞」とある。關中は、函谷關內の地。【五】版籍　周禮天官小宰に「閭里に聽すに版圖を以てす」とあつて、その注に「版は戶籍」とある。【六】聽雞度　史記孟嘗傳に「夜半、函谷關に至る、關法、雞鳴いて客を出す、客に雞鳴を善くするものあり、雞皆鳴く、遂に關を出づ」とある。【七】華嶽　五嶽の一。【八】知爾　爾は沈左司を指す。

【題義】唐書百官志に「尙書省に左右司郎中あり」と見ゆ。分省とは、地を分つて巡察すること。この詩は、左司郎中沈某が參政汪廣洋に隨つて、陝西地方を巡察に出かけるのを送つたので、汪は、御史中丞から轉任したのである。

【詩意】汪參政は、陝を中分して、その西を主ることに成り、今次、臺閣から出でて赴任されるので、幕僚從臣、皆威儀を正し、さながら、漢官の典禮を見る樣である。關中は、山河四塞の地であるが、今や帝室の版圖に入り、父老は百年を隔てて、再び衣冠を見るを得た始末。函谷に月の落つる頃、雞の聲を聞いて關を過ぎ、華嶽雲開いて、萬仭の奇峰湧き出づる處、馬を立てて、ぢつと眺めて居られることであらう。沈君は、參政の御供をして西行するが、今は、この南京が帝都であつて、江左が長安であるから、途すがら、必ず首を回らして願望されるに相違ない。

【餘論】この首は、青邱七律中、屈指の名作であつて、兩聯は、虛實相配し、情景相得て、極めて巧

妙であるし、結末も振つて居る處から、完璧を以て稱すべきものである。

呉僧日章講師、赴召修蔣山普度佛事、既罷東歸、送別二首

呉僧、日章講師、召に赴いて、蔣山普度の佛事を修し、既に罷んで東歸す、送別二首

萬人擁座聽潮音。(一)　萬人、座を擁して潮音を聽く、
(二)寶刹曾迂玉駕臨。　寶刹、曾て玉駕を迂げて臨む。
佛法曉敷三藏祕。(三)　佛法、曉に敷く三藏の祕、
帝恩春及九原深。(四)　帝恩、春に及んで九原深し。
鍾山坐處花頻雨。(五)　鍾山坐する處、花、頻りに雨ふり、
(六)練浦歸時樹欲陰。　練浦歸る時、樹、陰らむと欲す。
擬問楞伽(七)嗟已別。　楞伽を問ふを擬し、すでに別るるを嗟す、
楚江飛(八)錫暮沈沈。　楚江、錫を飛ばして暮に沈沈。

【字解】【一】聽潮音　首楞嚴經に發海潮音、遍告同會とある。ここでは日章の說教を云ふ。【二】寶刹　蔣山の寺を云ふ。【三】三藏祕　岑參の題讀經堂の詩に結宇題三藏とある。三藏は、經論律の三。祕は、その祕奥といふ義。經は修多羅藏、論は阿毘曇藏、律は毘尼藏、藏とは諸勝を包藏する義。又佛說を經といひ、菩薩の說を論といひ、佛の威儀を戒律といふので、その詳は、釋氏要覽等に見えて居る。【四】九原　禮記に「趙文子、叔譽と九原に觀る」とある。ここの九原は、九泉、即ち黄泉ではなく、郭外を汎稱したのである。【五】花頻雨　前に卷一、登雨花臺の詩中に引いて置いたが、梁の雲光禪師が經を講じた時、天、これが爲に花を雨ふらし、因つて、臺を雨花と名づけた。【六】練浦　唐書地理志に「潤州丹陽に練湖あり」と記してある。【七】楞伽　佛經の名、前に卷五、楞伽寺の詩中に見えて居る。【八】飛錫　錫杖を飛ばして行脚する。

【題義】日章は呉人、釋鑑稽古續集に「用拙法師、諱は祖儞、字は日章、常熟張氏の子。法を竹屋淨法師に嗣ぎ、永定教寺に出世し、繼いで崑山の廣孝・嘉定の淨信に遷り、呉中に主教たること五十年に垂んとす。洪武の初、高行を選ぶに預かり、旨あり、天界寺に就いて法を說かしめ、上、數ば召して、禁中に入る。奏對して稱允せられ、慈忍法師の號を加賜せらる。後、賜うて故里に歸る」とある。蔣山は即ち鍾山、一統志に「蔣山は、應天府の東北に在り、漢の秣陵尉蔣子文、盜を逐うて此に死す。呉の大帝、爲に廟を立つ。子文祖、諱は鍾、因つて蔣山と改む」とある。普度佛事は、字面の如く、普ねく衆生を濟度する佛事、即ち大施餓鬼であらう。この詩は、呉の僧用拙が講師となり、天子から御招きに預つて上京し、鍾山の某寺に於ける大施餓鬼を行ひ、その事畢りし後、東に歸るを送つたのである。

【詩意】多くの人が法師の座を擁して、海潮音の如き聲を爲せる其說敎を謹聽して居る。それのみか、天子も、ある時、駕を枉げて、御寺に行幸されたことがある。佛法の有り難さは、曉に御經の祕旨を

世に敷かしめ、帝恩は、春に乘じて、深く郊外の地に及んだ。そこで、この法師が鍾山に坐せば、諸天より花の雨を降らし、これから、練湖に歸られると、木木の色さへ曇つて見える。予は、楞伽の深旨を質問したいと思つて居た處が、すでに御別れとなり、法師が江上に錫杖を飛ばす其聲も、暮に沈沈として、次第に遠くなるのは、いかにも、嗟歎に堪へぬ次第である。

故郷未解識清容。　故郷、未だ清容を識るを解せず、
却在金陵闕下逢。　却つて、金陵闕下に在つて逢ふ。
(一)中禁曾分齋鉢飯。　中禁、かつて分つ齋鉢の飯、
(二)上方時叩講筵鐘。　上方、時に叩く講筵の鐘。
一帆細雨迢迢浦。　一帆の細雨、迢迢の浦、
半塔斜陽靄靄峰。　半塔の斜陽、靄靄の峰。
相送師歸忽多感。　師の歸るを相送つて、忽ち感多し、
飛雲亦戀(三)舊依松。　飛雲、亦た戀ふ舊依松。

【字解】【一】中禁　禁中に同じ。【二】上方　寺の本堂の在る處、許渾の詩に上方有路應知處、疏磬寒蟬第幾重とある。【三】舊依松　もと依り添うて居た松樹。

【詩意】故郷に居る時分は、法師の清容を識らうと思はなかつたのに、却つて、金陵なる皇城の下に於て逢つたのは、まことに、不思議な因緣である。禁中に於て、法師に齋鉢の飯を賜はる時、お相伴をしたこともあるし、寺の本堂に於て、講筵を催さるる鐘の聲を聞いて、自分も參入したことがある。これより行く手には、一帆の細雨、迢迢たる浦波を度り、半塔の斜陽、靄靄たる峰頂に隱見するであらう。法師の歸り去るを送つて、何分、感慨に堪へぬのは、心なき飛雲だに、もと依り添うて居た松の木を慕はしく思ふからのことで、予も亦た早く故郷に歸りたいといふ心のみして居る。

清明呈館中諸公　清明、館中の諸公に呈す

(一)新煙著柳禁垣斜。　新煙、柳に著いて禁垣斜なり、
(二)杏酪分香俗共誇。　杏酪、香を分つて、俗、共に誇る。
(三)白下有山皆繞郭。　白下、山あり、皆郭を繞り、
清明無客不思家。　清明、客として家を思はざるなし。
(四)卞侯墓上迷芳草。　卞侯墓上、芳草に迷ひ、
(五)盧女門前映落花。　盧女門前、落花に映す。
喜得故人同待(六)詔。　喜ぶ、故人の同じく待詔するを得、

【字解】【一】新煙　寒食の後、新に焚き出した火の煙。劉長卿の清明の詩に萬井出新煙とある。【二】杏酪　杏仁湯。杏の仁を搗り潰した汁、その色白く、どろどろして極めて甘い。玉燭寶典に「今人、寒食の日、麥粥を煮、杏仁を研して酪となし、以て之に餳沃す」とある。【三】白下　門の名、普通略して白門といふ。【四】卞侯墓　前に卷六、

〜卞將軍墓の條に詳說して置いたが、晉の卞壼の墓で、冶城に在る。【五】廬女　江寧府志に「三山門外、むかし、妓盧莫愁の家あり、ここに、莫愁湖あり」と見ゆ。梁の武帝の河中之水歌に、河中之水向東流、洛陽女兒名莫愁、莫愁十三能織綺、十四采桑南陌頭、十五嫁爲盧家婦、十六生兒字阿侯とある。【六】待詔　翰林に出仕すること。

擬沽春酒醉京華。春酒を沽うて、京華に醉はむと擬す。

【題義】この詩は、洪武三年三月、清明の節に賦して、同じ翰林の諸公に呈したのである。

【詩意】新に焚き出した火の煙は、柳にまとひつきつつ、斜に皇城の御垣に棚引いて居る。今日は、杏仁湯の香を分つて、麥の粥にかけるといふので、俗間に於ては、これを誇りとして居る。見わたせば、白下門の外は、山丘亂峙して、城郭をめぐり、この清明の節に當つて、故鄉を思はぬ人はない。卞將軍の墓上には、芳草叢生して人を迷はしめ、盧女の門前には、落花が相映じて居る。舊知の諸君と、一處に翰林に待詔たることは、まことに喜ばしく、そこで、春酒を沽うて大振舞を爲し、ともに都の春に醉殺したいと思つて居る。

【餘論】白下、清明の十四字は、靑邱集中の第一の名聯で、兩句相承けて一意を爲し、流水の對に似て居る處が愈よ面白い。但し、他の數句、殊に後半が、案外詰まらぬ爲に、前後斤兩相稱はず、從つて、完璧と稱することの出來ないのは、まことに遺憾の至である。

金陵喜逢董卿、併送還武昌

金陵、董卿に逢ふを喜び、併せて武昌に還るを送る

兵後怱怱記別離。　兵後怱怱、別離を記す、
兩年音問不相知。　兩年音問、相知らず。
武昌樓下初來日。　武昌樓下、初めて來るの日、
幙府門前忽見時。　幙府門前、忽ち見るの時。
上國花開同醉少。　上國花開いて、同醉少く、
大江潮落獨歸遲。　大江潮落ちて、獨り歸ること遲し。
莫嗟握手還分手。　嗟する莫れ、手を握り、還た手を分つを、
此會從前豈有期。　この會、從前、豈に期あらむや。

【字解】【一】音問　音信を通じて互に起居を問ふ。【二】武昌樓　庾亮の南樓、前に卷四、始遷西齋の詩中にも見えて居た。【三】幙府山　江寧府志に「江寧府西に在り、晉の元帝、はじめて江を渡る、丞相王導、幙府を其上に建つ」とある。

【題義】この詩は、金陵に於て、董卿に邂逅し、又その武昌に歸ることを聞いて作つたので、悲喜相半する樣な感情を抒べたのである。董卿の名字等は不詳。

【詩意】兵亂の後、怱怱として、君と別離を爲したことだけは覺えて居るが、その後、二年の久しき

に亙つて、音信全く絕え、お互に少しも近況を知らなかつた。君は、頃ろ武昌樓下から御出でになつたさうで、ここに、幙府門前に於て、偶然御目にかかつたのは、まことに喜ばしい。しかし、上國の花、方に酣なるに際して、同醉する機會少きは憾むべく、大江潮落つる時、君は獨り歸られるが、隨分、ひま取ることであらう。しかし、手を握つたかと思ふと、又ぞろ、手を分つといふ今日の飽ッ氣なきことを歎息するにも及ばないので、ここに逢ふといふのは、從前、豫期して居なかつたことである。

送易左司分省廣西　易左司の廣西に分省するを送る

朝廷特念遠氓深。　朝廷、特に遠氓を念ふこと深く、
畫省分官出桂林。　畫省 分官 桂林に出づ。
油幕乍開依漢節。　油幕、乍ち開いて、漢節に依り、
卉衣時到貢蠻金。　卉衣時に到つて、蠻金を貢す。
四時花發山多暖。　四時花發して山多く暖に、
半日嵐開市尙陰。　半日嵐開いて市尙ほ陰る。
虞帝祠前黃竹裏。　虞帝の祠前、黃竹の裏、
相思莫聽鷓鴣吟。　相思、聽く莫れ鷓鴣の吟ずるを。

【字解】【一】遠氓　氓は民、詩經に氓之蚩蚩とある。【二】畫省　漢官典職に「尙書省、皆粉壁を以て古賢列士を畫く、畫省といひ、亦た粉署といふ」とある。【三】桂林　賈誼の過秦論に「南、百越の地を取り、以て桂林象郡となす」とあつて、桂林は即ち後の廣西。【四】油幕　油布で張つた天幕、韓愈の詩に從軍因云ㇾ樂、談笑靑油幕とある。【五】漢節　軍帥たる證符。むかしは、節旄といつて、牛毛を以て飾つてあつた。漢書張騫傳に「匈奴、騫を留むること十餘歲、妻を與へて子あり、騫、漢節を持して失はず」とある。【六】卉衣　即ち卉服、草木の葉を衣とする。後漢書南蠻傳贊に鏤體卉衣とある。【七】虞帝祠　一統志に「虞帝の祠は、桂林府城の北に在り」と見ゆ。【八】黃竹　李嘉祐の詩に靑楓黃竹入二寰江一とある。【九】鷓鴣　前に卷二、春江行に見ゆ、南方特有の鳥。

【題義】左司分省等は、前に送二沈左司一の題義に說明して置いた。この詩は、易某が左司郎中となつて、廣西を巡檢に行くのを送つたのである。但し、某の名字等は不詳。

【詩意】朝廷に於ては、遠方の人民を氣にかけられること、特別に深く、仍つて、尙書省より君を派遣して、巡檢の爲に、廣西に之かしめることとなつた。彼地に至らば、油幕忽ち開いた中に入りて、朝廷から授けられた節旄に倚るべく、又卉服の民が時時來て、蠻地に產する黃金を獻上するであらう。地は南邊に位して居る處から、四時花開いて、山も暖げに見え、天は雨勝ちであつて、半日山氣が開いても、市の方は、まだ曇つて居る。君は黃竹の中なる虞舜の祠に詣で、その前に立つて、此方を思うて居られるだらうが、鷓鴣の聲を聞けば、定めて傷心に堪へぬであらう。

【餘論】四時花發の十四字は、南方炎瘴の風土を巧に描き出した佳聯である。

送王檢校錡赴北平

王檢校錡の北平に赴くを送る

半年同舍客京華。　半年同舍、京華に客たり、

看遍龍河寺裏花。　看、遍ねし、龍河寺裏の花。

纔進史書朝日下。　纔に史書を進めて日下に朝し、

便紆官綬去天涯。　便ち官綬を紆うて天涯に去る。

平蕪遠塞秋驅騎。　平蕪遠塞、秋、騎を驅り、

衰柳遺宮晚噪鴉。　衰柳遺宮、晚、鴉を噪がす。

莫道窮邊成久別。　道ふ莫れ、窮邊、久別を成すと、

待君歸草玉堂麻。　待つ、君が歸つて草す、玉堂の麻。

【字解】【一】同舍　共に史官として天界寺に寄寓せしことをいふ。【二】龍河　江寧府志に「護龍河は、宋鑿つ、即ち舊城外三面の濠なり。今、昇平橋より上元縣に達し、後は虹橋の南に至り、大市橋を出でて止む」とある。【三】史書　即ち元史。【四】日下　日は人君の象、御前に同じ。【五】紆官綬　紆はまとふ、官綬は檢校の印綬。【六】平蕪　平原に草の茂れるをいふ。【七】窮邊　邊境のはて、北平を指す。【八】玉堂麻　玉堂は立派なる堂宇、宋の頃より主として翰林を指して云ふ。麻は黄麻、即ち詔書。

【題義】王檢校、名は錡、青邱と同じく元史の編修に參與した人、その詳は、前に卷七、天界玩月の詩中に見えて居た。北平は、一統志に「保定府蒲城縣、漢の北平の地」とあつて、即ち後の北京附近一帶の地である。王錡は、元史編纂終了の後、檢校に任せられ、北平に赴任したから、青邱は、乃ち此詩を作つて、その行を送つたのである。

【詩意】君とは、半年の間、京華の客として同舍に寄寓し、龍河に近き天界寺の花を眺め過ぐした。そこで、元史の編纂を畢り、これを呈上する爲に、御前に於て拜謁を賜はり、その後、君は間もなく檢校に任せられ、その官綬をまとうて、天涯に向つて旅だつことに成つた。かの地に至らば、平郊草茂つて遠塞に續く間を、秋、馬を驅ることもあらうし、衰柳、わづかに殘れる故宮を弔うて、晚に鴉の噪ぐのを聞くこともあらう。しかし、窮邊に往つた儘、久別を成す譯でもあるまじく、君の才は、到底棄て置かれるものでないから、やがて、召し出され、翰林に入つて、詔敕を起草することに成るに相違なく、予は、刮目して、その日を待つて居る。

京師秋興次謝太史韻

京師秋興、謝太史の韻に次す

柳外秋風起御河。　柳外の秋風、御河に起る、

京華客子意如何。　京華の客子、意如何。

伎同南郭知應濫。　伎は南郭に同じく、知る應に濫なるべし、

俸比東方愧已多。　俸は、東方に比して、愧、すでに多し。

【字解】【一】御河　前首に見えた護龍河、宮城の外濠である。【二】南郭　韓非子に「齊の宣王、竽を好む、必ず三百人合吹す。南郭先生、竽を知らざるもの、しかも、三百人の中に之き、竽を吹くを以て祿を食む。宜

(四)梁寺鐘來殘月落。　梁寺、鐘來つて、殘月落ち、
(五)漢宮砧斷早鴻過。　漢宮、砧斷えて、早鴻過ぐ。
不材幸得同趨闕。　不材、幸に同じく闕に趨るを得たり、
幾度珊珊候曉珂。(六)　幾度か、珊珊、曉珂を候す。

王薨ず、後王曰く、寡人竽を好む、一一これを吹かしめむと欲す、と。南郭、乃ち逃る」とあり、錢珝の表に試吹必濫、比南郭之先生」とある。【三】東方 即ち東方朔、漢書本傳に其言を記して「侏儒、飽いて死せむと欲し、臣朔、飢ゑて死せむと欲す」とあつて、その詳は、前に卷一、東門行の詩中に見えて居る。【四】梁寺 梁の武帝の時に建てた寺。前に卷七、贈楊滎陽の詩中、蕭寺の項に見ゆ。【五】漢宮 南京の宮闕、漢代に比擬して云ふ。【六】曉珂 曉に聞こゆる珂聲、即ち早朝する人の佩玉の響。

【題義】潘岳に秋興賦があつたので、後に秋興の二字を切り離して詩題となし、杜甫には、秋興八首がある。興は六義の興で、眼前見るところの風景に依つて、構想の端緒を得、後に自己の身生に繼到したので、唯だ漫然、風物に對して打興ずるのではない。この詩は、例の謝徽が京師秋興の作を見せたから、乃ち次韻を試みたのである。

【詩意】葉の黄ばんだ柳の外を吹く西風は、宮城の御溝より起り、滿目、すでに秋、都に客たるものは、如何なる感を爲すか。わが技能は、南郭先生の竽に於けると同じく、全く何も知らないのに、さも出來る顏をして居るのであつて、俸祿は、辱くも、東方朔に比して一層多く頂戴して居る。古寺の鐘が鳴り出すと、殘月いつしか落ち、宮邊に砧うつ聲が止むと、雁が逸早く飛び過ぐる。わが不材を以て、君と一處に朝臣に列して參朝することの出來るのは、まことに有り難き仕合、せめては、參朝に後れぬ樣にと念じつつ、曉早く出かける人の佩玉の珊珊たる響を、幾度も注意して待つて居る。

【餘論】後聯は青邱慣用の語法であつて、屢ば見ても厭かざる敍景の佳句である。

送祠江瀆使者　祠江瀆使者を送る

(一)源發岷峨萬里通。　源は岷峨に發して萬里通じ、
(二)函香迢遞問齋宮。(三)　函香迢遞、齋宮を問ふ。
神馳白馬(四)靈光近。　神は白馬に馳せて、靈光近く、
(五)祝奉玄牲(六)禮秩崇。　祝は玄牲を奉じて禮秩崇し。
驛下換船潮湧日。　驛下、船を換へて、潮、日に湧き、
廟前沈璧水廻風。　廟前、璧を沈めて、水、風を廻す。
重煩使者徼(七)多福。　重ねて使者を煩はして多福を徼む、
南國無(八)疵黍(九)稌豐。　南國疵なく、黍稌豐なり。

【字解】【一】源發岷峨 岷山と峨眉。揚子江は、源を此二山より發するといふ義。今日は地理が大分明かになつて、江源は、もつと遠隔の地なることが確められたが、青邱の頃は、普通かく信ぜられて居たのである。【二】函香 香を函に入れて捧げて行く。【三】齋宮 お祭の時の控所。【四】白馬 史記に「武帝、瓠子の河決に臨み、白馬玉璧を沈む」とある。【五】祝 巫祝、即ち祭官。【六】玄牲 黒色の牛を犧牲とする。

周禮牧人に「望祀、各〻其の方の色を以て、これを牲毛にす」とあつて、その注に「望は岳瀆を祭るなり」とあり、又閏靈侯の西嶽望幸賦に於レ是牲用レ特、酒尙レ玄、とある。【七】徵　求む。【八】無眚　眚は災害。【九】黍稌　稌は餅稻、酒を醸すに用ひ、詩經の周頌に豐年多レ黍多レ稌とある。

【題義】明典彙に「洪武二年正月、都督孫遇仙等十八人に命じて、天下の嶽鎭海瀆の神を祭らしむ。三年六月、躬づから祝文を署し、官を遣し、嶽鎭海瀆に至り、神號を更定するを以て告祭す」とある。江瀆の瀆は、說文に溝也とあり、爾雅に「澮に注ぐを瀆といふ」とあるが、大川の義にも用ひ、江湖淮濟を四瀆と稱して居る。すると、江瀆は、揚子江及び其支流の淮濟を併稱したので、それを祀る爲に、使者を派遣せられ、この詩は、卽ち之を送つたのである。但し、靑邱は、洪武三年には、都に居なかつたから、これは、二年、孫遇仙等を遣された其時であらう。

【詩意】揚子江の水源は、岷山・峨眉の兩處より發して、萬里に通じて居る。今、これを祀る爲に、香を函して、はるばる使者を遣され、一先づ齋宮に入ることになる。やがて、白馬を沈めると、江神は馳せ寄つて、靈光近きに顯はるべく、次に、祭官は黑牛を捧げて、その禮秩は、まことに尊貴である。水驛の下に船を換へて乘り出さうとすると、潮頭に曉日湧き出で、廟前に璧を投げ込むと、水上に風が吹き廻り、その感應は、まことに、あらたかである。されば、重ねて使者を煩はし、人民の爲に、多福を求め、この江の浸潤する處、南國一帶、何等の災害なく、黍や餅稻の十分に實のる樣に致したいものである。

送葉判官赴高唐時使安南還

葉判官の高唐に赴くを送る、時に安南に使して還る

(一)銅柱崖前使節過。　銅柱崖前、使節過ぐ、
貢隨歸騎入京多。　貢は歸騎に隨つて、京に入ること多し。
一官暫遣陪(二)成瑨。　一官、暫く遣して成瑨に陪し、
片語曾煩下(三)趙佗。　片語、かつて煩はして趙佗を下す。
曉拜賜衣辭(四)絳闕。　曉に賜衣を拜して絳闕を辭し、
秋催征棹渡黃河。　秋は征棹を催して黃河を渡る。
(五)政餘好賦登臨(六)詠。　政餘、好し賦す登臨の詠、
聞說州人最善(七)歌。　聞くならく、州人、最も善く歌ふと。

【字解】【一】銅柱　後漢書馬援傳に「援、交趾に到りて銅柱を立て、漢の極界となす」とある。【二】陪成瑨　後漢書黨錮傳に「汝南太守宗資は、功曹范滂に任かせ、南陽太守成瑨、亦た功曹岑晊に任かす。二郡謠を爲つて曰く、汝南太守范孟博、南陽宗資主二畫諾一、南陽太守岑公孝、弘農成瑨但坐嘯」とある。【三】下趙佗　漢書陸賈傳に「高祖、賈をして趙佗に印を賜うて、南越王と爲さしむ。佗、留めて與に飮むこと數月、曰く、越中、與に語るに足るものなし、生の來るに至つて、われをして日に聞かざるところを聞かしむ、と。賈、卒に佗を拜して南越王となし、臣と稱して、漢約を奉ぜしむ。高帝、大に悅び、賈を拜して大中大夫となす」とある。【四】絳闕　絳は赤色、皇宮の正門。

【五】政餘　政務の餘暇。【六】登臨詠　高い處に登つた歌詠。【七】善歌　孟子に「緜駒、高唐に處つて、齊右善く歌ふ」とある。

【題義】高唐は、山東東昌府に屬して居る。安南は、前に卷十三、送ニ安南使者杜舜卿還レ國の題下に詳述して置いた。この詩は、葉某が安南に使して歸り、それから、判官として山東の高唐に赴任するのを送つたのである。

【詩意】むかし、馬援が銅柱を立てて中國の極界とした其崖前を、使節は往復し、歸る時は、貢物を澤山受け取つて入京した。君は使節の下役として派遣されたが、丁度、岑晊が成瑨から一切委任された如く、萬事を取計つて、使命を全うし、又區區たる片言を以て、當年の趙佗に比すべき安南の國王をして屈伏せしめ、その功績は、まことに、素張らしいものである。そこで、歸つて來ると、曉早く參內して、衣服を賜はり、この度は、高唐に赴任するに就いて、秋の景色を眺めつつ、舟で黃河を渡られる。かの地に著任した後、政務の餘暇、登臨の歌詠を物されること、然るべく、元來、高唐は、むかしから、善歌を以て世に知られた土地である。

衍師見レ訪ニ鍾山里第一　衍師、鍾山里の第を訪はる

風雨孤舟寄ニ一僧一。　風雨孤舟、一僧を寄す、

遠煩相覓到ニ金陵一。　遠く煩はし、相覓めて金陵に到る。

靑衫愧レ逐塵中馬。　靑衫、逐ふを愧づ塵中の馬、

白拂看麾座上蠅。　白拂、看る、麾く座上の蠅。

事去南朝猶有レ恨。　事去つて、南朝、猶ほ恨あり、

夢歸ニ北郭一已無レ憑。　夢は北郭に歸つて、すでに憑るなし。

文章何用虛叨レ祿。　文章何ぞ用ひむ虛しく祿を叨にするを、

只合ニ從レ師問ニ上乘一。　只だ合に師に從つて上乘を問ふべし。

【字解】【一】寄一僧　一人の坊さんが乘り合せる。【二】白拂　白い毛の拂子、虞論の白蠅拂歌に、「華堂多ニ衆珍一、白拂稱ニ殊異一」とある。【三】北郭　道衍も、矢張、蘇州の北郭に居たので、前に卷三、春日懷ニ十友一の詩中に見えて居る。【四】上乘　傳燈錄に「自心を頓悟すれば本來清淨、元と煩惱なく、無漏智、自ら具足せず、この心、卽ち佛、これに依つて修するもの、是れ上乘禪」とある。

【題義】衍師は卽ち道衍。この詩は、靑邱の滯京中、道衍が上京して、鍾山里の第を訪問せしを喜んで作つたのである。

【詩意】風雨の中を漕ぎ上る孤舟には、唯だ一人の坊さんを寄せ、態態、私を尋ねる爲に、金陵まで御出に成つたのは、何とも感謝に堪へぬ次第。予は、相變らず、靑袍を著け、萬丈の紅塵の中に在つて、大官輩の乘馬の後を逐ふ意氣地なさ。師は、白い拂子で、物の見事に、席上の蠅を追ひ退けらる心地よさ。むかしの南朝は、事、すでに去れども、追憶すれば、恨なほ勝へず、夢に蘇州の北郭に

歸つた處で、まことに便りない始末。區區たる文章を以て、俸祿を頂戴して居るのは、相濟まぬことで、それよりも、師に從つて、上乘の禪を質問したいと常常心に思つて居る。

寄題安慶城樓　　安慶城樓に寄題す

(一)層構初成(二)百戰終。　層構、はじめて成つて百戰終る、
(三)憑高應喜(四)楚氛空。　高きに憑つて應に喜ぶべし楚氛の空しきを。
山隨(五)粉堞連雲起。　山は粉堞に隨ひ、雲に連つて起り、
(六)江引清淮與海通。　江は清淮を引いて、海と通ず。
遠客帆檣秋水外。　遠客の帆檣、秋水の外、
殘兵鼓角夕陽中。　殘兵の鼓角、夕陽の中。
時淸莫問英雄事。　時淸く、問ふ莫れ英雄の事、
回首長煙滅去鴻。　首を回らせば、長煙、去鴻を滅す。

【字解】【一】層構　城樓の層を爲して結構せられしを云ふ。【二】百戰終　明紀に「元の至正十八年正月、陳友諒、安慶を陷る。元の守將、淮南行省右丞余闕、これに死す。十九年八月、明、徐達を遣し、安慶を攻めて友諒を斬らしむ。參政郭泰、潛山に克つ。友諒、潛山の敗を憤り、乃ち詐つて會軍を以て期となし、自ら安慶に至る。趙晉勝、出でて迎ふ。友諒、これを殺す。時に、安慶は、長江上流の要地たり。これより先、晉勝、これを守り、頗る攻取し難し。友諒、晉勝を殺し、別將を用つて安慶を守らしめ、而して、晉勝の部將張志雄を以て、兵を帥ゐて、從つて饒廣を侵さしむ。志雄、友諒を懼む、故に龍江の戰、鬪志なく、來り降つて安慶を取るの策を獻ず。わが師、遂に安慶に克ち、巢湖の將僉院趙伯仲に命じて、これを守らしむ。尋いで、張定邊に破られ、安慶、復た陷る。二十一年、太祖、師を帥ゐて漢を伐ち、江州を拔く。友諒、武昌に走る。諸將、師を旋し、安慶を攻めて之を下す」とある。【三】憑高　高い處に登つて遠望する。【四】楚氛　楚地の氛祲、卽ち妖氛。左傳に「子木、陳より至る、晉楚各〻その偏に處る。伯夙、趙孟に謂つて曰く、楚氛甚だ惡しく難を懼る」とある。【五】粉堞　白堊の姫墻。杜甫の詩に城敧連粉堞、岸斷更青山とある。【六】江引清淮　一統志に安慶府の形勝を敍して「淮服の屏蔽、江介の要衝」とある。

【題義】この詩は、安慶の城樓に寄題したのである。寄題とは、その場處に往つて作らず、その風物を想像し、題詩を作つて之に寄することである。

【詩意】安慶の城樓は、幾層をなし、結構はじめて成れる時、百戰方に終り、高きに登つて遠望すれば、楚地の妖氛が、折から空しくなつたことを喜ぶであらう。四面の山は、白堊の壁に隨つて周遭し、かなり高くて、その勢、雲に連つて起るが如く、大江は、この地に於て、淸き淮水を引き入れ、やがて海に朝宗する。秋の水漲れる彼方には、遠客の帆檣、聯つて林立し、夕日の中には、わづか殘れる戍兵の鼓角を鳴らすのが聞こえる。今しも、太平の世になつたのだから、ここに雌雄を爭ひし英雄の事蹟などは問はずもがな、首を回らせば、夕煙が長く搖曳して、飛び行く雁の影も、見えなく成つて仕舞つた。

【餘論】遠客、殘兵の一聯は、作者得意の筆墨。篇中、淸淮といひ、時淸といひ、淸の字の複出は、如何したものか。時淸の二字の如きは、どうでも改め得ると思はれるのに、靑邱の才を以てして、な

ほ之あるは、聊か怪訝に堪へぬ。

送鄭都司赴大將軍行營

鄭都司の大將軍行營に赴くを送る

(一)上公承詔出(二)蓬萊。立馬風煙萬里開。
(三)賜履已分(四)無棣遠。(五)舞干還見(六)有苗來。
(七)牙前部曲多收績。幕下賓僚更倚才。
(八)後夜軍門知子到。(九)郎星應是近(一〇)三台。

上公、詔を承けて蓬萊を出づ、馬を立つれば、風煙萬里開く。
賜履、すでに分つて、無棣遠く、舞干、還た見る、有苗の來るを。
牙前の部曲、多く績を收め、幕下の賓僚、更に才に倚る。
後夜、軍門、子の到るを知らば、郎星、應に是れ三台に近づくなるべし。

【字解】【一】上公　大將軍を云ふ、王維の詩に、金貂列三公とある。【二】蓬萊　宮城に擬して云ふ。【三】賜履　左傳に「わが先君に履を賜ひ、東は海に至り、西は河に至り、南は穆陵に至り、北は無棣に至る」とある。【四】無棣　地名、上に見ゆ。【五】舞干　書經に「帝、乃ち誕に文德を敷き、干羽を兩階に舞はし、七旬にして有苗格る」とある。【六】有苗　三苗、卽ち苗族、漢族よりも先に支那に居た蠻族の名。【七】牙前　牙は本營に立てる旗、卽ち大將旗。東京賦に牙旗繽紛とあつて、その注に「古しへ、天子出づる、大牙旗を建て、竿上、象牙を以て之を飾る」とある。しかし、天子に限る譯でもない。【八】後夜　他夜に同じ。【九】郎星　後漢書明帝紀に「館陶公主、子の爲に郎を求むれども許さずして、錢十萬を賜ふ。羣臣に謂つて曰く、郎官は、上、列宿に應じ、出でては百里に宰たり、その人に非ざるあれば、民、その殃を受けむ、これを以て之を難んず」とある。郎は郎中、各省の次官の如きもの。【一〇】三台　三公に對應する天上の星。

【題義】この詩は、都司鄭某が大將軍の行營に赴くのを送つたのである。

【詩意】大將軍は、曩に詔を受け、宮城より出でて、今や行營に次し、馬を立つれば、萬里の風煙、忽ち開いて、望眼遠きに亙つて見える。大將軍は、むかし、わが先君に履を賜ふといつた通り、廣大な地域を分ち賜はつて、北は無棣の遠きに及び、又干羽を兩階に舞はし、戰はずして、苗族に比すべき暴戾なる蠻族をして來朝せしめた。されば、牙旗の前に列立せる部隊の中にも、功績を收めた人が多く、幕下の賓僚どもは、各その才を負うて、相當に働いて居て、大將軍の威望は、大したものである。そこで、君が軍門に著到されたならば、他夜、天上なる三台の星の近くに、一個の郎星を添ふるを見るべく、つまり、君は、大將軍に引き立てられて、遠からず、郎中に昇進すること疑なく、まことに、結構なことである。

送朱謝二博士進賀冬至表赴京師聽宣諭畢還吳

朱・謝二博士、冬至を賀するの表を進めて、京師に赴き、宣諭を聽いて畢り、吳に還るを送る

(一)驛騎(二)雙馳捧(三)綵章。

驛騎、雙馳して綵章を捧げ、

【字解】【一】驛騎　驛馬に乘つ

都門逢舊喜洋洋。　都門、舊に逢うて喜洋洋。
小儒方幸瞻天近。　小儒、方に幸とす、天の近きを瞻たるを。
遠使初來賀(四)日長。　遠使、初めて來つて、日の長きを賀す。
仗下丹墀(五)晴雪盡。　仗下つて、丹墀、晴雪盡き、
朝囘紫陌曉塵香。　朝より囘れば、紫陌、曉塵香し。
(六)承宣歸去難留駐。　宣を承けて歸り去る、留駐し難し、
乞報平安到故鄕。　乞ふ平安を報じて故鄕に到れ。

た使者。【二】雙鸞　二人ならんで臨せる。【三】綠章　神に捧げる文詞、李肇の翰林志に「凡そ道觀、青詞文を薦むる、青藤紙朱字を用ふ、これを綠章といふ、李賀、綠章封事詩あり」と見ゆ。ここでは、賀表の義に轉用してある。【四】賀日長　冬至を賀する。冬至は一陽來復といふし、又、これから日が段段に長くなる期節である。唐雜錄に「唐宮中、女功を以て日の長短を揆る、冬至後、日晷漸く長く、常日に比して一線の功を增す」とある。【五】丹墀　前にも數ば見えたが、西京賦に青瑣丹墀とあつて、注に「丹もて地に漆す、故に丹墀と稱す」とある。【六】承宣　敕諭を賜はる。

【題義】この詩は、朱・謝二博士が冬至の賀表を差し出す爲に、蘇州より上京し、敕諭を賜はつて使事全く畢り、仍つて、東に歸るを送つたのである。二博士の名字等は不詳。

【詩意】君等は、宿つぎの馬を竝び走らして、賀表を呈上する爲に上京された。われは、ここ都門に於て、舊友に遇つたのだから、喜洋洋として、自ら禁ずることが出來ない。君等は、小儒の身を以て、お側近く拜謁するを得たるは、まことに幸と稱すべく、遠くから使として、段段日の長くなるといふ冬至の佳節を賀する爲に來られたのである。やがて、儀衛の兵士が引き下ると、丹墀の邊、晴雪殘りなく消え去り、退朝すると、まだ朝早き頃で、都大路の塵さへ香ばしく覺える。すでに敕諭を頂戴した上は、全く事濟みで、ここに留まつて居る譯にも行かず、さつさと還つて行かれるが、とてもの事に、予の無事で居ることを故鄕の人人に知らせて貰ひたい。

送丕上人還四明育王寺　　丕上人の四明育王寺に還るを送る

(一)解夏還尋舊寺棲。　解夏、還た尋ぬ舊寺の棲、
滿船黃葉過長溪。　滿船の黃葉長溪を過ぐ。
袈裟影入秋山遠。　袈裟の影は、秋山に入つて遠く、
(二)舍利光懸夜塔低。　舍利の光は、夜塔に懸つて低し。
(三)鵝識講時常繞聽。　鵝は講時を識つて常に繞り聽き、
猿知定後不驚啼。　猿は定後を知つて驚啼せず。
却慚擾(四)擾塵中客、　却つて慚づ、擾擾、塵中の客、

【字解】【一】解夏　夏ごもりの明けること。禪苑宗規に「四月十五日、僧家結夏。天下の僧尼、この日、禪刹に就いて掛搭す、これを結制といふ、即ち結夏なり。夏は乃ち長養の節、外行に在つては、草木蟲類を傷つけむことを恐る。故に九十日安居し、七月十五日に至つて散じ去る、解夏となし、又解制といふ」とあり、張弋の詩に廬山解夏洪山去、自到

覺路如今去尙迷。　覺路、今の如き、去つて尙は迷ふ。

山遶一葉已飄とある。【二】舍利　火葬にした後の骨、普通には佛舍利の略語で、即ち釋迦の遺骨。法苑珠林に「舍利は西域の梵語、ここに骨身といふ。舍利に三種あり、一は骨舍利、色白し、二は髮舍利、色黑し、之は肉舍利、色赤し。もし佛舍利ならば、推打すれども破れず、もし弟子舍利ならば、推擊便ち破る」とあり、徐陵の雙林碑に「如法燒身、一分舍利は塔を冢に起し、一分舍利は塔を起して山に在り」と見ゆ。【三】鶴聽講時　兩京記に「淨影寺僧慧遠、一鶴を養ふ、講經を聞く毎に、堂に入つて伏聽し、もし他事を說かば鳴翔し去る」とある。【四】擾擾　紛雜の貌。

【題義】丕上人は高僧であらうが、その法諱閱歷等は分からぬ。一統志に「寧波府阿育王寺は、阿育王山中に在り、晉の義熙の初に建つ。一名廣利寺、梁の武帝、今の名を賜ふ。寺に阿育王造るところの眞身舍利塔あり、今、宸奎閣あり、宋の神宗の御書を貯へ、蘇軾、記を作る」とある。平重盛が前身、寺中の僧たりしことを聞いて、はるかに黃金を喜捨したのも、即ち此處で、むかしから、邦人にも知られて居る。この詩は、丕上人といふ僧が夏ごもりの爲め、久しく蘇州に居たが、その期、すでに滿ちたるに因つて、元の育王寺に還るのを送つたのである。

【詩意】夏ごもりの時期が過ぎた爲に、上人は、又ぞろ、元の寺に還られることとなり、長い谷川を舟で過ぎ行くと、黃ばんだ落葉が一ぱいになる。袈裟を著けたる其影は、遠く秋山の中に入つて消え、佛舍利の光は、夜、低い塔から立ち上つて居る。上人の飼つて置く鶴は、御說教の時をちやんと心得て居ると見え、圍繞して之を聽き、猿は、上人の定後に休憩されるを知つて、けたたましい聲をして

は啼かない。予の如きは、相變らず、擾擾として、紅塵中に彷徨する行客であつて、剋下、正覺の路は、尙は遠く、到底清果を得られぬことを、非常に愧づかしく思ふばかりである。

送吳生赴汴省其父指揮　　吳生、汴に赴き、其父指揮を省するを送る

（一）都亭（二）槐雨淨朝埃。　都亭の槐雨、朝埃を淨うし、

（三）彩服逢秋試剪裁。　彩服、秋に逢うて試みに剪裁。

（四）定遠未歸（五）雙節在。　定遠、未だ歸らず雙節在り、

（六）孝廉初去一船開。　孝廉、はじめて去つて一船開く。

城依（七）梁苑煙中閉。　城は梁苑に依つて煙中に閉ぢ、

河繞（八）隋隄樹裏來。　河は隋隄を繞つて樹裏に來る。

（九）家慶拜餘尋舊跡。　家慶拜餘、舊跡を尋ね、

夕陽騎馬過（一〇）繁臺。　夕陽、馬に騎して繁臺を過ぐ。

【字解】【一】都亭　前に卷十三、送高麗使張子温還國の詩中にも見ゆ。郭下の亭、蘇州府志に「城の西北隅に都亭橋あり」と見ゆ。【二】槐雨　槐は道路の並木、賈島の詩に槐雨滴霜碑とある。【三】彩服　前に數ば見ゆ、老萊子は彩衣を著て、父母の前で、子供の眞似をして游戲をした。【四】定遠　後漢書班超傳に「筆を投じて西征し、定遠侯に封ぜらる」とある。【五】雙節　前に卷十一、南園の詩中にも見ゆ。節度使の證信、唐書百官志に「節度使は軍旅を總べ、誅殺を顓にするを掌り、雙旌雙節を賜ひ、行けば節を建て、六纛を建つ」とある。【六】孝廉初去　晉書張憑傳に「憑、劉惔に詣る。惔、これを下座に處く、神意接せず、憑、自ら發せむと欲すれども端なし。會ま、

王濬、悛に就いて淸言し、通ぜざるところあり。濬、末座に於て之を判す、言旨深遠、一座皆驚く。悛、これを上座に延き、淸言日を彌つて留宿し、且に至つて之を遣す。濬、船に還る、須臾にして、悛、敎を傳へ、張孝廉の船を覓め、召して輿に同じく載す」とある。孝廉は、選擧の科名で、後漢以後のことである。【七】梁苑　史記梁孝王世家に「東苑を築くこと方三百餘里」とあり、一統志に「歸德府城東の梁園、一名梁苑、或は曰く、卽ち兎園、梁の孝王築く」とある。【八】隋隄　開河記に「隋の大業の年、汴河を開き、隄を築き、大梁より淸口に至る、龍舟過ぐるところ、香、百里に聞こゆ、今、隋隄と名づく」とある。【九】家慶　家中の慶賀、父母に謁すること。孟浩然の詩に「明朝拜二家慶一須レ著二老萊衣一」とあり、敖器之詩話に「唐人親と別れて復た歸る、これを家慶を拜すといふ」とある。【一〇】繁臺　一統志に「開封府城の東南に在り、卽ち吹臺なり、師曠建つ、梁の孝王、これを增築す」とある。

【題義】汴は、一統志に「開封府、隋には汴州といふ」とある。指揮は官名、今の師團長の如きものと思はれる。この詩は、吳某が汴州に赴いて、同地の指揮に官する其父を訪問するのを送つたのである。

【詩意】都の出はづれの宿場に於ては、朝の雨が竝木の槐に降り注いで、塵埃を淨うした。この時、君は、出發されるが、秋に逢うて、彩服を用意し、すでに剪裁を試み、定めて出來上つたのであらう。到る處歡迎されるが、今、ここから舟を出される。汴の地たるや、城は、古しへの梁苑に接近して、煙中に閉ぢ、運河は、隋代に出來た隄を繞つて、樹林の間に通じて居る。そこで、親を訪問して、その恙なきを賀せし後、城邊の舊跡を尋ね、夕日西に傾く頃、馬に騎して、繁臺を過ぐることもあらう。

【餘論】後聯は、汴の風土を盡して、復た餘蘊なきものである。

客舍夜坐

（一）樓角聲殘鎖（二）禁城。
燈花半落夜寒生。
啼鴉井上驚レ風散。
殘雪窓前助レ月明。
淸世莫レ嗟人寂寞。
中年漸怯（三）歲崢嶸。
酒杯詩卷吾家物。
客裏相親倍有レ情。

客舍夜坐

樓角、聲殘して禁城を鎖す、
燈花、半は落ちて夜寒生ず。
啼鴉井上、風に驚いて散じ、
殘雪窓前、月を助けて明かなり。
淸世、嗟する莫れ、人、寂寞、
中年、漸く怯る、歲、崢嶸。
酒杯詩卷、吾が家の物、
客裏、相親んで倍す情あり。

【字解】【一】樓角　城樓の上で吹く角、角はラッパの如きもの。【二】禁城　宮城。【三】歲崢嶸　歲の忙がしげに暮れ易きこと、鮑照の賦に「歲崢嶸而催レ暮」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】城樓の上に吹きすさぶ畫角の聲は、方に盡きて、はじめて宮城の諸門を閉ぢ、夜は大分更け

た處から、燈火の丁子も半ば落ちて、寒氣が俄に增して來た。鴉は、井上に居たが、颯と吹き來る風に驚いて、啼きつつ飛び散じ、殘れる雪は、窓前に堆く、月光を助けて、一しほ明るく見える。この淸平の御世に當つては、わが身生の寂寞を歎ずるに及ばないが、中年以後、次第に歲月の忙がしげにして暮れ易きに驚く外はない。しかし、酒杯と詩卷とは、わが家に特有の者であつて、客中相親んで、愈よ情あるを覺ゆるばかりである。

【餘論】後聯は閱世の語で、誰しも、成程と思ひ當ることがあらうと思はれる。それから、聲殘・殘雪とあつて、殘の字の複出は、いささか遺憾である。

送鄭山人聽宣諭後歸東陽　鄭山人の宣諭を聽いて、後、東陽に歸るを送る

(一)閤門傳詔山人拜。　閤門、詔を傳へて山人拜す、
淸曉蓬萊望彩霞。　淸曉、蓬萊、彩霞を望む。
(二)布褐朝天纔赴闕。　布褐、天に朝して、わづかに闕に赴き、
(三)蒲帆帶雨又還家。　蒲帆、雨を帶びて、又家に還る。
(四)沈侯詠罷樓沈月。　沈侯、詠罷んで、樓、月に沈み、
(五)婺女妝殘廟掩花。　婺女、妝殘して、廟、花を掩ふ。
無限朝廷仁恤意。　無限、朝廷仁恤の意、
殷勤歸向老農誇。　殷勤、歸つて老農に向つて誇る。

【字解】【一】閤門　閤は大門の側の潜り戸、特別に此處から引見する。【二】布褐　布の短衣、王維の詩に鄭戲匹夫節、布褐將白頭」とある。【三】蒲帆　がまで織つた帆、李嶠の詩に漲雨頽如林、蒲帆輕似葉とある。【四】沈侯詠罷　一統志に「金華の八詠樓は、府治の西南に在り、沈約、東陽の守となり、この樓を建て、八詠を賦し、時に絶唱と稱せらる」とある。【五】婺女　一統志に「金華山、金華城北に在り、金星・婺女星と華を爭ふ、故に名づく」とある。

【題義】鄭山人は、名字不詳、但し、山人といふ位だから、無位無官の隱逸者流であらう。東陽は、金華の屬縣。この詩は、山人の鄭某が、天子より召し出され、優詔を以て宣諭せられし後、金華の東陽に歸鄕するのを送つたのである。

【詩意】破格の謁見を賜ふことになり、閤門より詔を傳へて、鄭山人は、御前に拜をなし、曉早く蓬萊宮に立つて、彩霞の搖曳するを望んで居る。山人は、布の短褐を著たまま、入朝して闕に赴き、それが畢ると、優詔を拜して、雨に蒲帆をぬらしつつ、又ぞろ、家に歸られる。君の鄕里には、沈約の遺跡たる八詠樓があり、吟詠の聲、すでに罷んで、樓頭月沈み、翠羽明璫の妝も、稍や古りたまま、婺女てふ星を祀つた廟宇がある。廟は花に掩はれ、ともに、好個の詩境である。今次、君は朝廷仁恤の意、限りなきことを目睹されたから、歸國の後は、慇懃に、老農輩に向つて、その事を說き聞かされるであらう。

【餘論】後聯は、懷古の意を含んで、淒涼新婉、兩つながら之を兼ねたる佳聯である。

春來

客愁擬向春來減。
春到愁翻倍舊時。
走馬已無年少樂。
聽鶯空有故園思。
日光晶(一)晶濃熏草。
風力颺颺緩墮(二)絲。
(三)辟歷溝南酒家路。
共誰來往問花枝。

春來

客愁、春來に向つて減せむと擬す、
春到つて、愁、翻つて舊時に倍す。
馬を走らして、すでに年少の樂なく、
鶯を聽いて、空しく故園の思あり。
日光晶晶として濃かに草に熏し、
風力颺颺として緩かに絲を墮す。
辟歷溝南、酒家の路、
誰と共にか、來往、花枝を問はむ。

【字解】【一】晶晶　杜甫の詩に、晶晶行雲浮日光とあつて、その注に「晶、音旌、明かなり」とある。【二】墮絲　絲は游絲、かげろふ。【三】辟歷溝　江寧府志に「霹靂溝は、鍾山の南麓に在り、宋時、三月三日、此に祓禊す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】春の來るに遇へば、客愁も次第に減ずるだらうと思つて居た處が、春が來ると、愁は減ずるどころか、却つて、舊時に倍する位。馬を走らして、城中を乘り廻はしても、少年の頃の樣な快樂はなく、鶯を聞いても、空しく故鄉なつかしき思を增すのみである。日光は晶晶として、濃かに草に熏し、風力は颺颺として、緩かに陽炎を吹き墮す。霹靂溝の南なる酒家の路は、一寸好い處であるが、誰と共に來往して花を尋ねやうか、同游者が無ければ、自然興の少きを免れない。

送賈文學以郡薦赴禮部試畢歸吳

賈文學の郡薦を以て禮部に赴き、試畢つて吳に歸るを送る

疋馬都門候曉開。
(一)吳公新薦賈生來。
郡中方待傳(二)經業。
闕下先稱射(三)策才。
(四)寒食杏花江店雨。
春衣柳絮驛程埃。
慚予東掖(五)叨陪(六)講。

疋馬、都門、曉を候して開く、
吳公、新に賈生を薦めて來る。
郡中、方に待つ傳經の業、
闕下、先づ稱す射策の才。
寒食杏花、江店の雨、
春衣柳絮、驛程の埃。
慚づ、予が東掖、叨りに講に陪するを、

【字解】【一】吳公　漢書賈誼傳に「河南の守吳公、その秀才を聞き、召して門下に置く。文帝、吳公の治平、天下第一たるを聞き、徵して廷尉となす。乃ち、誼年少にして、頗る諸家の書に通ずるを言ふ。文帝、召して博士となす」とある。【二】傳經　杜甫の秋興に、「劉向傳經心事違」とある。【三】射策　試驗に及第すること、漢書音義に「僃策難問を

……作る、例、案上に置き、試者の意に在つて接射し、取つて、之に答ふ、これを射策といふ」とある。【四】寒食 前に數ば見ゆ。【五】東掖 李嘉祐の送王諫議の詩に高車左掖臣とあつて、金樓の掖に「東掖は、漢の宣政殿左掖」とある。【六】陪講 太子の講席に陪すること。【七】長干 劉逵の吳都賦の注に「建業の南五里に山岡あり、其の間の平地、吏民雜居し、長干と號す。中に大長干・小長干あり、皆相連る。大長干は、越城の東に在り、小長干は越城の西に在り。地に長短あり、故に大小長干と號す」とある。長干は、今の秦淮の南に當り、處處に出稼する商人どもの居住した部落。つまり、南京の郭外であるから、送別の場合など、矢張、ここまで來ることがある。

難把長干送別杯。　把り難し長干送別の杯。

【題意】この詩は、蘇州州學の敎授たる賈某が、郡の推薦を以て出京し、禮部に於て試驗を受け、それが濟んで、又蘇州に歸るのを送つたのである。賈某の名字は不詳、そして、試驗の結果は、この時、まだ分つて居ない樣である。

【詩意】君は匹馬に乘じて上京し、曉早く城門の開くを待つて入京したが、それは郡守が君の才學を推薦したからで、丁度、古しへの吳公が賈誼を引き立てたと同じである。君は、從來蘇州に在つて、經學を傳へ、天晴、その業を全うすべきものとして囑望せられ、今次、闕下に於ても、第一に及第すべきものと稱せられて居た。今歸り行く路すがら、寒食に際して、杏花咲き匂ふ江上の野店に雨そぼふり、春衣には柳絮を點じて、やがて驛路の塵となる。三月の半といへば、旅も惡くはない。遺憾ながら、予は宮中の東掖に於て、皇太子に講席に陪する爲に、長干の里まで送つて行つて、別れの杯を把ることも出來ず、取り敢へず、詩を以て餞とする次第である。

【餘論】後聯は、例の通り、作者得意の句格である。

休沐日期衍公游北山不果獨臥齋中
休沐の日、衍公と期して、北山に遊ばむとして、果さず、獨り齋中に臥す

休沐欣逢一日閒。　休沐逢ふを欣ぶ一日の閒、
擬邀禪客共登山。　禪客を邀へて共に山に登らむと擬す。
兩笻未許尋蘿徑。　兩笻、未だ許さず、蘿徑を尋ぬるを、
孤枕應須掩竹關。　孤枕、應に須らく竹關を掩ふべし。
歷歷遠峰塵土外。　歷歷遠峰、塵土の外、
蕭蕭深屋草萊間。　蕭蕭深屋、草萊の間。
安眠却勝清游樂。　安眠、却つて勝る清游の樂、
覺看斜陽燕子還。　覺めて看る、斜陽燕子の還るを。

【字解】【一】休沐 漢官儀には「五日、一たび洗沐を假すなり」とあり、唐人の詩に十日馳驅一日閒とあるが、明の時代も、矢張、何日にか一度休みがあつたらうと思ふ。もとより日曜といふものはない。休沐の沐は、髮を洗ふことである。史記日者列傳に「宋忠、中大夫たり、賈誼、博士たり、同日倶に出でて洗沐す」とあるを見れば、はじめは、實際この日に洗沐したものとも見えるが、後世では、必ずしもさうではない。【二】蘿徑 蔦の生ひ茂れる細路。

【題義】この詩は、役所の休日に際し、道衍と北山に游ぶ約束をして置いたが、何かの都合で、これを果さず、ひとり書齋中に臥して作つたのである。

【詩意】幾日か出勤して、ここに休沐の爲に一日の淸閒を得たのは、まことに喜ばしく、道衍法師を迎へて、共に北山に登る積りであつた。然る處、約束が外れて、二人の杖は、未だ蔦の生ひ茂れる細路を尋ぬることを許されず、仕方がないから、孤枕を擁し、竹間の門を閉ぢて偃臥する外はない。眺めやれば、遠い山山は、塵土の外に歷歷として見ゆれども、奧深き家は、草萊の間に、寂寂として、まことに物さびしげである。しかし、安眠の樂は、却つて淸游にも勝り、晝寢の夢醒めた時、夕日影の中に、燕の飛び還るを看るも、又格別の風情がある。

送内兄周誼還江上　内兄周誼の江上に還るを送る

憶奉綸音（一）趣赴朝。　憶ふ綸音を奉じて朝に赴くを趣す、
曾煩遠送過楓橋。　かつて遠送を煩はして、楓橋を過ぐ。
雲山方恨成暌（二）阻。　雲山、方に恨む暌阻を成すを、
雪夜俄來伴寂寥。　雪夜、俄に來つて寂寥に伴ふ。
（三）呉苑疏鐘沈晩樹。　呉苑の疏鐘、晩樹に沈み、
（四）楚江歸（五）榜逐寒潮。　楚江の歸榜、寒潮を逐ふ。
情親海内如君少。　情親、海内、君の如きは少し、
敢惜離（六）魂爲一銷。　敢て惜まむや、離魂爲に一銷するを。

【字解】【一】綸音　詔敕。
【二】暌阻　そむき隔つ。
【三】呉苑　長洲苑を云ふ。
【四】楚江　揚子江、その下流は古しへの楚地なるが故に云ふ、李白の詩にも洞庭西望楚江分といひ、天門中斷楚江開といつてある。
【五】歸榜　榜は櫂、歸舟に同じ。
【六】離魂　別離の際の心魂。

【題義】内兄は妻の兄。靑邱の妻は周氏、その同胞として、思齊・思義・思恭・思敬・思忠、五人の名が知られ、その中、思齊・思義の二人は兄、思敬・思忠は、たしかに弟であるが、思恭だけは、兄か弟か分からぬ。そして、これは皆字であつて、本名でない。ここに、誼とあるのは、誰の本名か、全く分からぬが、文字の上から考へると、多分、思義であらう。この詩は、妻の兄周誼が上京して過訪し、やがて、歸國せむとするに因り、その行を送つたのである。

【詩意】さきに、天子の詔を奉じて入朝を促された時、君は、態態、楓橋まで見送りに來られた。その後、雲山相隔てて、相逢ふに由なきを恨んで居た處が、雪の夜に俄に來訪し、わが寂寥に伴うて呉れたのは、まことに嬉しい。しかし、長洲苑の暮鐘、間遠に聞こえて、樹陰に沈むと思はる頃しも、君は、歸舟を揚子江に泛べ、寒潮を逐うて東に歸られる。かばかり情誼相親むものは、天下の廣きも、君の外に殆んど無いので、ここに、別に際して、自然銷魂することを免れない。

【餘論】 吳苑楚江の十四字は、例の佳聯。大全集には、歸榜を歸雁に作つてあるが、下の寒潮に對し、又、疏鐘との對の上からいつても、矢張、歸榜の方が切實である。

夜聞吳女誦經

夜、吳女の經を誦するを聞く

(一)雲窓月帳散(二)花多。 雲窓月帳、花を散ずること多く、
閒讀(三)金經夜若何。 閒に金經を讀んで、夜、若何。
嬌舌乍彈(四)鶯學語。 嬌舌乍ち彈じて、鶯、語を學び、
芳心已定(五)井銷波。 芳心すでに定まつて、井、波を銷す。
(六)尼師曾敎(七)青蓮偈。 尼師、かつて敎ふ青蓮の偈、
(八)女伴徒爲白紵歌。 女伴、徒に爲す白紵の歌。
聽處若迷(九)空色相。 聽く處、もし空色相に迷はば、
應須愁殺(一〇)病維摩。 應に須らく病維摩を愁殺すべし。

【字解】【一】雲窓月帳 雲月の來り映ずる窓帳、韓愈の華山女の詩に雲窓霧閣事恍惚とあり、羅隱の七夕の詩に月帳星房次第開とある。【二】散花 維摩經に「天女、天花を以て諸菩薩に散ずれば、即ち皆墮落す。大弟子に至つては、便ち著いて墜ちず。天女曰く、結習未だ盡きず、故に、花、身に著く。結習盡くるもの、花、身に著かず」とある。【三】金經 劉禹錫の陋室銘に可以調素琴閲金經とあつて、名文珠璣の注に「金經は佛經」とある。つまり、尊く有り難い意義を併せて云つたものであらう。【四】鶯學語 元稹の詩に新鶯語嬌小とある。【五】井銷波 井の水に波が靜くなる。孟郊の烈女操に波瀾誓不起、妾心井中水とある。【六】尼師 師たる比丘尼。【七】青蓮偈 權德輿の詩に曾通内典青蓮偈とある。金檀注には、これだけ引いてあるので、詳くしては居らぬが、佛經の事は、誰にしても、あまり知らない。青蓮は、青色の蓮花、珍らしく貴いもので、法苑珠林にも目如青蓮、眉方翠蓮とある。これは美人の姿貌の衰へ易きことを云つた偈であらうか。【八】白紵歌 前に卷一に、かういふ樂府題があつて、その題義に於て詳述して置いた、江南の歌吟。【九】空色相 般若心經に色卽是空、空卽是色とある。【一〇】病維摩 天竺の居士、毘耶離城なる方丈の室に病臥して居ると、佛が天女を遣して、花を雨ふらした。李商隱の詩に維摩一室雖多病、亦要天花作道場とある。

【題義】 說明に及ばぬ。吳女は、吳地の女であるが、美人といふ義をも含んで居るらしい。

【詩意】 雲の棚引く窓、月の差し込む几帳の間に於て、麗しき吳女が夜有り難い御經を誦讀すると、さながら、感應あつて、虛空より花が頻りに雨ふる樣に覺える。その嬌舌を彈ずるを聞けば、恰も雛鶯が囀ることを學ぶ樣でもあるし、芳心すでに定まつて、浮世の事を忘れた上は、井中波を收めた如く、靜に落ちついて居る。師の比丘尼は、かつて、青蓮偈を敎へて、花ひと時の春、決して長しへに存せざる旨を領知せしめ、女伴どもが白紵の流行歌を唱へても、何とも思はない。もし、吳女の誦經を聞いて、あらぬ野心を起し、色卽空の幻相に迷ふ樣なことがあつたならば、病める維摩は、その敎化の未だ足らざるを思うて、到底、愁を禁せぬであらう。

【餘論】 前聯は、一個有髮の比丘尼を描き出して、自ら阿堵傳神の妙がある。

送趙使君致仕歸別業

趙使君の致仕して別業に歸るを送る

久仕江湖白髮長。　久仕、江湖、白髮長く、
今年得許乞身章。　今年、乞身章を許さるるを得たり。
吏收封印朝辭郡。　吏は封印を收めて、朝に郡を辭し、
人賀懸車晩在鄉。　人は懸車を賀して、晩に鄉に在り。
家篋已添新著稿。　家篋、すでに添ふ新著の稿、
官衫未歇舊薰香。　官衫、未だ歇まず舊薰香。
南風別墅初歸處。　南風別墅、初めて歸る處、
應坐肩輿看種秧。　應に肩輿に坐して種秧を看るなるべし。

【字解】【一】久仕　久しく仕官する。【二】江湖　世間、魏闕に對して云ふ。【三】乞身章　罷免の辭令書、歐陽修の詩に晩節思深許乞身とある。【四】封印　封じたる官印、漢書陳平傳に「平、誅を懼れ、廼ち其金と印とを封じ、使をして項王に歸さしめ、而して、平は、間行、劍に仗つて亡ぐ」とある。【五】懸車　漢書薛廣德傳に「廣德、骸骨を乞ふ。安車・駟馬・黄金六十斤を賜うて東歸せしむ。沛の太守、これを界上に迎ふ、沛、以て榮となし、その安車を懸く」とあつて、賜はつた安車を懸けて記念とする。懸けたのは、何處か分からぬが、多分、里門であらう。【六】家篋　家に在る文庫、白居易の醉吟先生傳に「好事者、相過へば、必ず之が爲に先づ酒罍を拂ひ、次に詩篋を開く」とある。【七】官衫　禮服。【八】別墅　別荘、李商隱の詩に煙波別墅醉とある。【九】肩輿　舁ぐ輿、東坡の詩に肩輿任所適とある。

【題義】使君は、主として太守の尊稱。この詩は、太守趙某の職を罷めて、その別業に歸住するを送つたのである。何處の太守か、よくは分からぬが、多分、蘇州であらうし、又別業も、城外に在る樣である。

【詩意】君は、久しく仕官して地方を巡り、大分、白髮も延びたといふので、今年は辭職を聞き屆けられて、その辭令を頂戴した。そこで、吏が封印を收め去りしに乘じて、朝に郡を辭して去ると、人人は、安車を里門に懸けて記念とされるのが目出たいと云つて居る間に、君は、日ぐれに、別業に入つて仕舞つた。そこで、家に在る文庫の中には、逸早く新著の草稿を添へ、官衫には、むかし焚きこめた香が、まだ消えずに殘つて居る。五月南風吹き薰ずる別墅に、初めて歸つたことであるから、肩で舁く駕籠に乘つて、物珍らしく、田植ゑを見て居られるであらう。

游南峰寺、有支遁放鶴亭

南峰寺に游ぶ、支遁の放鶴亭あり

毎向人間望碧峰。　毎に人間に向つて碧峰を望む、
石門今得問幽踪。　石門、今、幽踪を問ふを得たり。
路緣風磴冷冷策。　路は風磴に緣る冷冷の策、
寺隔煙蘿杳杳鐘。　寺は煙蘿を隔つ杳杳の鐘。
窓下鳥來多墜果。　窓下、鳥來つて墜果多く、

【字解】【一】風磴　風の吹く石段、杜甫の詩に筠窕入風磴とある。【二】冷冷策　策は杖、滋方生の賦に杖輕策以行游とある。【三】香火　白居易の詩に思結空門香火緣とある。【四】戴顒　前に卷十二、過戴居士

亭前鶴去只高松。　亭前、鶴去つて只だ高松。

一龕願借依香火。(三)　一龕願はくは、借つて香火に依らむ、

莫道詩人非戴顒。(四)　道ふ莫れ、詩人、戴顒に非すと。

【題義】南峰寺は、前に卷五、同題の詩の題義中に詳述して置いたが、姑蘇志に「舊名天峰院、支硎の南峰に在り、卽ち古しへの支硎寺なり。記に云ふ、晉僧支道林、石室林泉に因つて報恩院を置き、唐の大中、改めて支山禪院となし、晉の天福、南峰の額に改む」とある。支遁、字は道林、そこに道林の放鶴亭がある。この詩は、卽ち南峰寺に游び、放鶴亭址を過ぎて作つたのである。

【詩意】予は、毎毎、塵の浮世に向つて、無益にも碧峰を望んで遙想を馳せて居たが、幸ひ今日ここに來て、石門の邊に幽蹤を尋ねることが出來た。その路は、風吹き下す石磴に傍うて上るので、杖さへも冷冷としてつめたく感じ、寺は煙れる蔦かづらを隔てて、鐘の音だに杳杳として響く。窓下に鳥が來ると、啄み落した木の實が多く、亭前には、鶴すでに去つて、只だ見上げるばかりの松の木が殘つて居る。願はくは、ここに一つの龕室を借りて、香火の緣を全うしたく、予は詩人であつても、決して、古しへの戴顒の如きもので無い譯でもなく、林泉の勝は、心から愛して居るところである。

【餘論】この詩、兩聯ともに面白く、まことに必傳の作ではあるが、望蜀の念は、結末の今少し振ふことである。

宅」の詩中に見えたが、南史に「顒は安道の子、宅は剡縣剡山の下に在り、又徙つて吳下に居る、士人、ともに爲に室を築く」とある。

送鄰僧淡雲歸笠澤　鄰僧淡雲の笠澤に歸るを送る

往來海上獨離羣。　海上に往來して獨り離羣、

雅稱身名是澹雲。　雅に稱ふ、身名是れ澹雲なるに。

經院(一)葉(二)深秋講散。　經院、葉、深くして秋講散じ、

香臺(三)鳥下午(四)齋分。　香臺、鳥、下つて午齋分る。

坐間山偈(五)曾同說。　坐間の山偈、かつて同じく說き、

別後鄰鐘不共聞。　別後の鄰鐘、ともに聞かず。

笠澤到時尋舊業(六)。　笠澤、到る時、舊業を尋ぬ、

(七)菱池漠漠雨紛紛。　菱池漠漠、雨紛紛。

【字解】(一) 經院　經を講ずる佛院。
(二) 葉深　落葉の深く積むこと。
(三) 香臺　寺の本堂。
(四) 午齋　晝の齋飯。
(五) 山偈　白居易の詩に雪中重寄雪山偈、問答歷聽四句中とあるから、雪山偈の略語であらう。雪山は、釋迦の苦行せしところで、その事に關係したものであらう。
(六) 舊業　むかし住んで居た菴室。
(七) 菱池　菱の生ひ茂る池。

【題義】笠澤は卽ち太湖。前に卷五、太湖の題下に詳述して置いた。この詩は、鄰近の寺に住んで居た淡雲といふ坊さんの太湖に歸るのを送つたのである。

【詩意】師は、從前、海邊に往來し、ひとり、羣を離れ、その名を淡雲といふのに相應しい樣である。經院に落葉深く散り布ける頃、講經の席、はじめて散じ、本堂の近くに鳥が澤山下りて來るのは、晝の齋飯の殘りを分けて遣るからである。師は、予と非常に親密であつて、座間に在る雪山の偈を共に講說したこともある位。これより、別れし後は、鄰寺の鐘も、一處に聞くことが出來ない。やがて、太湖に歸つて、もとの菴を尋ねると、菱の茂れる池は漠漠として廣く、加ふるに、秋の雨紛紛として、ひとり、寂しき思に堪へぬであらう。

次韻楊孟載署令雨中臥疾

楊孟載署令の雨中疾に臥するに次韻す

雙桐分蔭曉池淸。　雙桐、蔭を分つて曉池淸く、
乍喜新晴覺病輕。　乍ち新晴を喜んで、病の輕きを覺ゆ。
蛛曳林風吹欲斷。　蛛は林風を曳いて、吹けば斷えむと欲す、
鷺經沙雨洗偏明。　鷺は沙雨を經て、洗へば偏に明かなり。
吟多稍怯臨窓寫。　吟多く、稍や怯る、窓に臨んで寫すを、
臥久渾忘出市行。　臥すること久しく、すべて忘る、市を出でて行くを。
不道春歸踰一月。　道はず、春歸つて一月を踰ゆと、
起聞歌鳥倘疑鶯。　起つて、歌鳥を聞いて、倘ほ鶯を疑ふ。

【字解】〔一〕雙桐　二本の梧桐。〔二〕蛛曳　蛛は蜘蛛。〔三〕稍怯　怯は、億劫に思ふ意であらう。

【題義】楊孟載は卽ち楊基、前に卷三、春日懷十友の詩に見え、卷六には寄楊滎陽と題せる五古の長篇があつた。署令は、矢張、滎陽令であらう。すると、この詩は、楊基が滎陽の使署に居て、雨中臥疾の作があつたから、その韻に次して寄懷したのである。

【詩意】二本の桐の木は、影を分かつて、朝早く池に映り、池の水まで淸く見え、おまけに、新晴に逢うて、心うれしく、病氣も、どうやら直りかかつた樣な氣がした。蜘蛛は、林風に絲を曳いて、吹かれると切れむとし、鷺は平沙の雨にぬれて、洗へば色が一しほ分明である。詩が澤山溜まつた爲に、窓に臨んで書き直すことも億劫であるし、久しく、病に臥して居た爲に、市を出でて郊外に行くことを丸で忘れて仕舞つた。春去つて、すでに一個月を經、今は四月の末であるが、起つて、囀る鳥の聲を聞くと、矢張、鶯だらうと思つて居る。

【餘論】前聯は、工緻纖細である。明人あたりの雄渾壯闊を喜ぶものの目から見ると、かういふ句は、あまり小さ過ぎるかも知れぬが、そこに亦た一段の妙趣があるので、膚廓の弊を防ぐには、かくの如き句が殊に必要である。

送二呂志學秀才入道一

呂志學秀才の入道するを送る

學レ禮二（一）茅君一便入レ山。　茅君に禮するを學んで、便ち山に入る、
（二）黃冠初著稱二清顏一。　黃冠はじめて著けて、淸顏に稱ふ。
（三）杏園不レ羨（四）龍頭貴。　杏園、羨まず龍頭の貴きを、
（五）蓬島應レ思（六）鶴背閒。　蓬島、應に思ふべし鶴背の閒なるを。
窓下（七）棄レ棨辭レ婦去。　窓下、棨を棄て、婦を辭して去り、
壇前（八）受レ籙拜レ師還。　壇前、籙を受け、師を拜して還る。
（九）白雲知勝二（一〇）青雲一好。　白雲、知る靑雲に勝つて好きを、
（一一）揮レ手從レ今謝二世間一。　手を揮つて、今より世間を謝せむ。

【字解】【一】茅君　漢の茅盈、その弟衷と共に句曲山に入つて道を學び、仍つて、山を茅山と稱した。【二】黃冠　道士の冠、唐書李淳風傳に「淳風の父播、隋に仕へて高唐尉たり、官を棄てて道士となり、黃冠子と號す」とある。【三】杏園　進士及第の祝宴、秦中歲時記に「進士、杏花園に初めて會す、これを探花宴といひ、少俊二人を以て探花使となし、徧ねく、名園に游ぶ、もし他人、先づ名花を折り得れば、二使皆罰あり」と見ゆ。【四】龍頭貴　第一番で進士に及第すること。卽ち狀元。梁顥の及第謝恩の詩に、也知年少登科好、爭奈龍頭屬二老成一とある。【五】蓬島　卽ち蓬萊。【六】鶴背閒　南唐近事に「廬山の道士、忽ち鶴の降るあり、道士喜んで謂ふ、上昇すべし、と。山童に命じて之に乘ぜしめ、斃るるに至る。陳栻の詩に云ふ、龍腰鶴背俱無レ力、傳語麻姑借二大鳥一とある。【七】棄棨　棨は燭臺、韓愈の短燈棨歌に、牆頭君看短棨棄とある。【八】受籙　籙は符籙、道士になつた證信。上清玉晨道君紀に「籙を紫晨に受け、書を玉虛に受け、景を上淸に眺め、位、高仙を司る」とある。【九】白雲　山中に隱棲する。【一〇】青雲　種種の意味があつて、第一には德あつて盛名を負へるものに喩ふ。史記伯夷傳に「閭巷の人、行を砥き名を立てむと欲するもの、青雲の士に附くに非ざれば、惡んぞ能く後世に施さむや」とある。第二には、高位に在るに喩ふ、史記范雎傳に「賈、意はざりき、君、能く自ら青雲の上に致さんむとは」とある。後世では、登科の義にも用ふるので、曹鄴の詩に、一旦公道開、青雲在二平地一とある。第三には、隱逸に喩ふ。南史に「身、朱門に在つて、情、江海に同じく、形、紫闥に入つて、意、青雲に在り」とある。ここのは第二で、高位にあること。【一一】揮手　他をはね退ける貌。

【題義】呂志學、名は敏、北郭十才子の一で、前に春日懷二十友一の詩中に見えて居る。秀才は科目の名、入道は道士となること。この詩は、秀才の呂志學が、道士となる爲に立ち去るのを送つたのである。

【詩意】君は、茅君に禮することを學び、つまり、道士とならむが爲に、山に入らむとし、初めて、黃冠を被つた處が、眉目いとも淸き其顏に恰も似合ふ樣である。君は、秀才であるが、この上、試驗を受けて、進士の及第の祝宴に狀元の名譽を荷ふことを羨まず、それよりも、蓬萊に向つて飛行するに就いて、鶴の背の暢氣なることを思ふであらう。今まで、机の側に置いて、夜ごと、その下で讀書した燭臺も不用だといふので、これを窓下に投げ棄て、妻君に別れて、愈よ入道することになり、壇前に於て符籙を貰ひ受け、師を拜して還つて仕舞ふ。ここに至れば、白雲が青雲に勝ること遠きを知了すべく、今後、手を揮つて、この浮世を謝し、心のどかに仙家の道を學ぶことであらう。

送胡簿之陽朔

胡簿の陽朔に之くを送る

幾年桂管（一）去人稀。　幾年、桂管、去る人稀なり、

白髮憐君獨遠違（二）。　白髮、憐む君が獨り遠く違ふを。

過海定尋廻佔（三）舶。　海を過ぐれば定めて尋ねむ廻佔の舶、

出京纔脫舊儒衣。　京を出でては、わづかに脫す舊儒衣。

祠羞茘子（四）傳巫語。　祠は茘子を羞めて巫語を傳へ、

縣閉榕陰（五）放吏歸。　縣は榕陰に閉ぢて吏を放つて歸らしむ。

亦欲居夷（六）嗟未得。　亦た夷に居らむと欲するも嗟す未だ得ず、

漫看鴻鵠向南飛。　漫に看る、鴻鵠の南に向つて飛ぶを。

【字解】【一】桂管　桂林の管下、舊唐書に「江源、桂多し、故に、秦、桂林郡を立つ。武德四年、桂州總管府を置き、後、桂管經略觀察使を置いて桂州を治せしむ」とある。【二】獨遠違　ひとり、本意に違うて遠行する。【三】廻佔船　處處に廻航する商船。【四】茘子　即ち茘枝。本草に「茘枝は、南方に多く之あり、閩中を以て第一となし、蜀中、これに次ぎ、嶺南を下となす。その木、高さ二三丈、徑尺より合抱に至る。木の形、團團として、帷蓋の如く、葉は冬青の如く、四時凋まず、性、最も寒を畏る。甚だ久しきに耐へ、數百年を經て、猶ほ實を結ぶものあり。花は青白にして、橘花の如し。その實、喜んで雙、初は青く、漸くにして紅。狀、初生の松毬の如く、殼に皺紋あつて羅の如し。その肉、生時は白く、乾く時は紅、漿液甘酸、醍醐の如し。その核は、黃黑色にして半熟の蓮子の如し、精なるものは、核、雞舌香の如く、肌肉瑩白にして、氷雪の如し」とある。南方の珍果として珍重し、楊貴妃などは、殊に愛好し、驛馬を以て取り寄せたといふこと。因に、日本で云ふところの茘枝は、蔓生の謂はゆる草茘枝で、もとより、似て非なるものである。【五】榕陰　榕は樹の名、常綠喬木、高さ四五丈、閩廣の熱地に產し、幹、すべて枝を生じ、枝、復た根を生じ、下垂して地に至つて、又復た幹となる。故に、その蔭、極めて廣く、葉は橢圓平滑、花は淡紅、實圓にして小、無花果に類して居る。わが日本では、土佐の室戸崎、日向の青島に限つて、少しく叢生して居るが、臺灣では、到る處に蕃殖して居る。【六】居夷　論語に「子、九夷に居らむと欲す。或は曰く、陋、これを如何。子曰く、君子、これに居る、何の陋か之あらむ」とある。

【題義】胡簿の字並に閱歷は不詳。陽朔は、廣西桂林府の屬縣。この詩は、胡簿といふ人の陽朔に赴任するのを送つたのである。

【詩意】桂林管下は、閩廣に屬する遠隔の地であつて、多年、その地に赴く人も無かつたのに、今次、君は白髮頭の老年にも拘はらず、素志に違うて、ひとり、その處に赴任される。海を過ぐる時は、定めて廻航する商船を尋ねて、それに便乘されるであらうし、京を出づるや否や、もと著て居た儒衣を脫ぎ棄てられる。その地に於ては、神を祀る時に茘枝の實を供へ、そして、巫女より神語を傳へ、縣の役舍は、榕樹の陰に在つて、吏員が退出すると、門を閉ぢて仕舞ふ。その風土習慣は、もとより、大に此邊と違つて居る。その位ならば、孔子の云へる如く、九夷に居りたいと思つたらうが、何分、その志を達することが出來ず、鴻鵠が南に向つて飛ぶが如く、今しも、その地に赴かれるので、何分、感慨に堪へぬことである。

謁二甫里祠一

甫里の祠に謁す

(一)衣冠寂寞半(二)塵絲。　衣冠寂寞として、半は塵絲、
想見江湖獨臥時。　想ひ見る江湖獨臥の時。
(三)遁跡虛煩(四)明主詔。　遁跡、虛しく煩はす明主の詔、
感懷猶賦(五)散人詩。　感懷、猶ほ賦す散人の詩。
釣魚船去雲迷レ浦。　釣魚の船は去つて、雲、浦に迷ひ、
(六)鬭鴨欄空草滿レ池。　鬭鴨欄は空しくして、草、池に滿つ。
(七)芳藻一杯誰(八)爲奠。　芳藻一杯、誰が爲に奠せむ、
鼓聲只到(九)水神祠。　鼓聲只だ到る水神の祠。

【字解】【一】衣冠寂寞　祠中の神體となつて居る陸龜蒙の像を云ふ。【二】塵絲　塵を帶びたる蜘蛛の巣。【三】遁跡　この世から跡を遁ざける。【四】明主詔　前に卷十三、臨頓里十首の末首にも引いて置いたが、唐書陸龜蒙傳に「李蔚、盧攜素、ともに善し。國に當るに及びて、召して、左拾遺に拜せらる。詔、方に下つて、龜蒙卒す」とある。【五】散人詩　前に卷三、詠二隱逸一の題下にも注して置いたが、龜蒙は甫里散人と號して居た。散人とは、自ら檢束せず、世の用を爲さぬ人物の稱。莊子に「匠石歸る。櫟社、夢に見えて曰く、若と予と皆物なり、奈何ぞや、その相物たるや、而して、幾死の散人、又惡んぞ散木を知らむ」とある。【六】鬭鴨欄　家鴨をして喧譁をなさしめ、それを見て居る亭欄。龜蒙が鴨を愛養せしことも、本傳に見え、前に卷五、鬭鴨篇の詩中に引いて置いた。【七】芳藻　蘋藻に同じ。水中の草を采つて神前に供へる。【八】爲奠　奠は供へ物。【九】水神祠　甫里志に「水仙廟は、卽ち唐の儀鳳間の儒生柳毅なり。今上元鄕の土社神となり」とあつて、金檀は「邑志に載す、里中の廟は白蓮寺の西に在り、と。すでに廢して、僧舍となる、公の詩、正に此を指すなり」と云つて居る。

【題義】甫里祠は、甫里志に「唐賢陸龜蒙魯望を祀るなり、祠は白蓮寺の西に在り、先生卒後、その榜に葬り、遂に廟食す、卽ち其故宅なり」とある。なほ陸龜蒙の事蹟は、前に卷三、詠二隱逸一の詩中に詳述して置いた。

【詩意】祠中に祀られて居る先生の像は、衣冠寂寞として、半ば塵を帶びたる蜘蛛の絲にからめられて居るが、これに對すれば、その江湖に獨臥された時を想見せしめる。先生は、浮世を遁れて跡を晦まし、折角、天子から詔を下して徵し出されたが、すでに死んだ後で、間に合はなかつた位。そして、塵界の事を忘れ、一散人として世を送つたものの、時に感懷を詩に寄せたこともある。今や、魚釣りに出かけた其舟も去りし儘で、雲は入江に迷ひ、家鴨を鬭はせて見て居たといふ亭欄も、無くなつて、草が池に一ぱいである。ここに來て、蘋藻を薦め、且つ一杯の酒を酹する人だになく、却つて、水神の祠の方が參詣者が多くて、鼕鼕たる鼓聲に導かれて、いづれも其方に往つて仕舞ふ。かくて、高人の遺蹟寂寥甚しきは、まことに、感慨に堪へぬことである。

【餘論】後聯は、淒涼滿目、釣魚鬭鴨、ともに、龜蒙その人に切實である。

送二恩禪師弟子勤歸一レ開元寺一

恩禪師の弟子勤の開元寺に歸るを送る

山（一）衲經寒補雜（二）綃。　山衲、寒を經て雜綃を補ふ、
白雲高寺遍尋登。　白雲、高寺、遍ねく尋ね登る。
法（三）身已證浮（四）來佛。　法身、すでに證す浮來の佛、
宗旨曾傳化（五）去僧。　宗旨、かつて傳ふ化去の僧。
歸過江（六）城誰施飯。　歸つて江城を過ぎて、誰か飯を施す、
定（七）依舊院自懸（八）燈。　定は舊院に依つて、自ら燈を懸く。
明朝應恨千峰阻。　明朝、應に恨むべし千峰の阻つを、
欲問楞（九）伽已不能。　楞伽を問はむと欲するも、すでに能はず。

【字解】【一】山衲　山僧の著る法衣、馬戴の寄僧の詩に久披山衲壞とある。【二】雜綃　さまざまの綃、漢書東方朔傳に「館陶公主、請うて、將軍列侯の從官に金錢雜綃を賜ふこと、各〻數あり」と見ゆ。【三】法身　佛法を修め得た身。【四】浮來佛　題下の原注に「寺に二石佛あり、海上より浮び至る」とあつて、なほ其詳は題義の項に注することにする。【五】化去僧　遷化した高僧。多分、雪臆といふ坊さんを指したものらしく、これも、題義の項に注することにする。【六】江城　蘇州府城を指す。【七】定　禪定。【八】懸燈　法燈を懸ける、新に宗風を發揮する。【九】楞伽　前に數ば見ゆ、佛經の名、ここでは佛理の義に用ひて居る。

【題義】姑蘇志に「開元禪寺は、盤門內に在り、吳の孫權の母吳夫人、宅を捨てて建つ、永通師開山、通玄寺と名づく。寺に石佛二あり、相傳ふ、晉の建興二年、滬瀆海口の漁者、神光の水を照らし、天に徹するを見、且にして之を視れば、乃ち二石像、水上に浮ぶ。吳人朱膺等、迎へて、城に入り、通玄寺に置く。その後、漁者、又ここに帝靑石鉢を獲、遂に倂せて以て佛に供す。唐の開元中、今の額に改む。舊と城の北隅に在り。同光中、錢氏遷して此に置く。元の至治間、寺燬く、僧光雪臆・恩斷江重建す。又韋詩、綠陰生晝寂の語を取つて、綠陰堂を作り、竝に廣集文を爲る」とある。開元寺は、もと通玄寺といつたのを、唐の開元中、年號の字に改めたのである。恩禪師師弟の本名竝に其居た處等は、すべて不詳。この詩は、恩禪師の弟子の勤といふ坊さんが、大分修行した後でもあらうが、開元寺に歸るのを送つたのである。

【詩意】上人は、山僧の法衣、冬を經て、大分破れたといふので、布施された綃を取り出して、無細工に繕ひ、一切そんな事には無頓著で、白雲たなびく高山に登つて、遍ねく寺を尋ねた。勤上人の法身は、海を浮んで來た彼の石佛であることが證せられ、その宗旨は、すでに遷化された高僧輩に因つて大に宣揚されたといふことで、その相續者たる上人の任務は、なかなか重い。そこで、上人は、今次、愈よ恩禪師の膝元を辭して、歸寺されるが、蘇州城中を過ぐる時は、定めて、これを歡迎して、齋飯を施す人もあらうし、それから、元の寺に住み込んで、入定をなし、新に自ら法燈を懸けられるであらう。ただ一たび此に別るれば、明朝、忽ち千峰を隔て、楞伽等の諸經に見えた佛敎の奧義を質問することが出來ない樣になるのが、私に取つては、いかにも、殘念である。

送何記室游湖州

何記室の湖州に游ぶを送る

暮雨關城獨去遲。　暮雨、關城、ひとり去ること遲し、

少年心事劍相知。　少年の心事、劍、相知る。

故人當路輕貧賤。　故人、路に當つて、貧賤を輕んじ、

倦客逢秋惡別離。　倦客、秋に逢うて別離を惡む。

疏柳一旗江上酒。　疏柳一旗江上の酒、

亂山孤棹道中詩。　亂山孤棹道中の詩。

水嬉散後湖亭廢。　水嬉散ずる後、湖亭廢し、

此去煩君弔牧之。　ここを去つて、君を煩はして牧之を弔ふ。

【字解】【一】關城　關門に近き州城。【二】當路　要路に當る。【三】倦客　久客に同じ。【四】一旗　一片の酒旗。【五】水嬉　張協の七命に「乘鳧舟兮爲水嬉」とあつて、今の端艇競漕の如きもの。【六】弔牧之　唐詩紀事に「杜牧、字は牧之、宣城の幕に佐たり、湖州に游ぶ、刺史崔君、水嬉を張り、州人をして畢く觀せしめ、牧をして間行、奇麗を閱さしむ。垂髫の者、十餘歲なるを得たり。後、十四年、牧、湖州に剌たり、その人、すでに嫁して子を生む、乃ち悵として詩を爲つて曰く、自是尋春去較遲、不須惆悵怨芳時、狂風落盡深紅色、綠葉成陰子滿枝」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】雨瀟瀟として黄昏がる頃、君は獨り關門に近き州城を去らむが爲に、遲疑して居るが、少年の心事は、唯だ劍が相知るのみで、外の人には分からない。舊知の人は、要路に居るが、貧賤の者を輕蔑して、丸で相手にせず、久客は、秋に逢ふと、心うら寂しく、別れることを殊につらく覺える。君の行く途すがら、葉の疏になつた柳の木に近く、酒旗一片飄へる處、江上の亭を訪うて酒を酌むべく、亂山流を挾んで、奔湍相連る邊、孤棹舟を行つて、道中の詩を賦するであらう。湖州は、むかしの水嬉、すでに散じて、湖亭も、いつしか荒廢して居るだらうが、ここに、君を煩はして、當年の杜牧之を弔つて貰ひたいと思ふ。

【餘論】後聯は、道中の經過を詠出して、詩酒風流、自然、その中に具して居る。

江上寄丁校理昆季

江上、丁校理昆季に寄す

望裏煙生是子家。　望裏煙は生ず、是れ子の家、

草堂應近鶺鴒沙。　草堂、應に近かるべし鶺鴒の沙。

江汀每恨無舟渡。　江汀、每に恨む舟の渡るなきを、

野墅空憐有酒賒。　野墅、空しく憐む酒の賒るあるを。

半雨暮成風外雪。　半雨、暮に成る風外の雪、

【字解】【一】望裏　眼界の中。【二】鶺鴒沙　鶺鴒の飛んで居る河原。詩經に「脊令在原、兄弟急難」とあり、杜甫の詩に「草黄麒麟刺、沙暖脊令寒」とある。【三】野墅　郊外に在る別莊。【四】酒賒　賒は買つて貯へて置く。【五】半雨　ほんの少し

孤梅春動臘中花（六）。　孤梅、春は動く臘中の花。

相思尙隔前村遠。　相思、尙ほ前村を隔てて遠く、

獨倚柴門數去鴉。　ひとり、柴門に倚つて去鴉を數ふ。

ばかり降つた雨。【六】臘中花　臘は祭の名、これを行ふに因つて、陰曆十二月の異名となつて居る。年の中に開く花。

【題義】丁校理は、前に數ば見えて居た。昆季は兄弟。この詩は、青邱が婁江に寓居した時、丁氏の兄弟に寄懷したのである。

【詩意】眺望する眼界の中に炊煙の立ち上るのが、卽ち君の家で、その草堂は、鶺鴒の飛ぶ河原に近かるべく、その鶺鴒に因つて、兄弟の睦ましいことも推察される。ここから往かうと思つても、江汀に渡し船の無いのが、每每遺憾であるし、君の別墅に、折角、酒が買ひ溜めてあるのも、勿體ないことと思ふ。頃しも、一寸降つた雨は、寒氣に勒せられて、暮には風外の雪となつたが、全體が暖かいので、一株の梅は、臘月ながら、花も綻びて、すべて春の氣分を動かして居る。相思の心は、さることながら、川向ふに前村の遠く隔つて居るのは、どうにも仕方がなく、ひとり、柴門に倚つて、飛び行く鴉を數へるのみである。

送顧軍杏歸梁溪

顧軍杏の梁溪に歸るを送る

新柳休攀（一）短短條（二）。　新柳、攀づるを休めよ短短の條、

離愁（三）似雪未能銷。　離愁、雪に似て、未だ銷ゆる能はず。

春廻（四）廢苑還芳草。　春は廻つて、廢苑還た芳草、

人渡空江正落潮（五）。　人は渡つて、空江正に落潮。

德曜（六）宅前今獨去。　德曜宅前、今、ひとり去る、

平津（七）門下舊相招。　平津門下、舊と相招く。

重來莫在花開後。　重來在る莫れ花開くの後、

擬聽狂歌醉幾朝（八）。　狂歌を聽いて、幾朝にか醉はむと擬す。

【字解】【一】休攀　攀は、柳の木につかまつて之を折り取る。【二】短短條　まだ葉が十分に伸びず、從つて短く見える枝。【三】離愁　別離の愁。【四】春廻　春が立ちかへつて來る。【五】落潮　引き汐。【六】德曜　梁鴻の妻、孟光の字。前に卷三、詠隱逸の詩中に詳述して置いた。【七】平津　西京雜記に「平津侯公孫弘、すでに宰相となり、乃ち東閤を開き、客館を築き、以て天下の士を招く。その一は欽賢館といひ、以て大賢を待ち、次を翹材館といひ、以て大才を待ち、次を接士館といひ、以て國士を待つ」とある。【八】幾朝　幾日に同じ。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】ここに別を爲すに際し、まだ十分に枝の伸びない新柳を攀ぢて之を折るにも及ばず、別離の愁は、雪の如く、なかなか消えては仕舞はない。今しも、春が立ちもどつて來て、戰後の廢苑にも、又ぞろ芳草を生じ、君が渡り畢つた頃、空江は、引汐になるであらう。君は閶門の西なる孟光舊居の

前より出發されるが、さきに、公孫弘の如き宰相の門下に招き寄せられた人である。そこで、重ねて此に來るのは、花の開いた後でなく、まだ咲き出さぬ内にして貰ひたいので、さうすれば、春も、隨分長く、君の狂歌を聞きつつ、幾日も、打つづけて共に醉ふことが出來る。

白蓮寺、次韻杜進士喜予見過話舊之作

白蓮寺、杜進士が予の過ぎらるるを喜びて舊を話するの作に次韻す

不辭鳴(一)棹遠相尋。　辭せず、棹を鳴らして遠く相尋ぬるを、
欲向江齋(二)伴旅吟。　江齋に向つて、旅吟を伴はむと欲す。
百事未成年已長。　百事、未だ成らず、年、すでに長じ、
(三)幾時纔別夏將深。　幾時か纔に別れて、夏將に深からむとす。
(四)萱留倦蝶(五)連池綠。　萱は倦蝶を留めて、池に連つて綠に、
樹帶殘鶯滿寺陰。　樹は殘鶯を帶びて、滿寺陰る。
恐被老僧嫌滯礙(六)。　恐らくは、老僧に滯礙を嫌はれむ、
舊游休說更傷心。　舊游、說くを休めよ更に傷心。

【字解】【一】鳴棹　棹を鳴らす、舟で乘り出す。【二】江齋　江邊に在る書齋。【三】幾時　何時に同じ。【四】萱　わすれ草、本草に「冬月叢生、葉は蒲蒜の類の如くして柔弱、新舊相代つて、四時青翠。五月莖を抽いて花を開く、六出四垂、朝に開き、暮に蔫み、秋深に至つて盡く。萱、本と諼に作る、諼は忘るるなり、これを背に樹ゑ、玩味して以て憂を忘るるなり。憎嫉の婦人、その花を佩べば、男を生む、故に宜男と名づく」とある。【五】倦蝶　疲れたる老蝶。【六】滯礙　愚圖愚圖して居ること。

【題義】白蓮寺は、前に數ば見え、甫里なる陸龜蒙舊宅の近處に在る。杜進士、名字は不詳。この人が青邱の過訪を喜びて、併せて舊を話すといふ題で、一律を作つたものと見える。そこで、青邱が白蓮寺に游んだ時、それに次韻したのである。この題中、喜予見過の見の字は不用と思はれるが、原題に書いてあるのを其儘取つたから、かくの如く成つたのでもあらうか。

【詩意】舟を乘り出して、遠く來て尋ねる位の事は何でもないので、江邊の書齋に往つて、一處に客中の吟詠でも試みやうと思ふからである。顧みれば、この身、百事未だ成らざるに、すでに年が寄つて仕舞ひ、何時であつたか、まだ別れたばッかりだと思つて居る內に、夏は次第に深くならうとして居る。眺めやれば、忘れ草は、老蝶を留めつつ、大分茂つて、池の近くまで一面に綠色に見え、木木は、まだ鳴きを入れぬ鶯を帶びた儘、寺中一ぱいに影を成して居る。さはれ、ここに愚圖愚圖して居ると、老僧が邪魔だと思つて、いやな顏をするかも知れず、又一段の傷心を免れぬから、むかし游んだことなどは、互に話をせぬが善からう。

【餘論】前聯は、今昔を低徊して感愴盡きず、數ば見るも飽かざる佳語である。

期徐七游雲巖　　徐七と期して雲巖に游ぶ

憶與青山別幾時。　憶ふ、青山と別るる幾時ぞ、
雲松應恨鶴歸遲。　雲松、應に恨むべし鶴歸ること遲きを。
少知學道貧非病。　少にして知る、道を學び、貧病に非ざるを。
閒愛談禪偈是詩。　閒に禪を談ずるを愛す、偈は是れ詩。
女浣曉江煙淼淼。　女は曉江に浣うて煙淼淼、
人行暮苑麥離離。　人は暮苑を行いて麥離離たり。
明朝風雨還同往。　明朝、風雨、還た同じく往かむ、
恐負高僧石上期。　恐らくは負かむ、高僧石上の期。

【字解】【一】貧非病　家語に、「子貢、衞に相たり、駟を結び、騎を連れて、原憲を過ぐ。憲、弊衣冠を攝して之を見る。子貢曰く、子病めるか。憲曰く、財なきもの、これを貧といふ。道を學んで行ふ能はざる、これを病といふ。憲の若きは貧なり、病に非ざるなり」とあつて、同じ事が莊子にも、史記仲尼弟子列傳にも見えて居る。【二】偈是詩　白居易の贈永灌上人詩に正傳金粟如來偈、何用錢塘太守詩とある。【三】淼淼　正韻に「淼、音渺、大水の貌」とある。【四】高僧石上期　甘澤謠に「李源、圓澤と忘年の交を爲し、荊州より峽に上り、婦人の錦襠甕を負うて汲むを見る。圓澤曰く、これ某が託身の處、更後十二年、杭州天竺寺外に君と相見む、と。この夕、圓澤亡ぶ。後十二年、源、餘杭に詣り、その約するところに赴く。牧豎あり、竹枝の詞を歌ふ、乃ち圓澤なり、歌うて曰く、三生石上舊精魂、賞月吟風不要論、慚愧情人遠相訪、此身雖異性常存」とある。

【題義】徐七は、前に數ば見えた通り、例の徐賁。雲巖は、金櫃の注を缺いて居て、何處だか分からぬ。しかし、蘇州附近の一名勝たることは、勿論である。この詩は、徐賁と約して、雲巖に同行するに就いて、前以て作つたのである。

【詩意】青山に一たび別れてより、幾許の時を經過したか。雲に聳ゆる松は、鶴の歸り來ること遲きを恨む樣に、矢張、われ等をも待つて居るであらう。すでに、道を學ぶ上は、財なきは貧であつて、そは病といふべきものでないといふ位な事は、夙に心得て居るし、禪を談ずる時、偈が即ち詩であつて、詩禪の一致といふことも、もとより了解して居る。雲巖に至る途中の景色はといへば、曉早く、煙と共に渺渺たる江水に臨んで、賤の女が洗濯をして居るし、日暮、廢苑の跡を行けば、折から、麥が長じ、その葉は離離として晩風に打靡いて居る。明日は、たとひ、風雨であつても、屹度、同行しやうと思ふので、然らざれば、高僧と石上に於て會見しやうと云つた其期に負くことに成るかも知れない。

賦得寒山寺送別　　寒山寺を賦し得て、別を送る

楓橋西望碧山微。　楓橋、西に望めば碧山微なり、
寺對寒江獨掩扉。　寺は寒江に對して獨り扉を掩ふ。

【字解】【一】楓橋　寒山寺の近傍に在る。

船裏鐘催行客起。　船裏、鐘は行客を催して起さしめ、

塔中燈照遠僧歸。　塔中、燈は遠僧を照らして歸る。

漁村寂寂孤煙近。　漁村寂寂として孤煙近く、

官路蕭蕭衆葉稀。　官路蕭蕭として衆葉稀なり。

須記姑蘇城外泊。　須らく記すべし、姑蘇城外に泊し、

烏啼時節送君違。　烏啼の時節、君を送つて違ひしを。

【二】碧山　靈巖山あたりを指して云ふのであらう。

【三】遠僧　遠くから歩いて來る僧。

【四】官路　驛路をいふ。

【題義】姑蘇志に「寒山禪寺は、閶門の西十里、楓橋の下に在り。宋の太平興國の初、節度使孫承祐、浮圖七層を建つ。相傳ふ、寒山拾得、かつて、ここに止まる、故に名づく」とある。寒山寺が寒山拾得に因つて名を得たことは、世人の餘り知らぬことであらう。寒山寺は、唐の張繼が楓橋に泊して、例の月落烏啼の詩を作つて、その中に讀み込んでから、非常に有名に成つた。むかしは、蘇州から出發するのに、城内の溝渠から出船し、送別やら何やらで、隨分手間どつて、日本里數で、わづか一里を經て、ここに來ると、日が暮れるから、一泊するといふ樣になつて居たらしい。なほ、月落烏啼の詩に就いては、五更の鐘の有無を論ずる外、起句が實景であるか否やに就いて、色色の說があり、從つて、解釋も種種あるが、傍徑に入るから、ここでは、一切省略する。それから、楓橋は、青邱の詩にも度度見え、後に王漁洋は、旅中、雨夜、わざわざ寒山寺を尋ねたことなどもあつて、相變らず、有名であつたが、長髮賊の亂に燬かれて仕舞ひ、現存するものは、その後、重建したもので、寺としては、大したものなく、楓橋は、すぐ寺の前に在るが、その川は、即ち運河の支流で、これも餘り大きなものでない。この詩は、寒山寺を賦して、人の遠行を送つたのである。

【詩意】楓橋より西の方を望むと、遠山が碧色を爲し、寒山寺は寒江に對して、ひとり扉を掩ひ、あたりは、物靜かである。曉の鐘の聲が、船中に響き來ると、行客は、起つて支度をして、大急ぎで漕ぎ出させ、日暮、塔中に燈火點ずる時、坊さんは、それを目あてにして遠くから歸つて來る。漁村は寂寂として、一つ家から上る煙は近く、驛路秋老いむとし、風は蕭蕭として、木の葉は大分落ちて、殘れるは稀である。君は、姑蘇城外なる寒山寺の直ぐ傍に舟を泊されるであらうが、烏啼く夜あけの頃、そこまで出かけて、君の遠行を送ることは、一寸六つかしく、ここで、失敬する外はない。

【餘論】塔中燈は、塔中に點ずる火であるから、その對語の船裏鐘は、船中に撞き出す鐘といふ樣に見えるので、船中に聞こえ來る鐘ならば、外に言ひ樣もありさうなもので、何にしても、對仗精當ならず、到底、瑕疵たるを免れぬことと思ふ。こんな小さいことは、如何でも善いといふ人があるかも知れぬが、詩といふものは、そんなものではなく、かういふ處は、あくまで、洗錬して穩當である樣にして貰ひたいのである。なほ、衆葉稀といふのも、造語が、面白くない樣である。

聞朱將軍戰歿　朱將軍の戰歿を聞く

(一)江浦(二)戈船(三)赤幟稀。江浦の戈船、赤幟稀なり、
孤軍落日陷重圍。孤軍落日、重圍に陷る。
(四)鏡中蛇墮占應驗。鏡中、蛇墮ちて、占、應に驗あるべし、
(五)牙上梟鳴事已非。牙上、梟鳴いて、事、すでに非なり。
殘卒自隨新將去。殘卒、自ら新將に隨つて去り、
老親空見舊奴歸。老親、空しく見る舊奴の歸るを。
(六)聞雞此夜誰同舞。雞を聞いて、この夜誰か同じく舞はむ、
西望秋雲淚灑衣。西、秋雲を望んで、淚、衣に灑ぐ。

【字解】【一】江浦　揚子江の入り江。【二】戈船　兵船、通典に「伍子胥に戈船あり、以て干戈を載す、因つて、これを戈船といふ」とある。【三】赤幟　史記淮陰傳に「輕騎二千人を選び、人ごとに一赤幟を持たしめ、間道より山に革れて趙軍を望ましめ、誡めて曰く、趙、わが走るを見ば、必ず壁を空しうして我を逐はむ、若、趙壁に入り、趙幟を拔いて漢の赤幟を立てよ」とある。【四】鏡中蛇墮　前定錄に「袁安叔、異人に遇うて書を得たり、云ふ、一命を受くる毎に卽ち一幅を開けと。果仕、皆驗あり。一日、晨起、巾櫛すれば、一物、鏡中に墮つ、蛇の如くして四足、驚き仆れ、疾むこと數日にして卒す。書を留むること尙ほ多し。その妻、開いて之を觀れば、皆空紙なり、最後の一幅、蛇を盤鏡中に畫くのみ」とある。【五】牙上梟鳴　牙は牙營の旗、卽ち大將旗。晉書張重華傳に「重華、謝艾を以て中堅將軍となし、麻秋を擊つ。夜、二梟あり、牙中に鳴く、艾曰く、梟は邀なり、六博梟を得るものは勝つ。今、梟、牙中に鳴く、敵に克つの兆と。ここに于て、進み戰つて大に之を破る」とある。【六】聞雞　前に舞劍詞句の中にも見えたが、晉書祖逖傳に「司空劉琨と俱に司州主簿となり、被を共にして同じく寢ぬ。中夜、荒雞の鳴くを聞き、琨を蹴つて覺まして曰く、これ惡聲に非ざるなり、と。因つて、起つて舞ふ」とある。

【題義】羣雄事略に「徐達、湖州を攻む。張士誠、平章朱暹及び五太子を遣し、兵を率ゐて舊館に屯せしむ。常遇春・薛顯に敗らる。暹、字は秦仲」とある。朱將軍は、湖州を救ひに往き、明軍に敗られて戰死したので、この頃、蘇州は張士誠に屬し、靑邱も、自然、その治下に居たから、將軍の死を聞いて、これを痛惜したのである。

【詩意】明軍は、戈船を連ねて、入り江に押し寄せたが、入れ替つて、之を占領する赤幟もなく、却つて、わが孤軍は、重圍の中に陷り、落日を廻すに由なき樣な形勢に成つた。むかし、鏡中に蛇の樣なものが落ちて、間もなく死んだといふ人があつたが、將軍の運命は、さながら、これに同じく、牙旗の上に梟が鳴いて、勝利を豫期して居たことも、全くあてが外れて、散散な敗軍になつて仕舞つた。そこで、生き殘つた士卒どもは、新任の大將に隨つて他處に赴き、もとの奴僕が歸つて來て、訃音を將軍の老親に傳へたといふ話。この夜、荒雞の聲を聞いて、慷慨、自ら禁せざれども、誰とて共に起つて舞ふ人もなく、唯だ、西、湖州の方を望み、秋雲の雨を含んで天を閉せるを見、覺えず、淚下つて衣を霑すのみである。

送何明府之秦郵　何明府の秦郵に之くを送る

馬前風葉助離(一)聲。馬前の風葉、離聲を助く、
楚(二)驛都(三)荒不計程。楚驛、すべて荒れて程を計らず。
一令尙淹三(四)縣事。一令、尙ほ淹す三縣の事、
幾家曾見十(五)年兵。幾家か、かつて見る十年の兵。
夕陽遠樹煙(六)生戍。夕陽遠樹、煙、戍に生じ、
秋雨殘荷水繞城。秋雨殘荷、水、城を繞る。
父老不須重歎息。父老須ひず重ねて歎息するを、
君來應有故鄉情。君來らば、應に故鄉の情あるなるべし。

【字解】【一】離聲　離別の際に色色と鳴る其聲。【二】楚驛　秦郵は古しへの楚地で、そこに通ずる驛路。【三】都荒　兵亂の後、荒廢に歸せしこと。【四】三縣事　題下の原注に「何は淮東の人、すでに三たび縣令となる」とある。【五】十年兵　十年の爭亂。【六】煙生戍　戍は戍營。

【題意】明府は縣令の尊稱。一統志に「高郵縣、明の洪武の初、高郵府を改めて州となし、高郵縣を以て省き入る。戰國には楚に屬し、秦には秦郵たり」とある。この詩は、何某が高郵の縣令に任じて赴任するを送つたのである。但し、まだ高郵が州にならぬ時分の事であらうと思はれる。

【詩意】君の馬前には、風に揉まれる落葉がざわざわと音して、さながら別離の聲を助くるが如く、寂しさ一しほ增し、これより行く手の楚地の驛路は、亂後荒廢して、豫め日程を定めることも出來ない位。君は縣令の職に留まつて居て、三縣に歷任したが、十年間の戰亂に苦んだ家は、數かぎりもなく、これを治めて行くには、隨分骨が折れるに相違ない。高郵の地たるや、夕日が遠樹を照らして、戍營には煙が上り、秋雨は敗荷に灑いで、濠の水は、城を繞つて居る。その地の父老どもは、重ねて歎息するにも及ばないので、君が著任さへすれば、仁慈の政を布き、戰後の瘡痍も程なく癒えて、萬事復興し、そこで、皆皆故鄉の思を爲すであらうと思ふ。

【餘論】この詩の兩聯は、例の通り情景相配して、極めて面白い。これで、結末が今少し振つて居れば、見事、完璧瑕なきものと思はれる。

過野寺次韻徐廉使琰舊題　野寺を過ぐ、徐廉使琰の舊題に次韻す

使節城東按(一)部廻。使節、城東、部を按じて廻る、
曾將從(二)吏到香(三)臺。かつて、從吏を將ゐて香臺に到る。
秋林數騎蕭蕭去。秋林の數騎、蕭蕭として去り、
晚澤孤鴻嗷(四)嗷來。晚澤の孤鴻、嗷嗷として來る。

【字解】【一】按部　管內を巡檢する。【二】從吏　屬僚を云ふ。【三】香臺　寺を云ふ。【四】嗷嗷　鳴く聲の悲しきをいふ。【五】柏風　柏樹を吹く風。【六】物色　風物

蘿雨淫衣溪路轉。柏(五)風吹燭殿門開。當年物(六)色雖留與。題壁慙無子(七)美才。

蘿雨、衣を淫して溪路轉じ、柏風、燭を吹いて殿門開く。當年の物色、留與すと雖も、題壁、慙づらくは、子美の才なし。

【題義】野寺は田舍の寺、名が分からぬから、かく云つたのであらう。徐廉使は、杭州府志に「徐琰、字は子方、養齋と號す、東平の人。翰林承旨王磐、その才を薦め、至元中、浙西肅政廉訪使に拜せらる。文學の名あり、東南の人士、これを重んず」とある。この詩は、靑邱が或る田舍の寺に往つた處が、壁上に廉訪使徐琰の題詩があつたから、取り敢へず、その韻に次したのである。

【詩意】徐君は廉訪使たる節信を押し立て、城東なる管内を巡檢して歸られ、ある時、屬僚どもを引き具して、この寺に立ち寄られた。おもへば、その折しも、數騎、手綱を竝べ、蕭蕭として落葉する秋林の中を通ると、池沼は黃昏がれて、一羽の雁が悲しげに鳴いて飛んで居たであらう。それから、蘿の葉に雨が殘つて居て、衣を霑すにも拘はらず、溪上の路の曲れるに隨つて進み行くと、程なく、この寺に著し、柏の木を吹く夕風が、龕の中なる燈明を吹き動かし、殿門は、ちやんと開いて居たことと思ふ。かくの如き當年の風景は、その儘、殘留して居るが、今、徐公の韻に次して、壁上に詩を題せむとするも、われに杜甫の如き才なきは、まことに慙愧に堪へぬことである。

【餘論】後聯は、溪寺の物色を描き出して、復た餘蘊なく、結句の謙辭たること、はじめて明かにして、愈よ奥ゆかしく感ぜられる。

風色に同じ、杜甫の詩に登臨多物色、陶冶賴詩篇とある。【七】子美　杜甫の字、夔府詠懷の詩に東郡時題壁とある。

送滎陽公行邊

滎陽公の邊を行るを送る

風卷雙(一)旌雪覆(二)韉。遠騎白馬出行(三)邊。兵馳空壁三(四)千幟。客宴高堂十(五)萬錢。屛裏舊圖魚(六)復陣。燈前新注豹(七)韜篇。功成他日論諸將。只有荀(八)郞最少年。

風は雙旌を卷いて、雪は韉を覆ふ、遠く白馬に騎して、出でて邊を行る。兵は空壁に馳す、三千の幟、客は高堂に宴す、十萬錢。屛裏、舊と圖す、魚復の陣、燈前、新に注す、豹韜の篇。功成つて、他日、諸將を論ず、只だ荀郞の最も少年なるあり。

【字解】【一】雙旌　旌は、析いた羽を竿首につけた旗。大將が出行する時には、その前に之を二本立てる。【二】覆韉　韉は下ぐら、鞍下の毯。【三】行邊　邊境を巡る。【四】三千幟　前に、聞朱將軍戰歿の詩中に注したが、史記淮陰侯傳に見え、韓信が趙軍をおびき出し、二千の伏兵をして、城中に入つて、赤幟を建てしめた。原文には、輕騎二千人、人ごとに一赤幟を持たしむとあるが、ここに三千幟としたのは、平仄の都合で、必ずしも、原文に拘泥しないのである。【五】十萬錢　南史到撝傳に「撝資籍豪富、厚く自ら奉養し、一身に供する一

日十萬」とあり、又杜甫の飲中八仙歌に左相日興費萬錢、飲如長鯨吸百川とある。【六】魚復陣 一統志に「夔州奉節縣は周の魚復國、諸葛武侯八陣圖蹟あり」と見ゆ。【七】豹韜 太公の六韜中の篇名。【八】荀郎 南史に「荀羨、字は令則、徐州刺史に遷る、時に年二十八。中興の方伯、未だ羨の年少の如きものあらず」とある。

【題義】滎陽公は、金檀の注にも之を缺いて居るから、誰だか、よく分からぬが、明初功臣中の年少者で、今次、邊境を巡察するに因り、青邱は、この詩を作つて、その行を送つたのである。

【詩意】北風颯として雙旌を吹き捲き、雪は白く積つて、下鞍をも覆ふ樣な、この荒寒の時に當り、君は白馬に跨つて、遠く邊境を巡察されるとのことで、まことに御苦勞の至である。かつて、戰に臨み、伏兵を敵の空城に馳せ入らしめて、三千の赤幟を押し立て、見事、大捷を得たこともあつたが、今は、留別の爲め、羣客を高堂の上に會し、十萬の巨費をも厭はずして、盛宴を催された。屛風の上には、魚復浦に在りと聞く孔明の八陣が、もとから畫いてあるし、燈前に於ては、近ごろ、六韜の注釋を書いたといふことで、その人物といひ、韜略といひ、もとより、他より傑出して居る。されば、他日、諸將に就いて論功行賞をされる樣な場合には、君こそ、當年の荀羨の如く、第一の年少者として、屹度、その中に加はるに相違ない。

登涵空閣

涵空閣に登る

滾滾波濤漠漠天。
滾滾の波濤、漠漠の天、

曲闌高棟此山顚。
曲欄高棟、この山顚。

置身直在浮雲上。
身を置いて、直に浮雲の上に在り、

縱目長過去鳥前。
目を縱にして、長く過ぐ去鳥の前。

數杵秋聲荒苑樹。
數杵の秋聲、荒苑の樹、

一帆暝色太湖船。
一帆の暝色、太湖の船。

老僧不識興亡恨。
老僧は識らず、興亡の恨、

只向游人說往年。
只だ游人に向つて、往年を說く。

【字解】【一】滾滾 湧き出づる貌。【二】漠漠 廣邈の貌。【三】高棟 棟の高い樓閣。【四】縱目 目を縱にして、方方を眺める。【五】荒苑 例の長洲苑であらう。

【題義】題下の原注に「靈巖寺に在り」と記してある。そこで、青邱の鳬藻集を檢すると、遊靈巖記の一文があつて、特に此閣を記して「閣あり、以て具區の波を瞰る、涵空といふ、虛明動盪、用つて奇觀と號す。蓋し、この邦の美を專にするものは山にして、この山の美を專にするものは閣なり。啓は吳人、ここに遊ぶこと甚だ亟ばなりと雖も、然れども、山、每に幽を匿し、勝を閟ぢ、蒐剔すべきなく、予の陋を鄙むものの如し。今年春、淮南行省參知政事臨川饒公に從ひ、その客十人と復た

來り游ぶ。高きに升つては、山の佳なるもの、悠然として來り、奥に入つては、石の奇なるもの、突然として出で、氛嵐、これが爲に蹇舒し、杉檜、これが爲に拂舞し、幽顯巨細、爭つて厥狀を獻じ、披豁呈露、隱遁あるなし。然る後、この山に於て、はじめて、今に識つて、素より昔に昧しと爲すを知るなり」とある。この詩は、多分同時に作つたものと思はれるので、その興會の橫逸なるを想見することが出來る。

【詩意】曲れる欄干、高い棟宇は、山の巓に在るが故に、眺觀極めて廣く、滾滾たる波濤、漠漠たる天空は、この胸を動盪するが如くである。ここに居れば、この身を浮雲の上に置いた樣であるし、目を放てば、いつでも、飛鳥の前を過ぎて、その外にも及ぶ位。砧は秋の聲を動かして、荒れはてた長洲苑の樹に響徹し、帆は暮の色を含んで、廣き太湖を船は橫ぎつて行く。ここは、むかしの吳越を始めとして、數ば興亡を經た處であるが、老僧は、その恨を知らぬ顏で、唯だ游人に向つては、往年繁華の狀況をのみ話して居る。

【餘論】さすがに、興酣にして、油の乘り切つた作だけに、兩聯、極めて面白く、一虛一實、相配した處は、後人に典型を與へたものである。但だ、例の如く、結末の陳套にして稍や振はぬは、いかにも遺憾であつて、青邱の才を以てして、なほ此の如しとすれば、詩の難きこと、以て想見すべく、それにつけても、事もなげに、そそくさと字だけ竝べて喜んで居る樣な手合は、謂はゆる疏才で、到底數ふべからざるものである。

婁江寓舍喜王七隅見過却送還郭

婁江の寓舍、王七隅の過ぎらるるを喜び、却つて郭に還るを送る

送君只過孝廉橋。　君を送つて、只だ過ぐ孝廉橋、
不似君來訪我遙。　似ず君、來つて、われを訪ふの遙なるに。
路未同歸鴻杳杳。　路、未だ同じく歸らず、鴻杳杳、
門方孤掩竹蕭蕭。　門、方に孤り掩ふ、竹蕭蕭。
遠愁忽與鐘聲至。　遠愁、忽ち鐘聲と至り、
殘醉微兼燭燼消。　殘醉、微に燭燼と消ゆ。
莫道扁舟難重過。　道ふ莫れ、扁舟重ねて過ぎ難しと、
寒江日日有廻潮。　寒江、日日廻潮あり。

【字解】【一】孝廉橋　蘇州府志に「外跨塘、永慶橋、東を過ぎて官塘に沿ひ、第五橋、孝廉と名づく」とある。
【二】孤掩　ひとり掩ふ、この家だけ門を閉ぢてある。
【三】燭燼　燈火の燃え屑。
【四】廻潮　再び廻つて來る潮。

【通義】王隅は、前に卷六に其死を哭する詩が見えて居て、それを解釋する時、鳧藻集に見えた王仲

廉哀辭を引いて置いたが、なほ、その文中、「夫れ士、鬱するあつて耀かず、又篤癈の疾を招き、夭札の禍に罹り、親老いて其養を終る能はず、子生まれて其長を待つ能はず、これ古今の凶極まつて甚だ哀むべきもの、而して、吾が仲廉、これに丁る、豈に命に非ざらむや」とあつて、青邱が滿腔の同情を寄せて居る處を見ると、生前に於ける友誼の厚かりしことも、大抵、想像される。青邱の婁江に寓したのは、至正二十二年から二十五年に至るまでであるから、この詩を作つたのも、この三四年間に相違ない。そして、王隅が二十六年三月に死んだことは、哀辭にも見えて居る。この詩は、婁江に寄寓して居る時に、王隅の來訪せしを喜び、それから、蘇州の城郭に還るのを送つて、孝廉橋まで往つた其時に作つたのである。

【詩意】君の歸るを送つて來たものの、唯だ孝廉橋を過ぎただけで、さう遠くにも往かず、君がはるばる予を尋ねて來て呉れたのとは、比較にも成らない。雁の影は、杳杳として、さながら君の唯だ一人なるに似て居るが、われは、まだ君と一處に此路を取つて、蘇州に歸る譯にも行かず、竹の蕭蕭たる間に、自分の侘住居だけは、門を閉してある。遠愁は、鐘聲に催されて忽ち至り、殘醉は、燈火の燃え屑と共に、少しづつ消えて行く。寒江の上だに、日日廻る潮がある位だから、君は、又と扁舟に乘つて來ることは出來ぬなどと言はずに、遠からず、是非、再び來て貰ひたい。

【餘論】後聯は、語眞にして意摯、且つ、いくらか新警婉曲の致がある。

送葉卿還隴西公幕兼簡周軍咨

葉卿の隴西公の幕に還るを送り、兼ねて周軍咨に簡す

落日關（一）城動鼓笳　　落日關城、鼓笳を動かす、
遠游憐汝尚無涯　　遠游、憐む汝が尚は涯なきを。
壯（二）身漫託三公府　　壯身、漫に託す三公の府、
歸夢難尋萬里家　　歸夢、尋ね難し萬里の家。
投驛暮山燈照葉　　驛に投ずれば、暮山、燈、葉を照らし、
待潮秋渡棹黏沙　　潮を待てば、秋渡、棹、沙に黏す。
軍中記（三）室如相問　　軍中の記室、もし相問はば、
只說愁吟對菊花　　只だ說け、愁吟、菊花に對すと。

【字解】【一】關城　前にも見ゆ、關門に近き州城。
【二】壯身　少壯の身。
【三】記室　卽ち周軍咨を指す。

【通義】葉卿・周軍咨、ともに、字や閱歷は不詳であるが、隴西公の幕下に居るものと見える。その隴西公も、誰か分からぬが、その地を鎭撫する故に云つたのであらう。この詩は、葉卿の隴西公の幕中に還るを送り、そして、序なれば、手翰に代へて、周軍咨にも寄せたのである。

【詩意】入日たゆたふ關門近き州城に於ては、笳鼓の聲かしましく、これが卽ち君の歸り行く處で、君が遠游して際限なきは、殊に御苦勞の至である。君は、少壯有爲の身を以て、漫に三公の府に託し、太尉の幕賓となつて居て、夢に歸らむとするも、家は萬里を隔てて、一寸尋ね煩ふことであらう。その途すがら、暮山の下なる驛亭に投宿すれば、燈火寂しげに、落葉に照り、秋の渡頭に渡しを待つて居ると、棹は沙にへばり付いて、容易に舟が動かず、旅中の感慨、さこそと思ひやられる。そこで、君の歸後、周軍沓が若し予の事を尋ねたならば、相變らずの境涯に沈淪し、愁吟しつつ菊花に對して居ると云つて答へて吳れろ。

【餘論】かういふ詩とても、無論、大抵には出來て居るが、要するに、雋句に乏しき爲め、光燄人を射る樣の趣なく、一寸庸熟に流れる傾向ある處が、どうも面白くないのである。

范文正公祠　　范文正公の祠

(一)開閣(二)陳書對御筵。　閣を開き、書を陳して御筵に對す、
共言天子(三)得時賢。　ともに言ふ、天子、時賢を得たりと。
(四)才(五)陪上相趨廷內。　わづかに上相に陪して、廷內に趨り、
遙(六)撫豪羌出塞邊。　遙に豪羌を撫して、塞邊に出づ。
(七)松柏自依(八)先隴廟。　松柏、自ら依る先隴の廟、
稻禾猶滿(九)義莊田。　稻禾、猶ほ滿つ義莊の田。
古來直道難終合。　古來、直道、終に合ひ難し、
何必深嗟慶曆年。　何ぞ必ずしも深く嗟せむ慶曆の年。

【字解】【一】開閣　閣は天章閣、天子の御居間。【二】陳書　意見書を差し出す。【三】得時賢　宋史范仲淹傳に「趙元昊、和を請ふ。召して、樞密副使に拜せらる。歐陽修、因て宰相の才あるを言ふ。仲淹、固辭して曰く、宰相は、諫官に由つて得べけむやと。帝の親除を俟つて、然る後に拜す。帝、方に太平に銳意、數ば當世の事を問ひ、天章閣を開き、輔臣を引いて條對せしむ。仲淹、乃ち十事を上る」とある。【四】才　わづかにと訓ずべし、纔と通用す。【五】陪上相　首相の次位に班する、續通鑑に「慶曆三年八月、范仲淹を以て參知政事たらしむ」とある。【六】撫豪羌　續通鑑に「慶曆四年六月、陝西河東宣撫使となる。はじめ、仲淹、呂夷簡に忤ひ、放逐せらるるもの數年、陝、兵を用ふるに及び、帝、士望の屬するところを以て之を用ひ、富弼と同じく政を輔けしむ。はじめ、石介、記を弼に奏し、責むるに伊周の事を行ふを以てす。夏竦、介を怨み、これに因つて弼等を傾けむと欲し、乃ち女奴をして、陰に介の書を習はしめ、伊周を改めて伊霍となし、又介が弼の爲に撰せる廢立の詔を僞作し、飛語上聞す。帝、信ぜずと雖も、しかも、弼と仲淹と、恐懼自ら安んぜず。適ま契丹夏を伐つを聞き、遂に請うて邊を行る」とある。【七】松柏　祠邊の樹。【八】先隴　祖先の墓地。【九】義莊　豐年の時米穀を貯へ置き、凶年の時に之を出して窮民を救恤する共田宅。

【題義】題下の原注に「天平山に在り、公の祖父の冢、祠前に在り、乃ち義莊を置いて山下に在り、子孫、今に至つて之を守る」とあり、鳧藻集に載する游天平山記にも「山は城を距て、西南に水行す

ること三十里、至れば、舟を捨てて輿に就き、平林淺塢の間を經、道傍の竹石蒙翳、泉あり、伏して見えず、泠泠として琴筑の聲を作す。予、欣然輿を停めて聽き、これに久しうして去る。白雲寺に至り、魏公祠に謁し、遠公菴に憩ひ、然る後、その麓より狙杙して以て上る」とあつて、祠は、天平山の麓で、白雲寺の境内に在ることが分かる。なほ、范仲淹の事は、前に卷十、范魏公手書伯夷頌、爲二其裔孫天章一題の詩中にも詳述して置いたから、再び此に贅するにも及ばぬと思ふ。

【詩意】天章閣中、仁宗の面前に於て、范公が時事に就いて奏上した時、世間では、方今聖明の天子は、一代の名賢を得、太平の至治、期して待つべしといふ樣に噂をして居た。しかし、范公は、宰相に陪席して、朝廷に趨走することが出來る樣に成つたばかりなのに、遽に西夏の羌族を鎭撫する爲に、塞邊に出戍することになつて、滿腹の經綸を十分に展べることの出來なかつたのは、まことに殘念である。ここに、松柏は鬱然として、祖先の墓地に鄰接したる其祠に依り添ひ、公の創設した義莊に附屬せる靑田には、いつも稻が成熟して、その遺德をしのばしめる。古しへより、直道を守るものは、始終世に合ふといふことが六つかしいので、范公の此に至れるは、もとより偶然ならず、何も慶曆の時代が惡いからだといつて、嗟嘆するにも及ばぬことである。

丁令威宅

丁令威の宅

令威作レ仙上レ天去。令威、仙と作つて、天に上つて去り、
舊宅留在二(一)青山阿一。舊宅、留めて青山の阿に在り。
千年宅廢但遺井。千年宅は廢して但だ遺井、
何處更聞(二)華表歌。何の處か更に聞かむ華表の歌。
(三)南陌黃塵足二去客一。南陌の黃塵、去客に足り、
東流碧海絕二迴波一。東流の碧海、迴波を絕つ。
鶴歸重覽應二惆悵一。鶴歸つて重ねて覽れば應に惆悵すべし、
地上邱墳今又多。池上の邱墳、今又多し。

【字解】(一) 青山阿 阿は邊に同じ。
(二) 華表 門柱。
(三) 南陌 陌は大路。

【題注】題下の原注に「陽山に在り、煉丹井の在るあり」と記してある。搜神記に「丁令威は、遼東の人、漢初、師に隨つて仙道を學び得、分身、意の欲するところに任かす。かつて、暫く歸り、化して白鶴となり、郡城門の華表柱頭に集まる。時に少年あり、弓を擧げて、これを射むと欲す。鶴、乃ち飛んで空中に徘徊して言ふ、

有レ鳥有レ鳥丁令威。去レ家千歲今歸來。城郭如レ故人民非。何不レ學レ仙冢纍纍。

遂に高く上つて天に冲す」とある。ここの遼東は、即ち今の滿洲の遼陽、丁令威は其地の人といふ以上、蘇州の陽山に宅があるといふのは、極めて變である。但し、青邱は、唯だ傳說に據つて、この詩を作つたのであらう。

【詩意】丁令威は、仙人となつて、碧天に上りし後、舊宅は、依然として青山の麓に在るが、すでに、千年を經、その址、盡く廢し、今では唯だ井が殘つて居るだけであつて、かつて遼東城門の華表の上で唱へた歌は、何處へ往つても、聞くことが出來ぬ。顧みれば、人生の果敢なきは、南の大路に飛ぶ黃塵の如く、そして、登仙の覺束なきは、碧海東流して、立ち廻る波だに無きを見ても分かる。そこで、鶴に化した令威が又ぞろ歸つて來た處で、この世の有樣を見れば、必ず惆悵すべく、地上の邱墳は、その當時に比して、今は、一層多くなつて居る。

【餘論】第二句、舊宅留在青山阿の七字は、平仄を誤つて居るし、且つ舊宅は、第三句の千年宅と語意ともに複して居るから、斷じて、誤訛に相違なく、編修者が之を斷つて置かぬは、不親切の嫌がある。

辭戶曹後東還出都門有作

戶曹を辭して後、東に還らむとし、都門を出でて作あり

詔貳(一)民曹出禁林(二)。　詔して民曹に貳として禁林を出でしむ、

陳(三)辭因得解朝簪(四)。　辭を陳べ、因つて朝簪を解くを得たり。

臣材自信元難稱(五)。　臣の材、自ら信ず、元と稱ひ難きを、

聖澤誰言尙未深。　聖澤、誰か言ふ、尙ほ未だ深からずと。

遠水江花秋艇去。　遠水江花、秋艇去り、

長(六)河宮闕曉鐘沈。　長河宮闕、曉鐘沈む。

還鄉何事行猶緩。　鄉に還る、何事か、行くこと猶ほ緩、

爲有區區戀(七)闕心。　區區、闕を戀ふる心あるが爲なり。

【字解】【一】貳民曹　說文に「貳は副益あり」とある。民曹は即ち戶部、官制沿革に「漢の民曹は隋の民部、唐、太宗の諱世民を避け、改めて戶といふ」とある。戶部の長官は尙書、これは、その次官となることで、即ち戶部侍郎。【二】禁林　翰林を云ふ。【三】陳辭　離騷に、就重華而陳辭とある。【四】朝簪　簪は冠を留める爲に用ふ。【五】難稱　才が官に協はぬ。【六】長河　銀河。【七】戀闕　宮闕を戀ふる心。

【題義】年譜に「洪武三年二月、翰林院編修を授けらる。七月、帝、闕樓に御して召對し、戶部侍郎に擢んでしが、辭す。金幣を給して放ち歸す」とある通り、青邱は、元史すでに成るの後、頻りに拔擢されたが、わづか半年餘りで、決然冠を挂けて、江上の青邱に歸臥して仕舞ひ、どういふ譯だか、よくは分からぬ。或は同輩の猜忌を避けたのか、或は明の太祖の人物、動もすれば冷酷なるを見拔いて、他日の禍を懼れたのか、色色に揣摩する人もあるが、要するに、ともに確證なきことである。

この詩は、卽ち戸部侍郞を辭し、東に向つて歸鄕せむとする際、南京を出でて作つたのである。

【詩意】詔して、戸部侍郞に任じ、翰林を出づることに成つたが、謹んで辭を陳べて、御斷りを申し上げ、ここに始めて冠を挂くることを允された。元來、私の材は、到底、その職に協はないと信ずるので、曠職の譏を蒙らぬ內に、辭職した始末、決して、聖恩が未だ深くないといつて、不滿に思つた譯ではない。江水渺渺として遠く、兩岸には蓼だの蘆だのが花を開いて居る間を、小舟で下りつつ、顧みれば、銀河低く地に垂れて宮樹を帶び、鐘の音さへ沈んで聞こえる。ここに歸鄕せむとして、何故に行くこと、なほ緩かにして、悲圖悲圖して居るかといへば、區區として宮闕を戀ふる心があるからで、これが都の見收めかと思ふと、まことに、惆悵の念に堪へられぬ。

【餘論】前聯は、今次の辭職を以て、おのが才の稱はざるに歸し、聖澤決して淺からざるを云ひ、結末、更に戀闕の思に堪へぬことを言つたのは、まことに、詩人忠愛の本旨に副うたもので、たとひ、他に原因があるにしても、支那流では、かういふのが至當で、又文字に含蓄多き所以である。後聯は明瑩穩麗、例の慣用の語法を以てせる佳語である。

寄余左司

余左司に寄す

何處吹愁角一聲。何の處か愁を吹く、角一聲、

大江東岸呂蒙營。大江東岸、呂蒙の營。

天隨流水茫茫去。天は流水に隨つて茫茫去り、

月共長庚耿耿明。月は長庚と共に耿耿明かなり。

虜意有圖秋暫息。虜意圖あり、秋、しばらく息み、

客魂無定夜還驚。客魂、定まるなく、夜、還た驚く。

欲陪釃酒樓船座。陪せむと欲す、酒を釃ぐ樓船の座、

借問風潮早晩平。借問す、風潮、早晩平かなるかと。

【字解】【一】呂蒙營　一統志に「呂蒙城は、嘉魚縣石頭口に在り、孫權、零陵を征する時に築く」とある。【二】長庚　太白星。【三】有圖　計略がある。【四】釃酒　東坡の赤壁賦に、釃酒臨江、横槊賦詩とある。【五】早晩　早かれ遲かれ、いづれ其內といふのが、普通であるが、ここのは、何時といふ意。陶潛の詩に、冑自山中來、早晩發天目とあるのが、卽ち其例である。

【題義】余左司は卽ち余堯臣、北郭十友の一、贈答の詩は、前に數ば見えて居た。淮張亡びし後、濠に謫せられ、後に新鄭丞を授けられた時、青邱は、寄余新鄭といふ五古の長篇を寄せたこともある。この詩は、堯臣が淮張の重臣たる邁善卿・呂珍の幕下に居た頃で、蓋し、彼の得意時代であつたらうと思はれる。

【詩意】何處で角聲が頻りに愁を吹いて鳴るかといへば、大江の東岸なる呂蒙の舊城で、今しも、君は其地に駐屯して居る。天は、流水に隨ひて、茫茫として遠く去り、月は太白と共に、耿耿として耀いて居る。敵の方でも、怠らず計略を廻らすことであらうが、秋に成つて、しばらく休戰の狀態であ

るし、客中の魂は、何となく、落ち付かず、夜ごとに、驚かされることであらう。君が樓船に乘じ、酒を釃いで豪興を縱にする其側に陪席したいと思ふが、江中の風濤は、何時平かになるか、その時こそ、是非、出かけて往つて見やう。

【餘論】天隨、月共の十四字は、氣象壯濶でありながら、膚廓に陷らぬ處が極めて宜しい。

聞家兄謫壽州

家兄の壽州に謫せらるるを聞く

別來未省去何投。　別來未だ省せず、去つて何にか投ずる、
書到方知謫壽州。　書到つて方に知る、壽州に謫せらるるを、
覽俗自堪傷遠抱。　俗を覽て、自ら遠抱を傷むに堪へたり、
聽音誰解釋羇憂。　音を聽いて、誰か羇憂を釋くを解せむ。
長淮波浪應愁渡。　長淮の波浪、應に愁へて渡るべく、
故國江山只夢游。　故國の江山、只だ夢游。
未有萬回飛往術。　未だ萬回飛往の術あらず、
魂銷空望楚雲秋。　魂銷えて、空しく望む楚雲の秋。

【字解】【一】未省　省は歸省する。歸つて見舞ふ。【二】遠抱　遠地に於ける懷抱。【三】聽音　音は言語。【四】羇憂　旅愁に同じ。【五】萬回　傳燈錄に「萬回禪師、姓は張、九歲、乃ち能く語る。兄、西安に戍す、父母遣して問訊す、朝に往いて暮に返る、萬里にして回るを以て、因つて萬回と號す」とある。

【題義】前に卷六に、送家兄西遷と題せる五古があつて、この詩は、その少し前に作つたものと考へられる。青邱の兄、名は沓、淮張に與みせしに因つて、その滅亡の後、明の太祖の命として、流謫されることとなつたので、その地は、壽州鳳陽府に屬して居る。青邱は、亂後、江上に移居し、兄が愈よ壽州に徙される由を聞いて、先づ第一に此詩を作つたのであらう。卷首に轉載した年譜に、この詩の方を後に廻はしたのは、特別の事情なき限り、どうも、當を得ない樣に考へられる。

【詩意】別れし後、君は久しく歸つて見舞ふこともせず、亂後、何處に往かれるかと思つて居た處が、御手紙に依つて、今次壽州に謫せられるといふことが分かつた。その地は、もとより邊鄙であるから、異なりたる風俗を覽ては、自然、遠客の懷抱を傷ましむべく、言語の侏離なるを聞いては、どうして旅愁を釋くことが出來やう。長き淮水の波浪は、愁へて渡るべく、故國の江山は、只だ夢中に游ぶのみである。古しへの萬回の如く、朝に往いて暮に返り、君の謫居を造作なく問訊することが出來れば、何でもないが、さういふ術も心得て居ない處から、楚地の雲の秋に棚引くを見て、空しく、魂を銷すばかりである。

【餘論】長淮、故國の十四字は、遠近を兼ね、悽惋の極、一誦、人をして覺えず、亦た魂銷せしめる。

吳城感舊

吳城、舊を感ず

(一)城苑秋風蔓草深。城苑の秋風、蔓草深く、
豪華都向此(二)銷沈。豪華、すべて此に向つて銷沈す。
(三)趙佗空有稱尊計。趙佗、空しく尊を稱するの計あり、
(四)劉表初無弭亂心。劉表、初めより亂を弭むる心なし。
半夜(五)危樓俄縱火。半夜、危樓、俄に火を縱ち、
十年(六)高塢漫藏金。十年、高塢、漫に金を藏す。
廢興一夢誰能問。廢興一夢、誰か能く問はむ、
回首青山落日陰。首を回らせば、青山、落日陰る。

【字解】【一】城苑　城中の宮苑。【二】蔓草　つる草ではない、草の繁茂して居ること。【三】銷沈　消えて無くなる。【四】趙佗　史記文帝紀に「後六年、南越王尉佗、自立して帝となる」とある。これは、張士誠の僭號を指したので、明紀に「元の至正二十三年、自ら吳王と號す、詔して、使を遣して糧を徵すれども與へず」とある。【五】劉表　季漢書内傳に「劉表、荊州刺史となり、自ら境内を保つ。曹操、袁紹と方に官渡に相持す。紹、人を遣して助を求めしむ、表、これを許して至らず、又操を佐けず。從事中郎韓嵩・別駕劉先、表に說いて曰く、豪傑並び爭ひ、兩雄相持す、天下の重き、將軍に在り。將軍、もし爲すあらむと欲すれば、起つて、この弊に乘ずる可なり、もし然らざれば、もとより、將に從ふところを擇ばむとす、と。表、用ふる能はず」とある。これは、張士誠が唯だ一隅を守つて、毫も大志なきを嘲つたので、明紀に「至正二十年閏五月、陳友諒、すでに太平を陷れ、その王徐壽輝を弑し、遂に自ら帝と稱し、國を漢と號し、使を遣し、張士誠に約して、同じく入寇せむとす、士誠、觀望として自ら固うし、敢て應ぜず」とある。【六】危樓俄縱火　明紀に「張士誠、城破る、薪を齊雲樓下に積み、羣臣侍妾をして樓に登らしめ、養子辰保をして火を縱つて之を焚かしむ」とある。【七】高塢漫藏金　後漢書に「董卓、塢を郿に築いて萬歲塢と號し、金二三萬斤、銀八九萬斤を藏し、穀を積むこと三十年」とあつて、張士誠の富饒を比して云ふ。

【題意】吳城は卽ち蘇州府城。この詩は、張士誠の滅後、府城の荒廢を見、その昔の豪華をしのんで作つたので、卽ち士誠を弔つたのである。

【詩意】城中の苑囿は、秋風の吹くに任かせて、草の茂みも深く、往日の豪華は、すべて、この中に向つて消えて仕舞つた。張士誠の號を僭せしは、さながら、趙佗が南越に在つて、帝と稱せしと同じく、ほんの一時の空威張に過ぎず、その眼前の榮華に甘んじて、中原に討つて出やうとか、四海を統一しやうとか云ふ大志なきは、丁度、劉表が荊州に據つて、誰をも助けず、はじめから爭亂を鎮定する心なかりしと一般。そこで、明の太祖が南に起り、その兵が推し寄せると、一たまりも溜まらず、灌張は忽ち破國の否運に臨み、夜半、俄に齊雲樓に火を縱つて、幾多の羣妾侍女は、ここで焚死し、十年の久しき、專ら貯蓄を事としたのは、彼の董卓が郿塢に金銀を藏して置いた樣なものであるが、氣の毒ながら、何の效果もなかつた。興廢は、唯だ一場の夢の如く、今日、其跡を尋ねる人とてはなく、首を回らして顧望すれば、一帶の青山、落日を帶びて曇り、形勝むなしく存するも、人すでに在らず、寂しさ、愈よ增すのみである。

【餘論】前聯は、典故を用ひて、恰も適確であるし、後聯は、二句の中に、その興亡を道ひ得て盡し

て居る。この詩は、趙甌北が律體中の佳作だといつて推賞した程あつて、亦た實に間然するところなきものである。

喜幼文北歸

幼文の北に歸るを喜ぶ

風塵萬里損光輝。　風塵萬里、光輝を損す、
(一)舊面相逢却訝非。　舊面、相逢うて、却つて非なるを訝る。
在路定留經處詠。　路に在つて、定めて留む經處の詠、
還家猶著去時衣。　家に還つて猶ほ著く去時の衣。
久留遠土(二)蟲蛇雜。　久しく遠土に留まつて蟲蛇雜はり、
忽解高羅雁鵠飛。　忽ち高羅を解いて雁鵠飛ぶ。
尙念(三)梁園三二客。　尙ほ念ふ、梁園三二の客、
與君同去不同歸。　君と同じく去つて同じく歸らず。

【字解】(一) 舊面　むかしの儘の顏容。
(二) 蟲蛇雜　異類が雜つて住む。
(三) 梁園　梁の孝王、園を治め、又天下の客を招致せしこと、前に數ば見ゆ。

【題義】幼文は徐賁。淮張、閫を開きしとき、召し出されたが、未だ幾ならずして、張羽等と共に避けて吳地に歸つて來たので、北歸は、卽ち此事を指したものであらう。

【詩意】君は、風塵萬里、隨分辛苦した爲に、顏の色つやも無くなり、一寸逢つても、むかしの俤は、丸で無くなつたかと思ふ位。往返の途すがら、その經過した處處の題詠を留めしなるべく、家に還つても、相變らず、出かけた時の舊衣を著けて居る。久しく遠地に在つて、蟲蛇と雜居したが、高處に張つた羅が解かれた爲に、雁鵠は自由に飛ぶことを得、從つて、君も今、ここで歸つて來られたのである。しかし、梁園二三の客は、君と一處に去つたが、なほ引き止められて居るのか、ともに歸つて來ないのは、聊か心配の種である。

送宋孝廉南康葬親

宋孝廉の南康に親を葬るを送る

長揮客淚楚雲東。　長く客淚を揮ふ楚雲の東、
故國江山百戰中。　故國の江山、百戰の中。
(一)遺柩十年嗟未掩。　遺柩十年、嗟す未だ掩はず、
歸舟千里喜纔通。　歸舟千里、わづかに通ずるを喜ぶ。
遠途敢避風濤惡。　遠途敢て避けむや風濤の惡きを、

【字解】(一) 遺柩　遺櫬に同じ、死骸を入れた儘で、まだ葬らぬ靈柩。

舊隴應知草樹空。　舊隴應に知るべし草樹の空しきを。

料得南岡廬宿處。　料り得たり、南岡廬宿の處、

夜深猿鳥泣西風。　夜は深く、猿鳥、西風に泣く。

【一】舊隴　もとの墓地。

【二】廬宿　墓上に廬を造つて、喪を送ること。

【題義】説明に及ばぬ。但し、宋孝廉は、如何なる人か分からず、無論、軍咨の職に居た宋克とは鄕貫を異にして居る。一統志に「南康は、春秋の時には、吳楚たり、戰國には楚に屬す」とある。

【詩意】君は久しく楚雲の東なる此處吳の地に在つて、常に客涙を揮ひ、故國の南康は、江山百戰を經、なかなか危險で歸れない。そこで、父の遺柩は、十年の久しき、まだ葬を終へなかつたが、今日、路がやつと通じた爲に、千里の遠きを舟で歸つて行かうとして居る。その途中、風濤の險惡位は、少しも恐れず、やがて、元の墓地に往つて見ると、戰後ひどく荒れて、草木だに無い位。南岡に廬を結んで喪を送つて居ると、夜深き時、そこに宿して居る猿鳥が、西風に泣いて、悲しい聲を發するであらう。

送王孝廉游京回錢塘

王孝廉が京に游び、錢塘に回るを送る

客游南北再逢春。　南北に客游して、再び春に逢ふ、

幾驛煙花一騎塵。　幾驛の煙花、一騎の塵。

觀國舊逢朝闕使。　國を觀て、舊と逢ふ闕に朝するの使、

還家今作渡江人。　家に還つて、今、江を渡るの人と作る。

雪迎酒氣消應早。　雪は酒氣を迎へ、消ゆる應に早かるべし、

柳逐歌聲發更新。　柳は歌聲を逐うて、發する更に新なり。

此日腰間垂赤組。　この日、腰間、赤組を垂る、

不須猶愧故鄕親。　須ひず、猶ほ故鄕の親に愧づるを。

【字解】【一】再逢春　二年を經過した。

【二】觀國　易に觀國之光、利用賓于王となつて、觀光の爲に上京すること。

【三】垂赤組　赤い印綬、縣令の印信。

【題義】説明に及ばぬ。但し、この人は、上京して任官し、それから、赴任の途次、故鄕の錢塘に立ち寄るものらしい。

【詩意】君は、廣く南北の各地に客游して、すでに二年を經過し、いつでも、唯だ一人で、到る處、亭驛の花を看過ごした。曩に觀光の爲に上京せし時は、折よく闕に朝する使に逢つて、これと同行したが、ここに家に歸るに際して、又ぞろ江を渡ることに成つた。今しも、雪は酒氣を迎へて、早く消えるであらうし、柳は歌聲につれて、新に芽を吹くことであらう。君は、頃ろ任官して、現に赤い印綬を腰間に垂れて居るから、故國の親舊に對しても、格別愧づることもあるまいと思はれる。

感懷次蔡參軍韻　　感懷、蔡參軍の韻に次す

（一）擊筑無人識漸離。　筑を撃つも人の漸離を識るなく、
客依孤館獨凄其。　客は孤館に依つて獨り凄其。
著書未解成新語（二）。　書を著して、未だ新語を成すを解せず、
把酒聊因覓舊知。　酒を把つて、聊か因つて舊知を覓む。
（三）燕塞風多寒水急。　燕塞、風多くして寒水急なり、
（四）梁園雪早凍雲癡（五）。　梁園、雪早くして凍雲癡なり。
年來只念江東去。　年來、只だ江東に去るを念ふ、
下馬碑陰看色絲（六）。　馬を下つて、碑陰に色絲を看る。

【字解】【一】擊筑　史記荊軻傳に「易水の上に至る、すでに祖して道を取る、高漸離、筑を撃つ、荊軻和して歌ひ、變徵の聲を爲し、士、皆涙を垂れて涕泣す」とある。【二】新語　史記陸賈傳に「高帝、賈に謂つて曰く、試に我が爲に亡秦の天下を失ひし所以、わが之を得たる所以のもの何なるかを著せと。陸生、乃ち爲に粗ぼ存亡の徵を述べ、凡そ二十篇を著し、號して新語といふ」とある。【三】燕塞　燕北の邊塞、長城を指す。【四】梁園　前に「喜幼文北歸」の詩中にも見ゆ。【五】凍雲癡　癡はしつッこいといふ樣な意、杜牧の詩に臘雪一尺厚、雲凍寒頑癡とある。【六】色絲　前に卷二、主客行の詩中にも引いて置いたが、曹娥の碑は、邯鄲淳の撰文、後に蔡邕が之を賞して、字を題した。これに就いて、世說に「魏武、かつて曹娥の碑下を過ぐ。楊修、碑背の上を見るに、黃絹幼婦、外孫齏臼の八字を題す。魏武、修に問ふ、解するや否や、と。答へて曰く、解す。魏武曰く、卿、未だ言ふべからず、わが之を思ふを待て、と。行くこと三十里。魏武、乃ち曰く、吾、すでに得たり、と。修をして別に知るところを記せしむ。修曰く、黃絹は色絲なり、字に於て絕たり。幼婦は少女なり、字に於て妙なり。外孫は女子なり、字に於て好たり。齏臼は受辛なり、字に於て辭たり。謂はゆる絕妙好辭なり、と。魏武の記、修と同じ」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】たとひ筑を撃つとも、これが高漸離といふことは誰も識別して呉れず、平生會心の友なき上は、ひとり孤館に依つて、寂しさ愈よ增さるばかり。書を著しても、帝者の問に應じて、新語を撰して上るといふ運びにも立ち到らず、酒を把つて聊か舊知を探がし求めるだけである。風は遠く燕塞より來つて、寒水急に流れ、雪は早く梁園に降り、凍雲はしつッこくて、容易に散じて仕舞はない。われは、年來、江東に出かけて、馬を曹娥の碑邊に下り、蔡邕が碑陰に題したといふ黃絹幼婦云云の字を見たいと思ふが、この希望だに何時達し得べしとも思はれず、まことに、慨歎すべき刻下の境涯である。

寄錢塘方員外　　錢塘の方員外に寄す

尋常此別事難同。　尋常、この別、事、同じうし難し、
不意音書得再通。　意はざりき、音書再び通ずるを得むとは。
君病尚留多難後。　君の病、尚は留む多難の後、

我吟方向亂愁中。　わが吟、方に向ふ亂愁の中。
殘煙廢郭山猶在。　殘煙廢郭、山、猶ほ在り、
落日空城歲欲窮。　落日空城、歲、窮まらむと欲す。
借問西湖舊梅樹。　借問す、西湖の舊梅樹、
如今還剩幾多叢。　今の如き還た剩す幾多の叢。

【題義】説明に及ばぬ。但し、方某は如何なる人か分からぬ。

【詩意】この別は、いつものと同一にし難き事情があつたのに、音書が再び通ずることが出來たのは、まことに豫想だにせざりしところである。君の病は、多難の後、なほ全く癒えず、わが吟は、亂愁の中に向つて、容易に止めることも出來ない。殘煙は廢郭を罩めて、山のみは依然として存し、夕日は空城に滿ちて、歲は盡きむとして居る。試みに問ふが、西湖の邊なる舊日の梅樹は、兵亂を經て、今幾株を餘して居るか、定めて、荒涼を免れぬことであらう。

【餘論】後聯は慘痛滿目。廢郭は城壁を云ひ、荒城は城內を云つたのだから、二句は決して合掌でないといふことを此に斷つて置く。

秋日江館詠懷

秋日江館詠懷

十年世事漸多更。　十年世事、漸く多く更はる、
自歎而今豈後生。[一]　自ら歎す、而今、豈に後生。
未有佳兒書漫讀。[二]　未だ佳兒あらず、書、漫に讀み、
既無俗客酒頻傾。　すでに俗客なく、酒、頻りに傾く。
煙生遠塢聞雞唱。　煙は遠塢に生じて、雞唱を聞き、
潮落平沙見蟹行。　潮は平沙に落ちて、蟹の行くを見る。
秋後思歸凡幾度。　秋後歸るを思ふ、凡そ幾たび、
夕陽江上望高城。[三]　夕陽江上、高城を望む。

【字解】【一】後生　後進の書生、大全集に復生に作つてあるが、さうすると、意味が大分違つて來る。
【二】未有佳兒　世說に「張蒼梧は、乃ち張憑の祖。かつて、その父に語つて曰く、われ汝に如かずと、憑の父、未だ所以を解せず、蒼梧曰く、汝、佳兒ありと。憑時に年數歲、手を斂めて曰く、阿翁、豈に宜しく子を以て父に戲るべけむや」とある。
【三】高城　高い城壁。

【題義】説明に及ばぬ。これは、婁江の寓居で作つたのであらう。

【詩意】十年の間に、世上の事は、だんだんと變更して行くものが多く、われとても、而今、後進の士だといつて、引ッ込んで居る譯にも行かないが、唯だ其才なきは、慨歎に堪へぬ次第。不幸にして、未だ佳兒あらず、仍つて書物にのみ耽つて居るし、すでに、俗客が來ないから、暢氣に獨りで酒を傾

けて居る。日暮、煙は遠くの隄の邊に生じて、雞の叫ぶのが聞こえ、潮が引くと、平沙の上を蟹の横行するのが見える。秋に成つてから、蘇州に歸らうと思つたことは、すでに、幾たびか、その度ごとに、夕日の舂く大江の邊に、城壁の高く聳ゆるを望んで居る。

【餘論】後聯は、江館見るところを直敍して、如何にも境地にふさはしく、宛然たる畫中の景色である。

得亡友周履道記室在繫所詩次韻

亡友周履道記室の繫所に在るの詩を得たり、次韻

擬出罝羅再卜鄰。　罝羅を出でて再び鄰を卜せむと擬す、

死生俄判兩吟身。　死生俄に判つ兩吟身。

(三)百年豈料逢今日。　百年、豈に料らむや、今日に逢ふ、

四海何由見此人。　四海、何に由つてか此人を見む。

吳地有園花已盡。　吳地、園あり、花すでに盡き、

楚山無塚草空新。　楚山、塚なく、草空しく新なり。

【字解】〔一〕罝羅　罝は鳥を捕ふる網、羅は獸れて獸を捕ふるにも云ふ。〔二〕兩吟身　周履道と自己とを合稱して云ふ。〔三〕百年　周記室の死を云ふ。

一篇幽憤時時讀。　一篇の幽憤、時時讀む、

風雨寒燈夜獨親。　風雨寒燈、夜、ひとり親む。

〔四〕幽憤　賦の題が何かであらう。

【題義】周記室は、前に數ば見えて居た。繫所は牢獄。この詩は、亡友周記室の獄中の詩を讀み、仍つて、その韻に次したのである。

【詩意】君は、罝羅に比すべき牢獄を出で、わが居る處に來て、再び鄰をトして住みたいと考へて居たものの、一朝溘焉として逝き、君と吾と、兩個の吟身は、俄に死生を判つて、幽明、處を異にする樣な次第。君が百年の壽盡きて死せし後、ここに、今日に遇はうとは、もとより豫期しなかつたことで、四海の廣きも、如何にして、この人を見るを得べき。吳地には、君の庭園が有つたが、花は、すでに散り盡し、楚山には、君が墳墓、未だ營まず、草のみ空しく新である。その遺文たる幽憤の賦は、時時誦讀するが、いつもながら、風雨すさまじく、夜長くして、ひとり寒燈に親しみ、まことに、孤寂蕭條の想に堪へられない。

答呂志學山人見寄

呂志學山人の寄せらるるに答ふ

一罷僧房看竹期。　一たび罷む、僧房、竹を看るの期、

【字解】〔一〕看竹期　竹を看る

行吟何處復相隨。 行吟、何の處か復た相隨ふ。
煙波遠渚難尋路。 煙波遠渚、路を尋ね難く、
風雨幽窓忽送詩。 風雨幽窓、忽ち詩を送る。
故舊誰非嗟別者。 故舊、誰か別を嗟する者に非ざらむ、
鄕園同是憶歸時。 鄕園、同じく是れ歸るを憶ふ時。
莫愁孤館春寥落。 愁ふる莫れ、孤館、春寥落、
且向江干避亂離。 且つ江干に向つて亂離を避く。

【題義】呂志學は、前にも、その入道を送つた詩が見えて居た。名は勉。ここには、山人とあるから、道士に成る前のことだらうと思はれる。

【詩意】君と一處に僧房を尋ねて竹を看るといふ約束があつて、何かの都合で、ふいになつて仕舞ひ、その後、相隨つて行吟しつつ、何處へ往くといふ雅興もない。煙波は、遠くの汀渚を涵して、君の處に行く路は、尋ね難く、日夕相思に堪へざりし折から、風雨の幽窓にしぶきかかるに當つて、おもひがけずも、忽ち詩を寄せられたのは、まことに辱けない。君を知つて居る程の者は、誰とて、別を傷まぬものなく、故鄕でも、矢張、君の歸ることを切望して居る。しかし、孤館の春さびしきを愁ふるに

約束。
【二】寥落 寂しき貌。
【三】江干 江邊に同じ。

及ばず、江邊に亂離を避けた上は、極めて安心であつて、しばらく、其處に留まつて居るが善からうと考へる。

【餘論】前聯は流利切當、極めて、自然に出來てゐる處が面白い。

送殷孝章赴咸陽敎諭

殷孝章の咸陽敎諭に赴くを送る

獨抱遺經出董幃。 ひとり遺經を抱いて、董幃を出で、
秋風送騎入關遲。 秋風、騎を送つて關に入ること遲し。
用儒幸際千年會。 儒を用ひて、幸に際す千年の會、
造士欣爲一縣師。 士を造つて、欣んで一縣の師となる。
鴻雁雲低秦壘角。 鴻雁、雲は低る秦壘の角、
牛羊草沒漢陵碑。 牛羊、草は沒す漢陵の碑。
官游兼得觀形勝。 官游、兼ねて形勝を觀るを得たり、
莫向尊前嘆別離。 尊前に向つて別離を嘆ずる莫れ。

【字解】【一】遺經 聖人の書き殘した經典。【二】董幃 幃は帷、漢書董仲舒傳に「少にして春秋を治む、孝景の時、博士となり、帷を下して講誦し、弟子傳へて、久次を以て相授業す。或は其面を見るなし。蓋し三年、園を窺はず、その精、かくの如し」とある。【三】入關 關は函谷。【四】官游 官となつて、地方を巡歷する。

【題義】殷孝章は、太倉州志に「殷奎、字は孝伯、一字は孝章、端厚沈默、性復た穎悟。はじめ易を

盛德瑞に授かり、すでにして、春秋を楊維楨に授かり、刻苦古しへを學び、澹然として進取の意なし。浙東僉憲李朮魯昱、奎の名を聞き、敎席に擧げしが起たず。至正丙申、州治、崑山に復し、有司訓導儒學に延致す。奎、侍養の便を以て、はじめて命に應ず。洪武の初、學制を新にし、四年、敎へて成るあるを以て、敎諭に擧げられ、吏部高等に試みらる。司選者、例として、奎に郡縣の職を授けむとす。奎、力めて母の老を以て辭す、意に咈り、遂に西安に調せられ、咸陽に之く、ひとり母老い、道遠く、克く就養せざるを以て、抑鬱疾を成して卒す。門人私に謚して文懿先生といふ」とある。この詩は、殷孝章が咸陽敎諭となつて、遠く其地に赴任するのを送つたのである。

【詩意】君は獨り聖人の遺經を抱いて、董仲舒の樣な帷の中より出で、秋風に向つて、四馬を驅り、やがて函谷關内に入られるさうである。今や、儒を任用することは、千年以來の會遇であつて、一縣の師になつて英才を敎育し、士を造ることは、君も滿足するところである。咸陽附近の景色はといへば、鴻雁飛び度つて、雲は秦代の古壘の角にかかり、牛羊の游ぶ處、亂草は漢陵の碑を埋める位で、荒涼も亦た甚しい。しかし、官游の序に、形勝を觀ることの出來るのは、まことに結構で、尊前に於て別離を嘆ずるに及ばず、機嫌よく出かけたら善からうと思ふ。

【餘論】後聯は懷古の絕調で、劉滄・許渾等と其勝を爭ふものである。

送基上人希載赴天界

基上人希載の天界に赴くを送る

(一)水郭春寒壓柳絲。　水郭春寒くして柳絲を壓す、

扁舟遙送(二)道林支。　扁舟遙に送る道林の支。

(三)日邊(四)金界曾游地。　日邊の金界、曾游の地、

雪後滄江欲渡時。　雪後の滄江、渡らむと欲するの時。

座近香爐朝聽法。　座は香爐に近く、朝に法を聽き、

窓傳(五)鉢韻夜談詩。　窓は鉢韻を傳へて、夜、詩を談ず。

(六)龍河舊日(七)棲禪侶。　龍河舊日棲禪の侶、

想拂(八)雲牀正(九)待師。　想ふ、雲牀を拂うて正に師を待つを。

【字解】【一】水郭　婁江を云ふのであらう。【二】道林支　即ち支遁、字は道林、晉代の高僧、前に卷五、南峰寺の詩中に見えて居た。【三】日邊　日は天子の象、皇城附近。【四】金界　寺を云ふ。【五】鉢韻　鐵鉢を敲く響、前に卷五、答衍師の詩中叩鉢の項に見ゆ。【六】龍河　即ち護龍河、南京なる宮城の外濠、前に送王檢校鎬赴北平の詩中に見ゆ。その濠の近くに天界寺がある。【七】棲禪侶　その寺に居て禪を學んで居る坊さん達。【八】雲牀　即ち禪牀。【九】待師　師は即ち基上人。

【題義】基上人希載といへば、希載は字で、基は法諱を節略して云つたのであらう　天界に入る位だから、いづれ高僧に相違ないが、その詳は分からぬ。天界は、寺の名で、前に數ば見え、かつて元史編纂が開局せられ、靑邱等、編纂員の面面が一處に寄寓して居た處である。この詩は、基上人が上

京して天界寺に赴くのを送つたのである。

【詩意】 水邊の城郭、春、なほ寒くして、柳の絲は押さへ付けられた儘、なかなか伸びず、この時、支道林の如き高僧は、扁舟に送られて、遥に南京に向つて行くとのことである。お膝元なる名刹は、師が曾て遊歴した處であるし、今や雪後の大江を渡らむとするに際し、ここに、送別の宴が催された次第。一たび天界に至れば、師の座の近くには、香爐が置かれて、朝には、老師の法を演ずるを聽聞し、窓からは、鉢を敲く音が聞こえて、夜は詩の話をするに相違なく、寺中に居る昔馴染の禪侶どもは、豫め禪牀を掃つて、師の著到を待つて居るであらう。

寄永寧丁明府兼簡達君先生

永寧の丁明府に寄せ、兼ねて達君先生に簡す

政成(一)百里自材優。　政成つて、百里、自ら材優なり、

莫厭青袍映白頭。　厭ふ莫れ、青袍の白頭に映ずるを。

盜散(二)山棚城少閉。　盜は山棚を散じて、城閉づること少く、

渠通(三)田澮水多流。　渠は田澮に通じて、水多く流る。

(四)陸渾莊上雞鳴午。　陸渾莊上、雞、午に鳴き、

(五)緱嶺祠前鶴去秋。　緱嶺祠前、鶴、秋に去る。

沽酒更須煩縣令。　酒を沽ふ、更に須らく縣令を煩はすべし、

洛中時件(六)玉川游。　洛中、時に玉川を伴うて游ぶ。

【字解】【一】百里　蜀志蔣琬傳に「諸葛亮、請うて曰く、蔣琬は社稷の器、百里の才に非ず」とある。【二】山棚　唐書呂元膺傳に「東畿は西南、鄧虢に通じ、川谷曠深、麋鹿多く、人、射獵を業とし、趫悍善く鬪ふ、號して山棚といふ。元膺、募つて三河の子弟となし、官城を衞らしむ」とあり、東坡の詩に山棚盜散人安業とする。すると、山棚は、山中趫悍なる人民。【三】田澮　考工記に「畎の水、遂に遶し、遂の水、溝に遶し、溝の水、洫に遶し、洫の水、澮に遶し、澮の水、專ら川に遶す」とあつて、澮は溝瀆の大なるもの。【四】陸渾　一統志に「河南府嵩縣陸渾山、漢末の高士胡昭、ここに隱る」とある。【五】緱嶺　一統志に「河南府偃師縣緱山は、周の靈王の太子升仙の所、上に石室・飲鶴池あり」と見ゆ。【六】玉川　唐書盧仝傳に「仝は幽度濟源の人、玉川子と號す、博學にして志操あり、かつて月蝕の詩を作つて、元和の逆黨を譏る。韓愈、洛陽の令となり、その詩に工なるを稱す、曰ふあり、玉川先生洛城裏、破屋數間而已矣」とある。ここでは、逢君先生に比して云ふ。

【題義】 題下の原注に「永寧は洛陽に屬す。丁、近ごろ、平盜浚渠の功を布く。達君は前進士、その邑に寓す」とある。丁は明府といふから、縣令であるが、名字不詳。達君は、多分、字であらうが、姓名不詳。この詩は、永寧縣令丁某に寄せ、且つ手紙に代へて、達君先生に寄せたのである。

【詩意】 丁君は百里の小縣を治めて、政績を擧げ、その材器の優良なることは、自然明かであつて、年老いても微官に居り、青袍の白頭に映ずることを厭ふにも及ばぬ。近ごろ、山棚に比すべき盜民を追ひ散らした爲に、城門も閉ぢることが少くなり、小渠は田間の溝澮に通じて、水は多く流れて、不

足も無い樣になつた。陸渾の莊上に於ては、雞が長閑かに眞晝に鳴き、緱嶺の祠前に於ては、鶴が秋に舞ひ上つて、流石に見るべき景色がある。君は、折折洛陽に遊びに往くといふが、酒を買ふ爲に、その地の縣令を煩はし、かの玉川子に比すべき達君先生を伴うて遊んだならば、興會長しへに盡きぬことであらう。

江山晚眺圖

江山晚眺の圖

(一)一髮青山(二)斷雁邊。　一髮の青山、斷雁の邊、
(三)渚宮樓閣暮雲連。　渚宮の樓閣、暮雲連る。
煙波彷彿江南意。　煙波、彷彿たり江南の意、
嵐柳依稀峽外天。　嵐柳、依稀たり峽外の天。
釣艇歸時風動葦。　釣艇歸る時、風、葦を動かし、
僧鐘起處日沈煙。　僧鐘起る處、日、煙に沈む。
觀圖忽起(四)滄洲想。　圖を觀て忽ち起す滄洲の想、
身墮(五)黃塵又幾年。　身、黃塵に墮つる又幾年。

【字解】(一)一髮青山　周權の詩に青山一髮認邵州とあり、東坡の詩に青山一髮是中原とある。(二)斷雁　一つ離れた雁。(三)渚宮　楚の章華臺、前に卷二、竹枝詞に見ゆ。(四)滄洲　東海中の仙境。(五)黃塵　土ほこり。

【題意】説明に及ばぬ。

【詩意】一つ離れた雁の飛び過ぐる處に、青山一髮、長く引き、渚宮の樓臺は、暮雲と連つて居る。煙波渺茫たる景色は、江南の氣分に彷彿として居るし、嵐氣を帶びた柳の彼方には、峽外の天が、ぼんやり見える。釣舟が歸る時、夕風颯として岸の葦を吹き靡かし、寺の鐘の鳴る處、日は煙中に沈んで仕舞ふ。今、この圖を觀ると、東海中の仙山を尋ねて見たいと思ふ志も起るが、この身、黃塵に墮つること又幾年、全く俗化して仕舞つたのは、まことに、歎息に堪へぬ次第である。

江上春日遣懷

江上春日、懷を遣る

江上逢春已兩回。　江上、春に逢うて已に兩回。
客中時序苦相催。　客中の時序、苦に相催す。
蛛營戶網蟲初出。　蛛は戶網を營んで、蟲、初めて出で、
雀借簷巢燕未來。　雀は簷巢を借りて、燕、未だ來らず。
年少卽閒眞信拙。　年少、卽ち閒、眞に拙なるを信ず、
詩成雖好可言才。　詩成る、好しと雖も、才と言ふべけむや。

如今欲向南鄰叟。今の如き、南鄰の叟に向ひ、
旋乞垂楊繞舍栽。旋つて垂楊を乞うて、舍を繞つて栽ゑむと欲す。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】ここに江上に寄寓してより、春に逢ふこと、すでに二回、客中の時候は、催促する樣に忙がしげである。蜘蛛は、戸に網を張つて、待ち構へて居ると、小蟲が出て來て引ッかかるし、雀は蒼の古巣を借りて、我が物顔をして居るが、幸にも、燕は、まだ歸つて來ない。年少の頃、閒だといつて、無爲に過ごすのは、まことに拙劣といふことが、今やつと分かつたし、詩が出來て、かなりに言ひおほせた處で、才と云ふには足らぬことである。今の處、南鄰の叟の處に往つて、柳を分けて貰ひ、それを家の周圍に植ゑやうと思つて居る。

別江上故居

江上の故居に別る

家具初移借釣船。家具、はじめて移り、釣船を借る、
臨行魚鳥亦悽然。行くに臨んで、魚鳥、亦た悽然。
城南徙舍惟三里。城南、舍を徙す惟だ三里、

【字解】【一】家具　孟郊の詩に借車載家具、家具少於車とある。

渚北閒居已二年。渚北、閒居、すでに二年。
花墅回看春水外。花墅、回看す春水の外、
草堂留掩夕陽邊。草堂、留めて掩ふ夕陽の邊。
多慚父老相留意。多く慚づ、父老相留むるの意、
來去聊隨大化遷。來去、聊か大化に隨つて遷る。

【二】大化　自然の運命。

【題義】説明に及ばぬ。但し、これは、青邱の晩年、婁江より蘇州城中に移居した時の作であらう。

【詩意】引ッ越に就いて、家具を移す爲に、釣り舟を借りて載せ、さて行かうとすると、心なき魚鳥までが、別を惜んで悽然たる氣色。移る先は城南で、ここから僅に三里を隔てるだけであるが、おもへば、ここ渚北に閒居して、すでに二年を經過した。春水の外に花咲き滿つる別墅を顧みて、流石に名殘は盡きず、草堂は、その儘、夕日の中に閉ぢて仕舞つた。父老どもが懇に引き留めて呉れる其厚意は、まことに辱いが、われは、唯だ自然の運命に從つて、來去するのみで、格別、意味のある譯ではない。

永樂禪寺

永樂禪寺

鬢隨鶴羽總秋零。　鬢は鶴羽に隨つて、すべて秋零ち、
幾日江行思渺冥。　幾日か、江行、思渺冥。
夜臥客舟聞詠史。(一)　夜、客舟に臥して詠史を聞き、
朝過僧榻共談經。　朝に僧榻を過ぎて、共に經を談ず。
沙洲雨足蕁初紫。(二)　沙洲雨足つて、蕁、初めて紫に、
林塢霜遲橘尙靑。(三)　林塢霜遲くして、橘、尙ほ靑し。
後欲尋公曾到處。　後、公が曾て到る處を尋ねむと欲す、
留詩應共竹間亭。　詩を留めて、應に共にすべし竹間の亭。

【字解】【一】詠史　晉書袁宏傳に「宏、逸才あり、かつて詠史の詩を爲ろ、これ、その風情の寄するところ。少にして孤貧、運租を以て自ら業とす。謝尙、時に牛渚を鎭す、秋夜、月に乘じ、左右と江に泛ぶ。會ま、宏、舫中に在つて諷詠し、聲、すでに淸會、詞又藻拔、遂に駐聽これに久しうし、遣し問ふ。答へて曰く、これ袁臨汝郎の誦、詩は卽ち其詠史の作なりと。卽ち迎へて舟に升せ、これと談論し、申旦寐らず」とある。

【二】蕁初紫　羅隱の詩に「盤蕁紫線蕁初熟」とある。【三】橘尙靑　王羲之帖に「橘三百枚を奉す、霜、未だ降らず、未だ多く得べからず」とある。

【題義】題下の原注に「寺は吳江縣雙楊村に在り」と記してある。

【詩意】わが鬢は、鶴の羽の如く白くなり、秋に遇へば、すべて脫け落ちる。その上、ここ幾日か江上を行き、思、渺冥に入つて、自然愁を免れない。夜、客舟に臥して岸上に詠史の詩を誦する聲を聞き、朝には永樂寺を訪ひ、僧榻の邊で、御經の話をして居る。沙洲には、雨が十分降つた爲に、蕁菜も太く肥えて紫色をなし、林塢には、霜降ること遲きが爲に、蜜柑は、まだ靑い。やがて、寺僧の曾て到れる處を尋ね、共に竹間の亭子に、題詩を留めたいと思つて居る。

【餘論】この詩は、永樂禪寺を詠じたものとすれば、寺の事が、碌碌言つてないから、斷じて、題に協はず、むしろ、江行途中の作として見るのが、穩當であらう。第七句、尋公の公は、誰とも分からず。要するに、題の書き方が不十分である。沙洲・林塢の一聯は、晚秋江村の景を描いて、さながら畫中に見るが如き活趣がある。

309
65

昭和五年七月十七日印刷
昭和五年七月二十日發行

續國譯漢文大成 文學部第二十一卷 【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者 國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者 鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者 渡邊一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地

印刷所 中外印刷株式會社
東京市小石川區西古川町二十五番地

發行所 國民文庫刊行會
電話神田（五三五五番 八三八番）
振替東京一八五七二番

終